
のび太のBIO HAZARD 『THE NIGHTMARE』

MONDOERA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

のび太のBIO HAZARD『THE NIGHTMARE』

【Nコード】

N8893H

【作者名】

MONDOERA

【あらすじ】

2004年7月28日、3日ぶりに家に帰ったら、両親が変になっていた。外には変な人達が徘徊していた。何故こんな事になっていたのか。そしてのび太達はこの謎を解き、街を脱出出来るのか？この小説はフリーゲーム「のび太のBIOHAZARD」を下敷きにして創られたファンフィクションです。

街の異変

2004年 7月28日

【僕達は夏休みの初日にドラえもんにとある無人島へ連れて行ってもらった。

誰にも邪魔されず好きなことをやって思う存分バカンスを楽しんだ。そして、帰宅の日・・・

三日も見えていない家族の顔が見れると思うとなんだかうれしい気分になる。

「ただ、待っていたのは悪夢だった。」

のび太の部屋の中にどこでもドアが現れた。そしてその中から4人の少年少女と1体の青いロボットが出て来た。

「うわぁゝすげー楽しかったぜ!!」

「あゝやつとママに会えるよ。」

「いざ家族の顔を何日も見ないとなるとこいしい思いをするものね。」

「

「でも楽しかったよ。ありがとうドラえもん。」

「おやすいごようだよ。じゃあ僕は久しぶりにミィちゃんに会いにいつてくるよ。」

「そんじゃあ俺達も帰るからな。」

「じゃあね、のび太さん。」

「うん、バイバイ。」

と、会話を交わした後、のび太以外の3人は部屋を出て、玄関から外へ出た。部屋から出たのを見ると、のび太はバックの中の荷物を少し整理し、

「僕もママに顔を見せてこなきゃ。」

と、言い、のび太は階段を下りて1階のキッチンへ向かった。

「ママただいま。・・・あれ、ママどうしたの?」

のび太の母親である野比玉子は屈んで何かをしていた。

横切るルートしかないか。」

と言うと、のび太は急いで倉庫に向かった。倉庫を目前にして、のび太は驚いた。

「うわっ！かなりの数の変な人が居る！！血だらけだし、変な呻き声もあげてるよ。だけど学校に行くには、この倉庫を通らなきゃいけないし。」

と、のび太が言っているうちにも、変な人達は近づいて来る。

「くっ。ここはなんとか擦り抜けるしかない。」

と言うなり、のび太は姿勢を低くし、全速力で駆け抜けた。そして、倉庫の中に半ば逃げ込むように入った。

「ふう、なんとか逃げ切った……。ただここで休んでられない。休むのは学校に着いてからにしよう。」

のび太はすぐに体を動かした。倉庫を出た所も火災がたくさん起きていたが、一つだけ進める道路があった。

「よかった……。学校へは行けるぞ。皆も学校に逃げているといいけど。」

と、のび太は言い、歩いて学校へ向かった。

校門から学校の敷地内に入ると、ある光景を目にした。

「なんだあれ。……。うわっ、2匹の犬が死体を喰ってるよ。わっこつち見た！！」

次の瞬間、2匹の犬はのび太に走って向かってきた。

「が、学校は目の前だ。学校に逃げ込もう。」

のび太は急いで学校に入った。

「ふう、なんとか逃げ切った。とりあえずそこらへんの部屋で休もう。」

AREA 1 『仲間との邂逅』

のび太の目の前には1つの大きな扉があった。

「あの教室……確か保健室だったな。一度入って休もう。」
と、言つて、扉を開けて中に入った。

「の、のび太じゃねえか！」

保健室の中には、ジャイアンや見慣れた人物、数人の、見ず知らずの人達がいた。

「ジャイアン！それにみんなも……！」

「のび太さん。無事だったのね。」

「ノロマなお前がよく生き残ってたな。……それにしてもあれは何だったんだ？前に映画で見たゾンビっていうのに似ているけど。」
スネ夫が言つと、ジャイアンも喋った。

「それなら俺も知っている。死んだはずの人間が人を襲うって言う内容だった気がする。これからあの変な奴等をゾンビと呼ぶことにしよう。」

ジャイアンとスネ夫の会話が終わると、のび太は気になっていることを、ジャイアンに尋ねた。

「……この人達は？」

「とりあえず学校に逃げてきた生存者達だ。皆遠くに行つてて帰ってきたらこの騒ぎに巻き込まれたんだとよ。」

「そうか……あなたは確かこの学校の生徒会長の……」

とのび太が言つと、のび太が見ていた一人の女の子が喋った。

「緑川聖奈よ。宜しくね。」

次に、長椅子に座った。男の子が喋った。

「俺は同級生の翁蛾健治だ。」

次にその傍に居る小さな男の子が喋った。

「僕は一年生の山田太郎。」

そして最後に、ベッド付近に居る40代くらいの成人男性が喋った。

「私は町内会長の金田正宗だ。」

のび太も自己紹介をした。

「僕は野比のび太。宜しく。」

一通り紹介が終わると、ジャイアンが話をした。

「とりあえず今はここで待機しているが直にここもやばくなるかもしれないね。これからどうするか考えてるんだが今ひとつ思いうかばねえんだ……」

ジャイアンは考え込んでいた。

のび太は聖奈と言う女の子の元へ向かった。

聖奈の方から喋りだした。

「あなたは、野比のび太さんでしたよね。」

「うん。君は緑川聖奈さんでしたよね。」

「はい。そうです。」

「じゃ、宜しく。」

「こちらこそ。」

その頃、長椅子に座っている健治は一人で喋っていた。

「まったくよ、どうなっちゃってんだ！なんなんだあの化け物共は！？護身用のナイフがあつたから命からがら逃げてきたけどこんな狂ってやがるぜ！」

傍にいた太郎という1年生の男の子も喋りだした。

「僕のパパもママも皆お化けに襲われてお化けの仲間になっちゃった。パパ……ママ……」

太郎は軽く泣いていた。

そしてまだのび太と聖奈は会話をしていた。

「あの、のび太さん。」

「え、何ですか？」

「この学校、治療用の薬品となる薬草をプランターに植えているそうなんです。もし、見つけたら私に渡してくれませんか？」

「どうするんですか？」

「私、薬草の調合は少し出来るので、傷を治すことが出来ます。」

「そうなんですか。是非お願いします。」

のび太と聖奈が話し終わると、ジャイアンが皆に向かって、話し出した。

「よし！じゃあ皆で分かれてこの街から脱出する方法を探そう。」

すかさずスネ夫が返した

「確かに効率いいけど・・・危険も大きくないかい？」

健治も話に加わる。

「俺は別にいいけどよ。女、子供はどうすんだ？」

そしてジャイアンが自分の意見を話した。

「1チーム2人ずつに分かれて探索をしようぜ。」

それを聴くと、太郎はすかさず近くの健治の元に走った。

「じゃあ僕このお兄ちゃんに行く！」

「ケツ、ガキのおもりは苦手なんだがな。」

健治は嫌々ながらも太郎と同行することにした。

「僕は聖奈さんを連れて行くよ。」

スネ夫は聖奈を誘った。

「宜しくね。スネ夫君。」

聖奈もそれに同意した。

その後、のび太はあることを思った。

（つて事はもしかして・・・静香ちゃんと！！！！）

すかさず静香が言った。

「それなら私は武さんと行くわ。」

「ええ～～～～！！じゃあ僕は金田さんと・・・」

金田はすかさず喋った。

「私は絶対に行かないぞ！ここで救助隊が来るのを待つ！！」

この場を仕切っているジャイアンが言った。

「つて事でのび太は一人な。」

「そんな～～～～！！！！」

のび太は嘆いていた。

ジャイアンは更に続ける。

「よし、それじゃあ俺と健治は2階を探索する。後の人は1階を探索してくれ。」

そしてスネ夫がある機械を持って喋った。

「さっき通信機を見つけたんだ。皆持つておくといいよ。」

「何かあつたらこれで連絡して皆で助け合つていきましょ。」

ジャイアンが皆に向かって言った。

「よし！それじゃあ全員散開！！」

しかし、太郎が申し訳なさそうに言った。

「そ、その前に僕トイレに行きたいんだけど・・・」

健治は普通に驚いた。

「はあ！？付き添いなんて俺は御免だぜ！」

健治は露骨に嫌な顔をした。しかし、スネ夫がのび太に向かって言った。

「のび太お前行けよ。」

のび太は怒つたような驚いたような顔をして言った。

「はあ！？なんで僕が！！？」

スネ夫は理由を言い出す。

「今、手が空いてるのはのび太だけだろ？いいから行つて来いよ。」
すると太郎が小さな声で言う。

「ああ・・・もう出そう・・・。」

「あー！ー！ー！もう解つた。！！早く行くぞ！！」

のび太は仕方なく引き下がった。そして無事にトイレの中に入れた。
のび太は個室の外から話し掛ける。

「まだ？」

太郎は応える。

「う・・・まだ・・・。」

「たくう・・・・・・・・・・・・ん？」

のび太は何かに気づいたようだ。

「太郎・・・もう少し出してる。」

太郎は呟く。

「・・・・・・え？」

「ああゝゝゝ。」

3体のゾンビが呻き声を出して近づいてきた。

「うわっ！3体もいる。太郎君もいるから今度は逃げられない。この場は凌ぐしかない。」

と言うと、のび太はポケットに入れてあったベレッタM92を出して構えた。

「僕だって逃げてばかりじゃない！射撃には自信がある！うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

のび太は向かい来るゾンビに向かって、銃を撃った。

バン！

激しい銃声をたてた。次の瞬間、3体の中の1体の首に直撃した。当たったゾンビは、首がもげて、仰向けに倒れた。だがしかし、残りの2体が近づいてくる。

「くっ、太郎には触らせないぞ！！！」

と言うと、のび太は一度距離をとってから、2体目に狙撃した。見事、頭に命中し、2体目も倒した。

「よし、あと1体。」

そしてのび太は、3発程撃った。ゾンビの腹部あたりに命中した。ゾンビはその場に倒れた。のび太は安堵の表情を浮かべ、太郎に話し掛けた。

「ふう・・・終わった。もう大丈夫だ。皆の所に戻るぞ。」

保健室に戻ると、のび太は、トイレでの出来事を皆に話した。

「なんとか無事に終わったよ・・・」

静香は感心していた。

「凄いわのび太さん。1人で3体のゾンビを倒しちゃうなんて。健治も感心していた。」

「へっ、やるじゃねえか。」

ジャイアンも喋った。

「のび太もやるようになったじゃねえか。スネ夫、どうだできたか？」

スネ夫は、保健室にあったパソコンを操作していた。

「ちよつと待って……よし！侵入成功。今から防火シャッターを開けるよ。」

スネ夫はどうやら学校の防災システムにハッキングをしていたようだ。

そしてジャイアンが皆に向かって話し掛けた。

「よし！それじゃあ別れて行動だ。皆幸運を祈る。」

ジャイアンと静香、健治と太郎は2階に向かい、スネ夫と聖奈、のび太は1階の保健室を出た所で話をしていた。

AREA 2 『行動』

スネ夫が話し出した。

「じゃ、僕と聖奈さんは南舎の北の方にある1年生の教室の方を探索するから、のび太は職員室と校長室を探索してくれ。」

のび太はそれに返す。

「うん、解った。」

のび太は職員室に行き、スネ夫と聖奈は1年生の教室に向かった。のび太が職員室のドアを開けると、およそ5体程のゾンビが居た。

「うわっ！ここにも居る！いちいち戦ってられない。職員室には何も情報が無さそうだし校長室に行くしかない。」

と言うとのび太は、ゾンビの間をすり抜け、校長室の中に入った。

「よかった〜。校長室には居ないな。でも入ったのはいいけど・・・これじゃあゾンビが入ってくるな。バリケードを造るか。」

と言って、のび太はそこら辺の机や椅子でバリケードを造った。

「造ったはいいけど・・・これじゃ僕も出られない。このバリケードも何時崩れるか判んないし。とりあえずこの辺りを探索するか。」

と言うとのび太は、部屋の中の探索を始めた。のび太はまず棚のほうを調べた。

「・・・棚には何もないか。なら次はこの金庫か。・・・4桁の暗証番号を入力しないといけないな。この金庫はまた改めて調べるか。次は・・・」

と言って、のび太は奥の方を調べた。その少し前、聖奈とスネ夫は1年生の教室を調べ始めていた。

「ここ、開きませんね。」

聖奈は1年4組の教室のドアを思いつき引き引いているがびくともしない。

「じゃあ次行こう。」

と、スネ夫が言うと、隣の教室のドアを開けた。すかさずスネ夫が

喋る。

「よしっ、ここは開くぞ。」

2人は慎重に中に入った。中には、1つの死体以外は何も変わったことは無かった。

「よし、この教室を調べよう。まず机に何か使える物が無いか調べよう。僕はこつちを調べるから聖奈さんはそっち半分を調べてくれ。」

「はい。解りました。」

2人は教室の机を全て調べたが特に何も見つからなかった。

「こつちは収穫なしか、聖奈さんの方は？」

「こつちも何もありませんでした。」

「それじゃあ次は掃除用具入れを調べるか。」

スネ夫は掃除用具入れを調べた。すると中から何かが入った箱が出てきた。スネ夫はそれを調べてみた。

「これは、・・・ハンドガンの弾だな。取っておくか。」

と言うと、スネ夫はポケットに9mmパラベラム弾の入った予備力ートリッジを入れた。

「次は教卓を調べましょう。」

と言って、聖奈が教卓を調べているとある物を見つけた。

「鍵がありました。これは、資料室の鍵ですね。」

「よし、じゃあ収穫もあったし、この教室はもう調べる所もないな。次へ行こう。」

とスネ夫が言うと、後ろで物音がした。ガシャーン！

「何だ！！」

窓ガラスが割れ、ゾンビ化した犬が入って来た。

「グルルルル。」

唸り声をあげてゾンビ犬が近づいてきた。スネ夫はゾンビ犬に向かって猟銃を構えた。

「コノオ！！喰らえ！！」

ダァン！スネ夫の持っていた猟銃が火を噴いた。見事にゾンビ犬の

胴体に命中した。ゾンビ犬は動かなくなった。

「ふう、
やつたか。」

「スネ夫さん凄いですね。何処でそんな猟銃なんて手に入れたんですか？」

「ああ、これは街で逃げていた時に、
獵師の人から貰ったんだ。」

「そうなんですか。」

「じゃあ、次の教室へ行こうよ。」

「はい。」

2人は会話を終わると、次の教室に向かった。しかし、どの教室のドアも開かなかった。最後の教室のドアが開かないことを確認すると、スネ夫が喋った。

「この教室で最後だけ、収穫は資料室の鍵だけか……。」

「はい。そうですね。」

「じゃあこれから資料室へ行つて探索するか。」

とスネ夫が喋ると、通信機が鳴った。

[illegible]

「ワッ何だ！」

「着信ですよ。スネ夫さん。落ちて着いてください。」

その聖奈の言葉を聞くと、スネ夫は落ち着いた。そして通信機を耳にあてた。

「もしも、のび太? どうしたんだよ。」

電話の主はのび太だった。

「ああ、ちよつとまずい事になった。」

「まずい事って何だよ。」

「まずスネ夫達と別れた後、職員室に入ったんだけど、ゾンビが予想以上にいて、とても戦えないから校長室に逃げ込んで来たんだけど、ゾンビが校長室に入ってこないようにバリケードを張ったんだけど、ゾンビがドアのところに集まってきて、バリケードを外すに外せないから脱出できないんだ。」

「えっ！そうなのか！よしっ、僕と聖奈さんは職員室に行く。のび

太はそれまで死なないようにバリケードを固めてくれ。」

「ああ、解った。なるべく早く来てくれよ。」

「ああ、急いで行く。」

と言うとスネ夫はポケットに通信機を入れ、聖奈に事情を説明しながら職員室へ走っていった。しばらくすると、職員室の前に着いた。すると聖奈が呟いた。

「のび太さん無事でいて。」

意を決して2人は中に入った。スネ夫がゾンビを見ながら喋った。

「・・・5体ぐらいかこのゾンビ共は。」

そう言うと、5体のゾンビがこっちを向いて、近づいてきた。スネ夫が猟銃を構えて戦闘態勢に入る。

「僕がこの5体のゾンビを相手するから聖奈さんは後ろから何かが来ないか見張っていてくれ。」

「はい。解りました。」

と言うと聖奈は、ハンドガンを構えて周りを警戒した。一方スネ夫は5体のゾンビに猟銃を向けている。

「喰らえ!!」

と言ってスネ夫は猟銃を連射した。

「おお~~~~うおお~~~~。」

不快な呻き声をあげて5体のゾンビはその場に倒れた。

「どんなもんだい!!・・・さて、このドアの向こうにのび太が居るんだよな。」

と言うとスネ夫は、ドアの向こうの部屋に向かって思いっきり叫んだ。

「おいのび太!!ゾンビ共は始末したぞ!バリケードを外してくれ!」

その後すぐバリケードを外す音が聞こえ、中にはのび太が居た。聖奈がそれを見て言った。

「のび太さん!!無事でよかったです。」

「ああ、ありがとう。スネ夫に聖奈さんがいなかったらどうなって

いたか。」

「まっ、こんな時だし助け合っていくのが普通だろ。次から気をつけろよ。」

「ああ解ってるよ。」

「じゃあ探索を再開するか。」

とスネ夫が喋ると、聖奈が喋った。

「あっ、でもその前にちよっと休憩しませんか？疲れちゃって。」

「おっいいね、のび太、校長室にはゾンビは居なかったんだろ？」

「ああ、校長室はだいたい調べたから大丈夫だ。」

「よしっじゃあ校長室で休憩するか。」

と、3人の会話が終了すると、3人は中へ入っていった。

「校長室なんて初めて見ます。」

「まあ普通はこんな所なんて入らないからな。」

「ふう、疲れた。」

聖奈は石像の横に座り込んだ。すると、部屋の奥から物音がした。
ゴゴゴゴゴゴゴゴ！

当然3人は驚いた。

「な、何だ！？」

「な、何ですか！？」

先に部屋の奥を見たスネ夫が言った。

「奥に扉がある！！」

「なにっ、本当か！？」

「ええっ、何でしょう？」

しかし、聖奈が立ってその場から動いた途端、扉は消え去った。

「あれっ、消えたぞ。おかしいな。」

スネ夫は不思議がる。そして、のび太は考えていた。

「……………多分そうかな？」

のび太は独り言を言っていた。

「おいのび太、何独り言言ってたんだよ。」

のび太は言い出す。

「扉が消えた訳が解ったんだよ。……………多分。」
スネ夫が聞き返す。

「ん、消えた訳ってなんだよ。」

のび太は聖奈の方を向き、話し出す。

「聖奈さん。さっきその石像の横に座っていたよね。もう一度そこに座ってくれないかな。」

「ああ、はい！」

と、聖奈はさっきと同じ所に座った。すると、さっきと同じ物音がした。

ゴゴゴゴゴゴゴ！

「あつ、ドアが現れた。何で解ったんだよのび太。」

「僕の位置からは、ドアと聖奈さんの両方が見えるんだ。それで聖奈さんが動くのと、ドアが消えるのが同時に起こったのが見えて、もしかしたらって思ったんだ。」

のび太が見事な説明をすると、スネ夫は感心した。

「へえ口よく解ったなのび太。よし、聖奈さんはそこに居てくれ。」

僕達は中の探索をしているから。」

「はい、2人とも気をつけて。」

聖奈が言葉を掛けると、2人は警戒しながら中へ入っていった。中でスネ夫が呟いた。

「どうやらここは校長先生の趣味の部屋らしいぞ。」

「でも今はそんなこと言ってられないんじゃない？」

「まあ、非常事態だしな。ま、早く調べるか。僕は部屋の右半分を調べるからのび太は左半分を調べてくれ。」

「よし、解った。」

2人は探索に取り掛かった。しばらくして、スネ夫が話す。

「こっちは収獲なしだ。のび太は？」

「こっちは、更衣室の鍵が1つだね。」

「それだけか、まあいいや聖奈さんも待ってるしこれでここの探索は終わるぞ。」

「OK了解した。」

とのび太が返事をするのと部屋からでた。のび太は聖奈に報告をした。
「あの隠し部屋には更衣室の鍵しかなかったよ。」

「そうですか。ではここの探索も終わりましたよ。」

「ああ、そうだね。」

とスネ夫が言うのと3人は校長室をでて、職員室からでた。廊下に出ると、聖奈がのび太に向かって話し掛けた。

「のび太さん、探索してる途中でハーブを見つけましたか？」

「うん、校長室でグリーンハーブが2つぐらいかな。」

とのび太が言うと、のび太は2つのグリーンハーブをポケットから出した。

聖奈がそれを受け取ると、スネ夫とのび太に向かって話し掛けた。

「では私はハーブの調合をしに保健室にいます。怪我をしたら治療出来るように準備します。」

「そうか、なら探索は僕とのび太でやるよ。」

「はい、お願いします。」

会話を終わると、聖奈は保健室へ入った。そしてスネ夫はのび太に向かつて話し掛ける。

「よしつのび太、あっちの会議室から調べるぞ。」

「ああ、解った。」

のび太とスネ夫は慎重に会議室のドアを開けた。

AREA 3 『散弾銃』

ガラガラガラ。のび太とスネ夫はドアを開けた。スネ夫は喋りだす。
「ぱつと見たところゾンビは見当たらないけど、気をつけるよのび太。」

「解ってるよ。」

と言うと、2人は書類などがある棚を調べた。スネ夫が話し出す。

「よしっ、僕は左半分を調べるからのび太は右半分を調べてくれ」

「よしっ、じゃあ早く調べよう。」

と言って2人は棚を調べた。しかし3分の2ぐらい調べ終わったところで異変は起きた。

「ああ~~~~。」

「!!!!!!!!!!!!!!」

スネ夫とのび太は驚いた。部屋の両端に1体ずつ、机の向こう側に1体、計3体のゾンビが現れた。スネ夫が喋り出す。

「くっ、やっぱりここにも居たか。のび太、2人で迎撃するぞ。」

「ああ、わかつている。僕だって戦うぞ！」

そう言うのと、のび太が片方のゾンビに向かって発砲した。見事に頭に命中し、ゾンビは倒れた。スネ夫がそれを見ていていった。

「おお、流石だなのび太。こっちも片付けるか。」

と言うなりスネ夫はゾンビに向かって猟銃を撃った。散弾銃の為、ゾンビは壁まで吹っ飛び、倒れた。

「よし、後1体だな。」

とスネ夫が言うのと、ゾンビが行動を起こした。ドンッ！

「うわっ!!」

ドガッ！ドサドサドサ！ゾンビが机をのび太に向かって飛ばし、その所為でのび太が机にぶつかり、棚に激突した。棚の書類はのび太が激突すると、いっせいに落ちた。スネ夫が猟銃をゾンビに向ける。
「コノオ！」

スネ夫はゾンビに向かってすばやく撃った。ゾンビは頭が吹っ飛び、行動を停止した。ゾンビを始末したことを確認すると、スネ夫はのび太に話し掛けた。

「おい、大丈夫かのび太。」

「ああ、なんとか大丈夫だ。ん、これは何だ？」

と、のび太が言うとのび太の手には1枚の紙があった。それをスネ夫が見て言った。

「ん、これ・・・6358？何かの暗証番号かな？」

「・・・4桁の暗証番号、何処かで・・・」
・あっ！！

「どうしたのび太。」

「そういえば校長室に4桁の暗証番号でロックされている金庫があったんだよ。」

「じゃあこの番号試してみようぜ。」

と言うとスネ夫とのび太は校長室へ向かった。のび太が金庫の前に座り込み言い出す。

「えっと、番号は・・・6・・・3・・・5・・・8。どうだ！」

すると、金庫の戸が開いた。するとスネ夫が喋る。

「おっ中身は何だ？」

中に入っていたのはショットガンらしい銃火器だった。のび太がそれをみると、喋った。

「これは、『レミントンM870』だな。」

「『レミントンM870』？何だいそれ？」

「所謂散弾銃だよ。」

「へえ、そうなんだ。僕は、猟銃を持っているからのび太が持つて行けよ。」

「ああ、解った。正直ハンドガンだけでは心許ないからな。これは結構な戦力増強になるな。」

「よしっ、ここら辺の探索も終わったらし一度保健室に戻るか。」

と、一通りの会話を終えると、2人は保健室に入った。保健室に入ると、聖奈が話し掛けた。

「2人共どうしたんですか。」

「探索が一段落終わったんでちょっと休憩に来たんだ。」

「はい、お疲れ様です。」

「ああそれと聖奈さん。さっきの更衣室の鍵を渡しておくよ。そこは聖奈さんが探索してくれ。」

と言って、のび太はポケットから更衣室の鍵を取り出して聖奈に渡した。

「はい、探索しておきます。」

そして、十数分経つと、スネ夫が喋った。

「それじゃあ休憩も済ませたし、探索を再開するか。僕と聖奈さんは南舎1階東側の図書室と資料室を探索する。のび太は南舎1階西側の調理人室や家庭科室、北舎1階の方も探索してくれ。」

「ああ、解った。」

のび太が応答すると、聖奈が喋った。

「すみませんのび太さん。人数が足りないばかりに1人で探索させてもらって。」

「え、そんなことないですよ。」

「だけど1人だと危険が……。」

「大丈夫！僕はこう見えても射撃の腕前は凄いんだから。僕の狙った標的には必ず弾丸が当たるからね。」

「それは凄いですね。じゃあ……すみませんが1人での探索お願いします。」

「うん！そっちも気をつけてね。」

「はい。ではそろそろここら辺で。」

と言うと、聖奈とスネ夫は南舎1階の東側へ向かった。

「さあ。僕も西側の方を探索するか。」

と言うとのび太は西側にある家庭科室に向かった。しかし鍵がかかっていた。

「鍵がかかっているか。仕方ない、調理人室の方を探索するか。」

と言ひ、のび太は調理人室の重々しい扉を開けた。ガダン！扉は音を鳴らし、のび太は奥へ入った。そうすると、のび太が喋った。

「うっ、これは調理人のおばさんだ。歪んだ顔付きになっている！
一体何があったんだ。」

「よし、ここの棚も調べるか。」

と言つとのび太は調べ始めた。数分後、のび太は調べ終わつて喋つた。

「見つかったのはこの『給食の残飯の処理について』か。大した進展にはならなかったな。調理人室の奥の方も調べておくか。」

太は調べだした。

「この穴はダストシュートかな？漫画でこの穴を通って脱出したというのを見たけど、流石に小さすぎて入れないな。次は、このガスコンロだな。・・ん、火がつかないな。ライターが何かで火を燃え移らせないといけないか。」

とのび太が言った瞬間、天井が外れた。

ガタン！

「何だ！」

のび太は天井が外れて空いた穴を見ていた。すると、六本足の虫みたいな異形の生物が現れた。

「な、何だあれは！！」

奇妙な生物は天井から降りると、のび太に向かって掴み掛かってきた。

「うわっ！」

のび太は驚いたが、すかさずショットガンを撃った。怪物はそのまま吹っ飛び、壁に激突した。

「GISYAAAAAAAAAAAAA!」

叫び声をあげて怪物は倒れた。のび太は息を切らしていた。

「はあはあ、何なんだこいつは。一見したところ虫みたいに見えるけど。」

のび太はしばらく固まっていたが、落ち着くとショットガンをしまい、調理人室から出た。

「ふう、とりあえず調理人室の探索は終わった。次は北舎の方を探索しよう。何かわからないけど嫌な予感がする。早く行こう。」
と言うとのび太は北舎へ行く為の渡り廊下に向かって進んだ。

AREA 4 『救出』

のび太は心に不安を残しながらも渡り廊下を渡り、北舎へ行った。

「よしっ、一刻も早く脱出する為に探索だ。まずは2年生の教室から調べよう。」

と言つてのび太はすぐその教室に入つていった。一方その少し前スネ夫達は、図書室を探索していた。聖奈が図書室の奥から出てきてスネ夫に話し掛けた。

「スネ夫さんこっちには何もありませんでした。そっちはどうでしたか？」

スネ夫がそれに応答する。

「こっちはレッドハーブが1つだけだよ。」

この会話から推測するにスネ夫は図書室を調べ、聖奈は書庫の方を調べていたようだ。聖奈が話し出す。

「では資料室の方に向かいましょう。」

「うん、そうするか。」

2人は会話を終えると、資料室へ向かった。資料室に入ると何も異常は無かったので直ぐに探索に取り掛かった。スネ夫は奥の棚を探索し、聖奈は手前の棚を調べた。30分後、探索を終えると、会話をした。

「スネ夫さん、こっちは『警備員の心得』がありました。そっちは何か見つかりましたか？」

「いや、こっちは何も無しだ。」

「じゃあこれでこの探索も終わりにしましょう。」

と聖奈が言つと、2人は資料室を出た。その時異変は起こつた。

「ああ~~~~~。」

大量のゾンビが2人に向かって来た。

「うわあ、こんなにいっぱいゾンビがいる。」

「聖奈さん、ゾンビの量を分散させる為に分かれるぞ。」

「はい解りましたスネ夫さん。スネ夫さんも気をつけて。」

と言うと聖奈は、ゾンビの間を抜けて向こう側に行った。スネ夫は猟銃をゾンビに向け、連射する。

「お前等なんかに負けてられるか!!」

スネ夫の強烈な猟銃の連射でゾンビの数は確実に減っていた。しかし、スネ夫は気付かなかった。少しずつ近付いているゾンビに。やがて、遂にゾンビがスネ夫の至近距離まで近付いた。

「うお~~~~~」

スネ夫はゾンビの呻き声に気づき、振り向いたが、時既に遅し、ゾンビに猟銃を叩き落とされ、更に踏まれて銃身が曲がり、猟銃は使い物にならなくなった。

「や、やばい。資料室に逃げ込もう。」

と喋ると、スネ夫は急いで資料室の中に逃げ込んだ。しかし直ぐゾンビが追って来る。今スネ夫に武器はない。だがそれでもゾンビは容赦なく追って来る。今スネ夫に向かっていているゾンビは1体だけだが、スネ夫には抗う術は無い。スネ夫には死が刻一刻と迫っていた。その頃、そんな事など知らないのび太は探索を続けていた。今丁度2年生の教室の探索を終えた所だった。そして喋りだす。

「2年生の教室には何も無いか。次は美術室を探索するか。」

と言い、のび太は美術室の戸を開けた。中には、ゾンビが3〜4体いた。一直線にのび太に向かって行ったので、のび太はショットガンで一掃した。

「ふう、もうゾンビくらいじゃ驚かないぞ。皆が生きて脱出する為に僕は探索しているんだ。僕が頑張らないと。」

と、強い意志を見せ、のび太は美術室の探索をした。しばらくしてのび太は1つの生徒手帳と展示してあった『粘土で作った手』を取った。

「この生徒手帳によると、この粘土の中に、宝石が入ってるはずだけど。」

と言い、のび太は粘土を調べた。しかし、奥深くに埋め込まれてい

スネ夫が聖奈の安否を心配した。するとび太が言った。

「でもあの人は頭がいいから、何処かで生きていていると思うよ。通信機に出ないのもただ単に落としたのかもしれないし。」

「そうだな。何でも悪い方向に考えるのは良くないよな。」

スネ夫はのび太の言葉を聴いて少し安心した。そして、思い出すように言った。

「そうだ！さつき探索中にこれを見つけたんだ。助けてくれたお礼としてあげるよ。」

スネ夫が渡したのはある弾丸の入った箱2つだった。

「これは、12ゲージショットシェル？ショットガンに装填する弾丸か。」

「ああ。僕はショットガンを持っていないからな。レミントンM870を持つてるのび太にあげるよ。」

「えっ、スネ夫は猟銃を持ってたんじゃないかったっけ。」

「それはゾンビと交戦したときに銃身を折られちゃったんだ。」

「そうか、それで殺されそうになったのか。」

「ああだからそれはもう要らなくなったんだ。」

「そうか、ありがたく頂いておくよ。」

「それと、ジャイアンが1階だけじゃなくいろんな所を探索してくれっさ。」

「わかった。」

「じゃあ僕は探索を再開するよ。」

「あつ、ちよつと待って。これを見てほしいんだけど。」

「ん、これか？」

と、言つてスネ夫は『生徒手帳』と『粘土の手』を見た。そして言つた。

「うーん。この情報から推測するにこの粘土の中に宝石が入ってるって事か。」

「それは僕もわかったんだけど。宝石がどうしても取れないんだ。」
スネ夫は少し考えて言つた。

「溶かせばいいんじゃないか？」

「え？……ああそうか！」

のび太は理解できない様だったが、少し考えて理解したようだ。

「粘土を溶かせば粘土は溶けるけど、宝石は溶けないから宝石だけが残るという寸法か。」

のび太は解ったことを喋った。

「そういうことだ。」

「けどどうやって溶かそう？」

「調理人室に鍋があつたら？」

「あつたけど、ガスコンロに火がつかなかったよ。」

「ここにライターがある。」

とスネ夫は言う、スネ夫はポケットからライターを出した。

「これで火を燃え移らせればいい。」

「ありがとう。おかげで助かったよ。」

「僕ものび太に助けられたからな。これぐらいはしないとな。それと聖奈さん見つけたら連絡してくれ。」

「ああ解った。スネ夫、さっき僕いい武器を見つけたんだけど。」

「ん、何だ？」

スネ夫が聴くと、のび太はサブマシンガンを取り出した。そして喋りだした。

「これは『Uzi』と言って、トリガーを引きつばなしにすると、弾丸を連射するフルオートマチックの銃なんだ。火力はあるけどよくぶれるから相手を狙い打つ僕には合わないんだ。だからあげるよ。弾丸は、装填されているのが50発、そして、50発のマガジンが4つだから、計250発撃てるよ。」

「ああ、ありがとう。使わせてもらつよ。」

と言って、スネ夫は資料室を出た。

AREA 4『救出』（後書き）

どうも、作者のあとがきルームへようこそ。ここでは、小説に出たキャラクターの内2人が話します。今日のゲストはこちら。

「おいっ！！なんで俺の出番がねえんだよ！！」

「ジャイアン、その内出るから我慢してよ。」

皆さんお解かりの通り、今回のゲストはジャイアンとスネ夫です。

「うるせえよ！！いから俺を出せ！！！」

「ジャイアン！迷惑だから少し大人しくしててよ！」

・・・さて、スネ夫がジャイアンを押さえつけている間に、このあとがきルームの説明をしましょう。

まず、ここでは本編の補足、あるいは次話予告などを行います。ちなみに何故このあとがきルームのゲストが2人だけかというと、2人だと誰が喋っているかがすぐわかるという点があります。

「おい作者、俺はいつ出るんだ？」

ご安心を。次話では大活躍しますよ。

「ふっふっふ。遂に俺の出番か。」

それではこれで今回のあとがきルームは終了させていただきます。それでは次回のあとがきルームまでシーユー。

AREA 5 『近接戦闘の武器』

のび太はスネ夫との会話を終わると、粘土を溶かすために調理人室へ向かった。その少し前、ジャイアンと静香のペアは探索を続けていた。

「大丈夫か？ 静香ちゃん。」

「ええ、大丈夫よ。なんとかね。」

「でも凄いのよ。銃火器を簡単に扱ってみせるんだもの。」

「こういう小火器はパパの友達から教わっていたから。」

「へえ。そうか。」

「それより探索を続けましょ。」

「ああ、そうだな。」

とジャイアンが言うと、2人は2階北舎の教室に入った。そして、探索を始めた。しばらくすると、後ろからドアを開く音が聞こえた。

「ああ~~~~~~~~。」

「うわっ、ゾンビか！」

「固まっついては、格好の的よ。二手に分かれましょ。」

「おう！」

と、ジャイアンが返事をする、2人は二手に分かれた。ジャイアンは南舎の方に行き、静香は北舎東側の方に行った。静香は、ブローニングHPやイングラムM11を持っていたが、ジャイアンは何も武器を持っておらず、丸腰だった。ところがジャイアンは驚くべき方法でゾンビを退けた。ゾンビがジャイアンに近付くとジャイアンは戦闘体制に入った。

「何をこんなにやるー！」

なんとジャイアンは素手でゾンビを殴りつけたのだ。ジャイアンは次々と向かい来るゾンビを張り倒していく。そして、渡り廊下を渡り、南舎に着く頃には、ゾンビは居なくなっていた。

「どうだ！この俺様の力を見たか！！！」

そう言っていると、ジャイアンは南舎の探索を始めた。

「静香ちゃんの行方が気になるけど、武器も持ってるし大丈夫だろ。とりあえずこっちの探索をするか。」

と言っているとジャイアンは南舎にある3年生の教室と視聴覚室を調べた。しばらくすると、ジャイアンが言った。

「見つけた物は、グリーンハーブ3つ、レッドハーブ1つ、ハンドガンの予備カートリッジ3つ、12ゲージショットシェル2つか。

俺は銃火器を持ってないから、予備弾丸は要らないな。じゃ次は男子更衣室を調べるか。」

と言っているとジャイアンは、男子更衣室を調べ始めた。ジャイアンは口ッカーの中から1つのものを見つけた。

「これ、『ハードサポーター』だ！やった、遂に俺にも使える武器が見つかった。」

ジャイアンは喜ぶと、早速手に装備した。

「よし、どつからでもこいやあ。」

と、ジャイアンは意気込みを見せた。

「じゃあ後は北舎2階の探索をして、1度保健室に皆を集めるか。」
と言っていると、ジャイアンは北舎2階に向かった。しかしその時、ジャ

イアンの通信機が鳴った。ジャイアンは通信機に出た。

「もしもし、こちらジャイアン。どうした？・・・太郎。」

「今年3年1組の教室に居るんだけど。一杯のゾンビが入って来ているんだ。今は健治兄ちゃんが戦ってくれているけど、危険な状態なんだ。早く助けに来て。」

「よし、解った。俺に任せろ！」

と話すと、ジャイアンは3年1組の教室に向かった。3年1組の教室のドアには、大量のゾンビが群がっていた。

「この野郎！！喰らえ！！」

と言っているとジャイアンはゾンビに向かって殴りつけた。無論『ハードサポーター』は装備している。次々とゾンビが倒れていく。気がつく、ゾンビの数が30体程いたのが5体程になっていた。すると、

教室からサバイバルナイフを持った健治が出て来て、残ったゾンビに止めを刺した。

「オラァー！止めた。」

「うあ~~~~~」。

呻き声をあげて、ゾンビは倒れた。そしてジャイアンが話し出す。

「危ないところだったな。健治。」

「探索に夢中だったから後ろから来ていたゾンビに気がつかなかっただけだ。面と向かえばこんな奴ら相手になんねえよ。まあ何にせよ助かったぜ。それと、お前の手につけてるもんは何だ？」

「ああこれは、『ハードサポーター』っていつて装備している者の手を保護し、更に相手には強烈な打撃を与えろという攻守一体の近接戦闘武器なんだ。男子更衣室のロッカーから見つけたんだ。」

「へえ、すげえな。じゃ、俺らは探索を再開するから。」

「あつ、待つてくれ。一旦全員を保健室に集めるから、保健室に来てくれよ。」

「何でだ？」

「全員の探索の結果を整理しておきたいんだ。」

「なるほど。解った、一緒に行こう。」

ジャイアンと健治が会話を終わると、3人は保健室へ向かった。

AREA 5 『近接戦闘の武器』（後書き）

やあ今回も作者のあとがきルームへようこそ。今回のゲストはジャイアンと健治だ。

「ふん。なんで俺がこんなのに出なきゃいけないんだ。」

「まあいいじゃねえか。」

「ジャイアンがそう言うならいいか。それと、『ハードサポーター』って何だよ！聞いたことねえそんな武器！」

そりゃあそうですよ。何てったって、自分で考えた武器なんですから。

「そ、それはいいのか？」

「まっ、使いやすいしいいだろ、オリジナルの武器出したってな。」

「それはそうと、作者に聴きたいんだが、ジャイアンはこれから銃火器を使うのか？」

「・・・名前まで言えませんが1つだけ銃火器を使うと思います。」

「だってさ、ジャイアン。」

「まあ、俺はこの拳だけでも充分だけどな。まっ、武器は多いにこしたことはないからな。」

よし、じゃあこれで今回のあとがきルームも終了ということでは・・・。

「おい！ちよつと待て！俺のサバイバルナイフは紹介しないのか！？」

いや、もう言っただけじゃん。

「いやそれって紹介になってないじゃん！」

いいよもう。無駄話しても飽きてくるだけだから、ここで終了だよ。

「いや、ちょ、ちよつと待てやあああああああー！」

今回のあとがきルームはこれで終了。次回までシークー。

A R E A 6 『瀕死の知り合い』（前書き）

更新遅れました。

AREA 6 『瀕死の知り合い』

ジャイアンが健治と会話をしていたかなり前、のび太はスネ夫と別れた後調理人室へ行き、鍋で粘土を溶かしていた。徐々に粘土が溶け、宝石が姿を現した。

「おっ、宝石が現れた。あと少ししたら火を消そう。」

しばらくすると粘土が完全に溶けて、宝石しか見えなくなってきた頃、のび太は火を消した。そして、十分に熱湯が冷めた頃のび太は宝石を取り出した。

「よし、なんの役に立つか解らないけど一応とっておこう。」

と言うとのび太は宝石をポケットに入れた。

「さて、じゃあそろそろ2階へ行くか。」

と言うとのび太は渡り廊下を渡って裏口付近の階段から2階へ向かった。音楽室の前に、警官と女の子の死体があった。

「こ、こんな小さな子までこんなになって……。本当にいったい何があったんだ？……。ん、この警官の近くに何か落ちてるぞ。」

と喋るとのび太は近くに落ちてる物を取った。

「これはハンドガンの予備カートリッジだな。取っておこう。」

と言うとのび太は予備カートリッジをポケットに入れ、4年生の教室の探索をした。しばらくするとこのび太が教室の探索が終わったが何も成果がなかった。

「……。何もないか。じゃあ次は相談室だな。」

と言うとのび太は相談室に入った。

「特に何もないな。あるのは救急スプレーだけだな。」

と言うとのび太は救急スプレーをポケットに入れた。

「次は3階だな。さっさと行くか。」

と言うなのび太は階段を上り、3階へ行った。すぐ近くの理科室に入ろうとしたが、開かなかったので理科準備室の方に向かった。

「よし、開けるぞ。」

ガチャ、とのび太がドアを開けると、中には2人の人が居たが、1人は瀕死の重体だった。のび太は2人に駆け寄って行った。

「聖奈さん！やっぱり無事だっただね！スネ夫が心配してました。通信機に出ないからどうなったかと。」

「すみません。ゾンビとの交戦中に通信機を落としてしまいました。」

「それより、お前は英雄！！どうしたんだ！すごい傷痕だ！！」

のび太は重体である男に話し掛けた。すると、肩のところから血を流している重体の男が言った。

「のび太あ。この学校もマジでヤバイ。とんでもない化け物が潜んでいるぜ。お化け嫌いの僕にはゾンビなんてちびる程怖かったがそんなのもう慣れちゃった。でもあの化け物を見た時は本当に腰がすくんだぜ。」

すると聖奈が言った。

「毒にやられたみたいなんです。血清が必要なんです保健室に置いてきてしまつて。でも私がここを離れたら英雄さんがゾンビに襲われるかもしれないんです。」

「解つた！じゃあ僕が取つて来る！」

「なるべく早く来て下さい。『MA-96 BIOGALLES解毒剤』と書いてあるラベルが貼つてある瓶です。」

「解つた。待つてろよ英雄！」とつとのび太は勢いよく飛び出した。

「保健室は確か1階の玄関の所だな。・・・よし！急ごう！」

とつとのび太は階段を1階まで降り、南舎へ向かった。しかし、そこにはゾンビがいて、そう簡単に通れるわけでもなかった。

「今更ゾンビが来たつてもう慣れたんだ。一気に駆け抜ける！」

とつとのび太はゾンビの間を擦り抜けた・・・ように見えたが、のび太の慣れが今度は仇になった。上半身だけで地を這うゾンビに気がつかなかったのだ。そのままのび太は地を這うゾンビに足を引きずられた。

「くそっ！しまった油断した！！このっ放せ！！」

と言つてのび太は足を掴んできたゾンビに蹴りを入れた。そのゾンビは動かなくなったが、周りにはまだ多数のゾンビがいた。

「今は安雄の為に血清を取って来るのが先だ。相手はしてられない。」

と言つてのび太は前に立ち塞がった敵を上段回し蹴りで蹴り飛ばした。

「うあ~~~~~~~~~~~~」

呻き声をあげるゾンビを無視し、のび太は保健室へ急いだ。保健室に入ると、早速のび太は薬品棚をあさった。

「えっと、確か『MA-96 BIOGALLES 解毒剤』と書いてある瓶だったな。……これでもない……これも違う……
……『MA-96 BIOGALLES 解毒剤』！！これだ！早く安雄の所に行かないと！」

と言つとのび太は急いで理科準備室に向かう。そしてのび太は理科準備室の戸を勢いよく開けた。

「安雄！！血清だ！！！！」

のび太がそう言つと、瓶を出した。そしてその瓶を聖奈が取り、投与の準備をした。

「安雄さん血清を打ちますよ。もう大丈夫ですよ。」

すると聖奈が安雄に血清を投与した。すると、安雄がのび太に話し掛けた。

「のび太あ。俺、お前の事見直したよ。いつもはドジで頼りないやつだけだ。いざという時には、凄い力を発揮するんだな。」

「安雄……」

すると安雄は何かの楽譜の一部をのび太の前に出した。

「これも何かの謎を解く鍵になるかもしれねえ。持って行ってくれ。」

のび太は安雄から渡された楽譜の一部を取った。しかし安雄が死んだように動かなくなってしまった。

・ ・ ・ ・ ・

やがてどれくらい経っただろうか。のび太は起きた。

「うーん。いつの間にか眠ってしまったみたいだな。聖奈さんもないな。探索に戻ったって事か。僕も探索をするか。」

と言ってのび太は相談室を出た。そしてのび太は考え出した。

（さっき安雄から貰ったこの楽譜の一部はなんだろう？何か謎がありそうだな。音楽室に行ってみるか。）

すると、のび太は2階の音楽室へ行き、音楽室に入った。音楽室の中には既に人がいた。

「健治！太郎！無事だったか。」

「ふん、俺をなめんなよ。んで、のび太も音楽室の探索か？」

「いや、何かの楽譜の一部を見つけたから音楽室に来てみたんだ。」

「何だよ。見せてみる。」

と健治が言くと、のび太は何かの楽譜の一部を健治に渡した。その楽譜を健治を見ると、少しして健治が呟いた。

「……月光か。」

「知っているのか！？」

「ガキの頃はピアノリストになるのが夢だったからな……これくらいなら弾けるぜ。」

「弾いてみてよ！健治にい！！」

「はあ？ばか言うなよ。のび太が持つてるのは中盤の楽譜だぜ。さつき俺が見つけた序盤の楽譜と合わせても終盤の楽譜がねえんだぜ。さすがに知ってても楽譜がなきゃ弾けねえよ。ああそうだ、ついでにこいつを渡しとくぜ。」

と言って、健治はのび太に『エンブレム』を渡した。

「何これ？校章みたいだけど。」「それは探索の途中で教材室から見つけたんだ。何かありそうだが謎解きは苦手だからのび太に任せろぜ。」

健治がそう言った後、音楽室のドアが開いた。入ってきた人を見たのび太が言った。

「聖奈さん！」

入ってきた人は聖奈だった。

「のび太さんに健治さん！無事だったんですね。」

「おうよ……それとその手に持つてるのはもしかして……。」

聖奈は手に何かの楽譜を持っていた。

「ああこれは更衣室のロッカーにあったんです。」

そして聖奈は健治にその楽譜を渡した。

「一応これで月光の楽譜は完成したが、本当に弾くのか？んな事で、何か意味あんのか？」

するとのび太が言う。

「特にこれといった理由も無いんですが。なんか引つ掛かることがあるので・・・」

「・・・じゃあ1回だけだぞ。」

「ワイー！」

そして健治は月光を弾いた。辺りには月光の音楽だけが鳴り響く。やがて演奏が終わった。

「フー、どうよ？」

「凄いよ健治にいー！」

「うん。とても良かったです。」

「へへへ、そっか？」

次の瞬間、音楽室の壁が開いた。それを見た健治が思わず叫んだ。

「何だありやあー!!?」

全員が驚いていると、のび太が喋った。

「じゃあ僕が行きます。健治達はここで待っていてください。」

しかし健治が喋った。

「おい、のび太勝手に決めんな！つてもう入ってるし。」

するとのび太が奥にある金色の校章を見つけて言った。

「金色の校章か・・・普通の校章を『エンブレム』と呼ぶからこれは、『ゴールドエンブレム』と呼ぶことにしよう。まあとりあえず取っておくか。」

そう言うとのび太は校長の像の窪みにはまっている金色の校章を取った。しかし取った瞬間、入ってきた壁が閉まってしまった。

「！！！！！！出られなくなっている！ゴールドエンブレムを取ったからか！？・・・いや待て、落ち着け。こういうときこそ周りをよく見ないと・・・。」

といい、のび太は考え出した。（確か今したことは校長の像から『ゴールドエンブレム』を取ったことだな。もう一度はめてみるか。）

するとのび太は窪みに『ゴールドエンブレム』をはめ込んだ。すると隣にあった掲示板が横にスライドし、もとの掲示板があった所に、何かが入っている穴があった。

「ん、何だろこれ？」

のび太は中に入っている物を取り出した。それは深紅の輝きを見せている宝石だった。

「この宝石は赤いな。さっき見つけた宝石は青かった。何か関係がありそうだな。とりあえず3階の方を探索するか。」
と言うとのび太は3階へ向かった。

AREA 6 『瀕死の知り合い』（後書き）

今回も後書きルームへようこそ。今回のゲストは聖奈と安雄だ。

「私も遂に後書きルームに登場ですか。」

「俺も一応初登場だが本編での出番が少なえぞ。」

まあそれは置いて、……今回はあまり変化が無かったな。そうですね。けどあの時ののび太さんの説明は凄かったです。なんかピアノが入力装置とか、校長の像の窪みがスイッチになっているとか。よくあそこまで考えられますね。」

「俺ものび太には心底驚いたぜ。いざという時には結構頼りになるんだな。」

まああのび太は何かと凄いから。

それでは次回予告！

数々の謎を解くのにび太。しかし、そんなのび太に身の危険が迫る！
はたしてのび太は生き残れるのか！？

以上。次回予告でした。お楽しみに。

AREA 7 恐怖の生物兵器

のび太は3階南舎に着いた。

「よし、じゃあ早速探索を始めるか。」

と言うとのび太は、パソコン室に入り、探索を始めた。中には、27台余りのデスクトップパソコンがあった。しかし、のび太はパソコンを気にせず探索をした。

しばらくしてのび太はあるものに気がついた。

それは額縁に飾つてある絵のようなものだつた。

「………ん！この絵の裏にダイヤルのようなものが隠されているぞ。どうやら3桁の数字を入れるみたいだな。………全く判らないな。後にするか。」

とのび太が言うと、何かの音とともに何かが下りてきた。

[illegible]

「さっき調理人室にいた化け物！しかも3体もいる！」

のび太は咄嗟に後ろへ避けたが、すぐ後ろが壁であり距離を詰められる。

「つつつつつ！万事休すか！！」

しかしのび太が諦めかけた瞬間、ドアが開いた。

「コノオ、喰らえ！」

ドアを開けて現れたスネ夫は「UZI」を連射する。3体の怪物達は断末魔の悲鳴をあげ、倒れた。

A A A A A A A A A A A A A A A
A A A A A A A A A A A A A A A
A A A G I S Y A A A A A A A A A
A A A A A A A A A A A A A A A

┌
┌
┌

怪物を片付けるとスネ夫はのび太に駆け寄り、話し掛けた。

「大丈夫だったか？のび太。」

「ああなんとか無事だ。助かったよスネ夫。それにしてもよくここに僕がいるとわかったな。」

「この近辺の探索をしている時にのび太の声が聞こえたからちょっと行ってみようと思ったんだ。」

「……そうか。それとスネ夫。ちよつとこつちへ来てくれ。」
そう言うとのび太は額縁の所まで来て、スネ夫に言った。

「この額縁の裏にダイヤルが隠されているんだけど解除できる？」

「……ちよつと待ってくれよ。」
と言うとスネ夫は教卓のパソコンに向かって行き、ディスプレイを見た。

「のび太、こいつをってみるよ。」

とスネ夫に言われるとのび太は教卓へ行った。

「ん、何なんだ？」

「このパソコン室のパソコンは全て電源が切れてるのに教卓のパソコンには数台のパソコンが電源オンの表示になっているんだ。つまり、この電源オン表示になっているパソコンの数がパスワードになっていると思う。パスワードのダイヤルは3桁だから3つある機の西側を100の位、真ん中を10の位、東側を1の位だとすると……538だな。のび太、早速入力してくれ。」

とスネ夫がのび太に言うと、のび太はダイヤルの所まで行き、パスワードを入力した。

「えつと……5……3……8これでどうだ！」

「……カチャ。」

何かの音とともに上から梯子が下りてきた。

「パスワードが合ってたみたいだぞ。」

「よし、スネ夫早速入ってみよう。」

と言うと2人は梯子を昇った。昇った先は宝箱のある小さな小部屋だった。

「よしスネ夫、宝箱を開けてみるよ。」

RRRRRRRR

突然のび太の通信機が鳴った。

「こちらジャイアン。のび太、無事か？」

「ジャイアン！こっちはなんとか無事だよ。なんかあったの？」

「一回全員の探索結果を確認して整理しようと思うから保健室に来てくれ。」

「ああわかった。ここにはスネ夫も一緒にいるからスネ夫と一緒に行くよ。」

「そうか。おまえらが最後だ。気をつけて来いよ。」

のび太がジャイアンとの会話を終えるとのび太は通信機を切つて、スネ夫に話し掛けた。

「どうやら全員保健室に集まっているらしい。探索結果を整理するだつてさ。」

「成る程。じゃあ早く行こう。」

そしてのび太とスネ夫は保健室に向かった。保健室には既に皆が揃っていた。のび太とスネ夫が部屋に入ると、ジャイアンが皆に向かって言った。

「よし皆集まったな。じゃあ早速探索結果の鍵や資料を提出してくれ。ついでに銃火器の弾丸の配分もしたいからそれも出してくれ。」

とジャイアンが言うと、全員は探索結果と銃火器の弾丸をテーブルの上に出した。まず、探索結果の整理を行った。書類などは全員が目を通した。提出された鍵はのび太が見つけた理科室の鍵だけだった。その鍵を見たジャイアンが皆に喋った。

「・・・これは理科室の鍵みたいだが、誰が行くか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

話を聞いていた皆は黙っていた。しかし、のび太が言った。

「僕が行ってくるよ。」

「のび太が行ってくれるか。この学校も何が居るかわからない。気をつけて行けよ。」

「ああ判ってるさ。」

「よし、じゃあ全員にこのバックを配布する。」

と言うとジャイアンは後ろの長椅子からバックを取った。それを見たスネ夫は驚いたように言った。

「……………これはケブラー製のバック！？何で学校にあるの？」

「さあ知らない。健治が探索の途中で見つけたらしいけどな。」
すると健治が言う。

「俺はそのバックは普通のバックに見えたけどな。ケブラー製だったとは判らなかつた。」

「まあそんな細かいこといいじゃねえか。」

「そうだね。」

のび太が相槌をうった。

「よしそれじゃあのび太は理科室へ行つて、他は学校内の探索だ。じゃあ解散だ。」

とジャイアンが言うと全員はバックにジャイアン以外に配分された銃火器の弾丸を入れた。ジャイアン曰く銃火器を使うより自分の拳の方が戦いやすいらしい。そして全員は保健室を出た。のび太は理科室へ向かつていた。そしてそれを追う人影があつた。のび太がそれに気づいた。

「聖奈さん！どうしたの？」

「のび太さん、どうして自分から名乗り出たんですか？」

「それは……………安雄さ。」

「安雄さん？」

「おそらく理科室には安雄をあんなにした怪物がいると思う。僕はそいつを絶対に許せない。だから僕が倒すために名乗り出たんだ。」
「そうですか。のび太さん……………」

そう言うてのび太は引き金を引いた。しかし引き終わる前に、異変がおきた。さっきまでいた怪物が消えたのだ。

「なにっ！何処へ行つた！！」のび太は周りを見渡した。しかし怪物の姿は見えない。ふとのび太は自分に向かって来る音に気づいた。

「何だこの音は？………まてよ、相手はカメレオンみたいなやつだった。カメレオンつてのは自分の色を変化させ、風景と同化させる。んでその色を保護色と言ったつけ。たしかそれで敵から見つかりにくくするんだっとな。ということはこの音は奴の足音か！！！！」

のび太は音の正体に気づくと、全速力で理科室のドアの所まで行き、理科室の反対側まで行った。そしてそこにある蛇口をおもいつきり捻った。蛇口から勢いよく水が出てきた。そうこうしているうちに怪物が姿を現し、こっちへ向かっていた。

「よしっ 来るなら来い！」

[illegible]

唸り声をあげ、怪物はのび太へ向かっていった。しばらくのび太は難なく避けていたが、次第に疲労が溜まり、避けるのが難しくなっていた。それを見計らったように怪物は保護色形態になった。

「見えなくなった！だがもうそろそろのはずだ。」

のび太がそう行つた時には、既に床に水が溜まつていた。さつき捻つた蛇口の水が溢れ、床を水浸しにしたのだ。そのおかげで化け物が姿を消しても、足音が目立つようになった。

「よし、この水のおかげで怪物の足音が目立つぞ。これでどこにいてもだいたい判る。」

そしてのび太は一度怪物から距離をとり、ハンドガンを構えた。

「まずは足を狙う！喰らえ！」

するとのび太はハンドガンを5発程連射したにもかかわらず、全弾命中した。これはのび太にこそ為せる技である。のび太はかつて約

怪物は舌を伸ばし、のび太を吹き飛ばした。その時、銃を落としてしまった。

[illegible]

「うおおおおおおお！
ドバン！」

「安雄！」

そして安雄は持っているグレネードランチャーを連射した。しかしやがて弾が切れた。

「チツ弾切れかよ！」

[illegible][illegible]

ドゴオオオン！！

「爆発！！まさか安雄の奴死ぬ気で……………」

「……ありがとう安雄。そしてさようなら。」

そしてのび太は足元にある鍵を見つけた。

「この鍵、・・・裏口か。・・・ん、あそこに何かある。」
のび太は怪物の死体に何かを見つけてそれを取った。取ったのは安雄の持っていたコルトM79グレネードランチャーと、それに挟まっていたメモだった。のび太はそれを手に取って見てみた。そのメモ書きには次のように書かれていた。

『生きる意志のある者達へ』

このメモを君が読んでる頃にはもう僕はこの世に存在しないということだ。

僕の最期の言葉を讀んでくれた君に生きる意志があるのなら僕の戦利品を差し上げよう。

まずは君が手に取ったグレネードランチャー。ひ弱な化け物なら一撃で始末できる。

弾は自分で見つけてくれ。

そしてもう2つは学校の調理員さんの休憩場所にあるソファの下に隠しておいた。何かあるかは自分の目で確かめてくれ。

もしこのメモが僕の知り合いに読まれたら僕は本当にうれしい。頑張ってこの街から脱出してくれ。

安雄

「・・・・・・・・・・・・・・・・安雄。」

すると のび太は調理人室の控室に向かった。安雄の遺書に書かれていた長椅子の下にはケブラースーツと体力増強剤があった。それを見た のび太は喋った。

「ありがとう安雄。大事に使わせてもらうよ。僕は立ち止まらない！皆が生きて脱出する為に僕が頑張るんだ！！」

そして のび太は裏口の扉へと向かった。

AREA 7 『恐怖の生物兵器』（後書き）

はい。あとがきルームの開館です。今回のゲストはのび太です。

「あれ、僕一人？」

いやあ人集めるのも大変なんだよ。

「ああそう。」

それよりこれでCHAPTER 1『学校の恐怖』は終わりなんだが、一区切りついたということで何かをしたいわけだが、何も思いつかん。

「そういえばさ、今まで出てきた資料の内容って表記されてないよね。それをここで表記したらどうか？」

それはいいな。では早速やるか。

『警備員の心得』

1) PM 5 : 00以降に校舎内又はグラウンドに生徒が居た場合即急に帰宅させること。

2) PM 6 : 00までに校舎内の全ての窓を閉じ鍵をかけること。

3) PM 6 : 00からは校舎を見回り10 : 00からは警備室に戻り、監視カメラを使い、警備をせよ。

4) もし校舎内で不審者、侵入者を見つけた場合即急に取り押さえ、E - 15に連絡せよ。

5) E - 11 ~ 14に侵入者を見つけた場合即急にE - 15に連絡し、その場に待機せよ。

注意！見回るのは校舎内のみ。E - 11には絶対に近付かないこと。

□

『給食の残飯の処理について』

生徒、職員が残した肉類の残飯は他の残飯と別々にし回収すること。肉類の残飯は給食室にある処理用シューターにビニール袋に詰めて流すこと。

その他の残飯は生ゴミとして処理してください。

調理で余った肉もなるべく保存せず、処理用シューターに流してください。

生徒達が食中毒になるのを防ぐためです。お願いします。』

『警察官への報告書

全警察官へ報告。

生存者を現在最も安全であろう学校内に誘導し、保護せよ。又、自分の身を守らせるために市民の銃刀の所持を許可せよ。

選抜警官隊は野外、学校内に潜伏するゾンビの一斉排除、脱出ルート^①の確保を命ずる。』

『生徒の手帳

6月20日

明日は苦手な図工の日だ。嫌だなあ・・・どうせ僕がクラスで1番下手だから先生に叱られるし、皆にも笑われるんだろうなあ。

6月21日

いよいよ図工の授業が始まる。もう溜息しか出ないよ。さつき渡り廊下で見つけた宝石みたいな物も何だか要らなくなってきた。

どうせ形が変な作品なんだからこの際この宝石みたいなのを埋め込んで少し綺麗な物にしてみようかな。うん、そうしよう！

6月22日

あの宝石のおかげで先生に表現力があるなと褒められたこんなに楽しい図工は初めてだ。あれを拾って本当によかった。

でも結局あの宝石は一体何だったんだろう。きっと神様が僕に恵んでくれたのかな？』

とまあこれくらいか。これからも資料が出てきたらその内容をあとがきルームで紹介するか。

「あのさあ。前から思っていたことなんだけど。小説の中に出てきた（ ）と「 」と『 』と【 】の違いがよく解らないんだけど。」

ああそれが、じゃあ説明するか。（ ）これはある人物が思っていることを表記する場合に使う。あとがきルームの補足にも使うな。「

この中に入るのは人などが喋る時などにつかうな。『これはの

資料の紹介でも使ったけど、メモ書きなどの文字が書かれているのを表現するのに使うな。最後に【】これはまだ出てきてないけど、物語の回想シーンに使うな。

「なるほどね。」

ちなみに『警察官への報告書』なんて資料出てきてないだろ。思ってる人もいるかもしれませんが、2階の渡り廊下でスネ夫が見つめています。（そのような描写はしてませんが）

「じゃあそろそろ次回予告でもするか。頼むよMONDOERAさん。」

仕方ないな。

ついに怪物を倒し、裏口に抜けたのび太。裏口の奥を探索している
と……。

とまあこのくらいですか。では次回を楽しみにしてください。

・・・あつそうそう。これを読んでる時点で気づいていると思うけど、この小説のタイトルを『のび太のBIO HAZARD』から『のび太のBIO HAZARD THE NIGHTMARE』に変更しました。一応報告しておきます。それではそろそろ閉館します。それではさようなら。

「ちよつと待つて。一ついい？」

ん？

「この小説の感想を見ると、小説自体の感想だけなんだけど、登場キャラの評価もしてほしいんだ。」

なるほど。

「例えば今あのキャラは何をしているのか（金田）とか、あのキャラをもっと活躍させてほしい（ジャイアン）などの要望もほしいんだよ。」

そうだな。それじゃあそれを読者さんに伝えておくか。それと、このキャラは良いなどの俗に言う人気投票も受け付けます。投票の仕方は、感想の欄に気に入ったキャラの名前を書けば良いです。とりあえず1回目的人气投票はCHAPTER2が終わった時までとし

ます。（CHAPTER 1と比べて短いおそれがある。）
ちなみに最近更新速度が遅くなっている理由は次回のあとがきル
ムで語りたいと思います。それではまた次回。

AREA 1『不審な旅館』

「裏口に来るのは久し振りだな。ここから一応裏山へ行けるけど、いつもは別のルートから行くからな。まあ、ここら辺を探索するか。」

「と言ってのび太は裏口の周辺にある飼育小屋を調べようとしたが、飼育小屋は開かなく、その周辺にあったグリーンハーブ2つとブルーハーブ2つとレッドハーブ1つを手に入れ、裏口の扉を開け、裏口から外へ出ようとした。出た先は裏山へ続くルートだった。」

「ここは学校行事の時などに使う登山ルートだったな。土砂崩れがあつて立入禁止になっていたが、一応行ってみるか。」

「言うとのび太は山の奥に向かって行つた。途中にはグリーンハーブが1つあつただけだった。やがてのび太は土砂崩れがあつた所に辿り着いた。」

「ここが土砂崩れがあつた場所か。ここから先は行けそうにないな。無駄足か。仕方ない、戻るか。」

「と言ってのび太は振り返り、元来た道を戻ろうとしたが、」

「横道があることに気がついてその先へ進んだ。すると、何かの旅館みたいな建物があつた。のび太は近くにある看板を読んだ。それにはこう書いてあつた。」

『旅館『裏里』』

「ここは一体何なんだ。看板には旅館つて書いてあるけど……。何でこんな所にあるんだろう。……。この建物よく見てみると……。どうやら潰れた後建物をこのまま放置してあるようだ……。もしかしたら中に生存者が居るかもしれない。・。あと僕らの学校の事で何か手掛かりがつかめるかもしれない。どう考えたってあんな力ラクリなどを仕掛ける意味がわからない。防犯対策にしてもやりすぎだし。」

R R

「学校の裏口の鍵を見つけて行事用の登山ルートをたどってみたら、廃墟になった旅館を見つけたんだ。もしかしたら生存者あるいは、脱出の手掛かりが掴めるかもしれないからこれから潜入する。」

すると、のび太はある事に気がついた。

「実は今、別行動しているんだ。ほんとビックリしたよ。あの化物相手にビビりもせず拾った武器で倒していくんだぜ。銃の使い方もすげー詳しかったし。」

のび太が驚きながらも冷静な口調でいった。

と言ってジャイアンは、通信機の接続を切った。

と言いのび太は、少し疑問を残しながらも旅館の中へ入って行った。その頃ちようどのび太が土砂崩れがあるところへ向かつて登山していた頃、学校ではちよつとした異変が起きていた。

「そうですね。あとは待機だと思います。」

「じゃあ保健室に行って休憩しよう。」

59

「……………誰かの悲鳴が聞こえたような……………」

「**今だ！！**」

GISYAAAAA! !
AAAAA! !

そのままスネ夫は「UZI」を連射し続けた。やがて怪物が倒れた。

「わあ。凄いですスネ夫さん。」

「まあ、サブマシンガンを持つてるし、これくらいは出来なきゃね。
 ・ ・ ・ ・ ・ それより、金田さんは ・ ・ ・ ・ ・ 」。
 「 ・ ・ ・ ・ ・ 」。

「……………聖奈さん。ここで悲しんでいて

「はい、わかりました！私も頑張ります！！」

（・・・）のび太さんは危険だと思われる理科室へ行つたけど大丈夫かなあ。無事だといけれど、もしかしたら安雄さんみたいに・・・

そしてスネ夫が言う。

「はい！」

一方その頃のび太は・・・。

のび太は旅館のドアを開けた。中は床が腐っていたり、壁が汚れていた。いたりしていた。

「ここは受付か。ここら辺を探索しよう。」

「何も無いか。それじゃあ他の所を探索するか。……」

L

「これ、……『コルトM79』だな。爆発する弾丸の『

と云つてのび太は受付を出た。

「まずは左の扉に入ってみようかな。」

62

索を始めた。

AREA 1 『不審な旅館』（後書き）

メモ書きがある。

『今回は『あとがきルーム』はお休みさせていただきます。』

A R E A 2 『不穩』 (前書き)

大分更新が遅れてしまいました。すいません。

AREA 2『不穩』

扉を開いたら、目の前に行きなりゾンビが現れた。

「うわっ、ちよっ、たっ。失せる！」

と言つてのび太はハンドガンを撃った。

「ふう。大分この状況にも慣れてきたな。緊張感も少し薄れた気がするし。・・・よし！さっさと探索を進めよう。」

そしてのび太はまず手前にある扉を開き、バスルームを探索した。・・・しかし気になるものは無かった。

「よし、次は奥の方を調べよう。」

すると**のび太**は部屋の奥の方に向かった。そして探索を進めた。・・・しばらくして、**のび太**は机の上に一冊のノートがあるのを見つけた。そしてそれを手に取った。

「・・・これは何のノートだろ？・・・表紙に『飼育係』と書かれているな。」

そして**のび太**は徐にノートを開いてみた。

「どうやら日記のようだな。」

日記と思われるノートにはこのように書かれていた。

『7月16日

夜、警備員の森山と佐藤、研究員の三田村とポーカーをやった。三田村の奴、やたらついてやがったがきつとイカサマに違いねえ。

7月17日

今日、研究員のお偉い方から、新しい化物の世話を頼まれた。

皮を引ん剥いたゴリラのような奴だ。

生きた餌がいいってんで豚を投げ込んだら奴ら、足をもぎ取ったり内蔵を引き出したり遊んだ拳句

やっと食いやがる。

7月18日

今朝の5時頃、宇宙服みてえな防護衣を着た森山に突然たたき起こされて俺も宇宙服を着せられた。なんでも研究所で事故があつたらしい。

研究員の連中ときたら、夜も寝ないで実験ばかりやってるからこんなことになるんだ。

7月19日

昨日からこのいまましい宇宙服をつけたままなんで、背中が群れちまって妙にかゆい。いらいらするんで腹いせにあの犬どもの餌を抜きにしてやった。いい気味だ。

7月19日

あまりに背中がかゆいんで医務室いったら背中にでえバンソウコウを張られた。それから、もう俺は宇宙服着なくていいと医者と言った。

7月21日

朝起きたら背中だけでなく足にも腫物ができてやがった。犬どものオリがやけに静かなんで見に行ったら数が全然足りねえ。飯を三日抜いたくらいで逃げやがって。お偉い方に見つかったら大変だ。

7月22日

昨日、この旅館から逃げだそうとした研究員が一人射殺されたって話した。

夜、からだ中あつかゆい。 胸のはれ物 かきむし たら 肉
がくさり
落ちやがった。 いったいおれ どうな て

7がつ23日
やと ねつ ひいた も とてもかゆい
今日 はらへったの いぬ のエサ くらう

7がつ24にち
かゆい かゆい、三田村
きた
ひどいかおなんで ころし

うまかった です
かゆい
うま
『

「・・・・・・・・・どうなっているんだ？最後の方は人間のものとは思えなかったけど。・・・・・・・・・まあこれも何かの謎を解く鍵になるかもしれないから一応取っておくか。」
そしてのび太はしばらく調べた後、薬品棚から止血剤を見つけ、この部屋を後にした。

「よし、次は102号室だな。101号室と同じ要領で調べよう。」
といい、のび太は102号室を探索した。中にゾンビがいたのは言うまでもない。

「・・・・・・・・・収穫はバスルームにあったハンドガンの予備マガジンが1つだけか。」
そう言うとのび太は隣の部屋の103号室の扉を開けようとした。
しかし・・・・・・

「鍵が掛かっていて開かないな。ここを探索するのは後にするか。」
そしてのび太はフロントがある廊下まで出た。

「この先は何だろ？」
のび太は一際大きな扉を見てそう言った。そして扉に手をかけ、開

けた。

[illegible]

「．．．．．不吉な音がしたな．．．．．もしかして．．．．．」

と言、のび太は天井を見上げた。天井には案の定、調理人室にいたような怪物が2体程、こちらを睨んでいた。

「なっ！こんな所にまでいるのか！」

と言うとのび太は素早くショットガンを構え、1発撃った。見事2体の怪物に命中し、天井から落下した。

A A A A A A A A A A A A ! ! !
K I S H A A A A A A A A A A A A A

一発だけでは死なず2体の怪物はのび太に向かって来た。のび太はそれに慌てる様子もなく、ゆっくりハンドガンの引き金に指をかけ、引き金を引いた。

バ
ア
バ
ア
ン
!!
!!
!!

発射された2発の弾丸は2体の怪物に向かって一直線に飛んでいった。

[illegible]

怪物は最期の断末魔の悲鳴をあげて息絶えた。

「この先は大浴場か。向こう側に見えるのは脱衣所だな。まあ順に調べるか。」

と言つとのび太は、男湯脱衣所と女湯脱衣所を調べた。しばらくすると、のび太が探索を終え、言つた。

「収穫は男湯脱衣所にあつた『201』と書かれたタグが付いている鍵か。もうここら辺には何も無さそうだし、2階へ行くか。」

そしてのび太は、階段で2階へ上がった。見た所、のび太の左に大きな扉があり、右方向の階段側には3つの扉が並んでおり、その向

「まずは左に見える大きな扉に入るか。それから客室だと思われる3つの部屋に入ってから奥の扉に入ろう。」

「中はどうやらバーのようだな。テーブルの上に放置されている酒瓶と酒が注がれたままのジョッキを見ると、直前までここを使っていたようにも見える。．．．まあここを探索しよう。」

「ここにもピアノがあるのか。もしかしてこれを使って演奏会でもしていたのかな？ まあ別に今は関係ないけど。．．．．．もしかしてまた『月光』を演奏するのか？ まあ健治とジャイアンも直に来るからその時に考えよう。」

! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! !

[illegible]

「健治！！」

「おう、のび太、無事だったか。俺とジャイアンは少し前にここに来て、大雑把に2階を探索したところだ。そうだ、これ見つけたからやるよ。」

「これは……?」

「あれ？103号室は鍵が掛かっていたはずだけど。」

「それはジャイアンが扉ごとぶっ壊した。」

「……ジャイアンは相変わらず凄いな。」

「ああそうだよな。ゾンビも素手で倒しちゃうし。」

「そうだ！ジャイアンは今どこにいるの？」

「ジャイアンか？今は下で探索をしている最中だと思うけど。」

「成る程。……あ、そうだ。ここにもピアノがあるんだけど、また『月光』を弾くところかな？」

「ああ、その問題なら解決したぜ。これを見てくれ。」

と言つて、健治は何かの手紙みたいなものを出した。

「何これ？」

「まあ見てみるよ。」

すると、のび太は封筒から便箋を出して読みはじめた。そこにはこう書いてあった。

『ある研究員の伝言』

事故のせいでこの旅館は一瞬にして地獄と化した。奴らは生きるために食べることだけを考え、行動している。私の仲間も何人も殺され、奴らの仲間となった。

すぐ後ろで扉を叩く音がする。私の人生も後僅かだ。だがこのまま死んでは何も残るまい。パズル好きな私はある面白いパズルを作ってみた。

この研究所の真実を知ろうとする者達が必ず現れると思う。勿論、迷い込み、脱出を目指している生存者達もこれを是非解いて欲しいと思う。

パズルの内容はいたって簡単。今から私が隠した金庫のナンバーの一部がある場所を言う。君達はそれを探してくれればいいだけだ。金庫の中身はこの旅館の鍵を入れておいた。その鍵が無いと研究の真相を掴む事は出来ないし、脱出の術も無くなるだろう。それでは問題を言おう。

金庫ナンバーの隠し場所。

1．酸素の多い箱の裏。

2・演奏会の常連客のポケット。

3・空の無い黒と白の裏。

1、3の順に金庫のナンバーを入れればそれで開くはずだ。私はこの伝言を書き終えたらこのパズルで悩む者達の顔を目に浮かべながら、人生の幕を閉じよう。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・この謎掛けは解けたの？」

「・・・・・・・・・・解けたというか何というか、まあ例の如くジャイアンがだな・・・・・・・・」

「ああ、金庫を破壊したってことね。」

「ああ。だが3つの中の1つは解けたぞ。」

「ん、どれ？」

「この3つめのやつだ。『空の無い黒と白の裏』と書かれているだろ。これは多分ピアノのソトラの音階の鍵盤が壊れているという事だと思う。」

と言うと健治はピアノの蓋を開き、ソトラの音階の鍵盤を確認した。「思った通りだ。ソトラの音階の鍵盤が無くなっている。んで、その裏って事は・・・・・・・・」

と言って健治はピアノの裏に回り込んだ。すると、何かを見つけた。「ほら、思った通りだ。裏に解錠コードの一部が書かれた紙があった。」

と言い、ピアノの裏に貼り付けられていた1つの紙をのび太に見せた。それには『ナンバー3 「1」』と書かれていた。

「成る程ね。」

と、のび太が言った。

「因みに金庫の中に入っていたのは『大広間』と書かれている鍵だ。俺は太郎を連れて大広間を探索する。のび太はこの辺りの客室と大広間の手前の所を探索してくれ。」

「ん？そこは探索したんじゃないかったのか？」

「一応したが、先刻も言った通り大雑把に探索しただけだから見逃してる所もあるかもしれない。それに大広間の手前の所には電子口

ツクが掛かっている部屋があるんだ。」

「電子ロックが掛かっている部屋！？旅館にそんなセキュリティが必要なのか！」

「まあな。この旅館も結構怪しいぜ。相当古く見える反面、最近まで使っていた形跡があるし、旅館にしては客室が少な過ぎる。しかも2階までしかなく、見取り図を見たところ食堂も無い。おかしいと思わないか？」

と健治が言つと、のび太は見取り図を取り出して、それをじっくり見た。

「・・・・・・・・・・・・・・・・確かにおかしいな。・・・・・・・・それと健治。電子ロックが掛かっている部屋つてのはこの酒蔵の事か？」

と言つてのび太は酒蔵と書かれている部屋を指し示した。

「ああそつだ。だが酒蔵といえども調べる価値は充分にあるだろう。この旅館自体もかなり怪しいからな。」

「ああ。」

「じゃあ俺は大広間を探索してくる。のび太は先刻言つた所を探索してくれ。」

「わかつた。」

と言つと、のび太と健治はそれぞれの探索場所に行った。

AREA 2『不穩』（後書き）

どうも久し振りのMONDOERAです。前回はあるな事になって
すいません。こちらもいろいろと忙しいので。まあそれは置いて、
いつものあとがきルームを開始したいと思います。今回のゲス
トは、ジャイアンと健治です。

「なんか前も出たなこのメンバー。」

「それより、俺の出番が全然無い。通信に出ただけじゃねえか。」
まあまあ落ち着いて、次の話で一段落着くから。

「まあそれならいいが。」

「でもまああれには驚いたぜ。ほら、ジャイアンが金庫をぶっ壊し
た事。」

「あああれな、ハードサポーターと俺の拳があれば楽勝よ。」

（普通は無理だけだな。）

「それはともかく。おい、作者！更新速度遅すぎだよ！！」

いや、ちよつと僕もいろいろと忙しいんですよ。シナリオは問題
無く浮かんでくるんですけど。

「うむ、それならいい。」

ならここら辺で次回予告。

遂に旅館編も終了（早いなあおい。3パートしかねえぞ）。大広間を
探索する健治が見たモノは！そしてのび太の見たモノは！

と、こんなもんです。更新をお待ちください。

AREA3『迫り来る"何か"』（前書き）

また遅れてしまいました。取り敢えずこれで旅館編終了です。

今までは1話分は2000〜4000文字でしたが、今回10000越えています。これからも頑張っていくので応援宜しくお願いします。

AREA 3 『迫り来る"何か"』

のび太は早速201号室から探索を始めた。そして、奥へ進んで行った。そして、目の前に見事に破壊された金庫があった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・これがジャイアンが破壊した金庫か。よく破壊できるなこんなもん。」

と言いながら、のび太は探索を始めた。・・・・・・・・・・

しかし、何も見つからなかった。
続いてのび太は202号室、203号室を調べた。203号室に榴弾があつた他は、特に何も見つからなかった。

「何もないな。仕方ない。次は大広間の前の部屋を探索するか。」
と言い、のび太は奥へと進んだ。

奥の部屋へ進むとすぐに電子ロックの扉は見つかった。

「これが健治が言っていた電子ロックの部屋か。一応見てみよう。」
そう言うとのび太は電子ロックを見た。その電子ロックはパズル式で、3×3に配置されている9つのボタンを全て光らせるというものだった。のび太もそれは容易にわかった。しかし、肝心のパズルを解くことは難しかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・できない。しかもなんか堂々巡りしているような・・・・。だけど諦めるわけにはいかない！」

そして、のび太は諦めずにパズルを解いていった。しかし、今だ出来ずにいた。

「くっ、こうなったら自棄だ。」

のび太は自暴自棄になって、目茶苦茶にボタンを押した。・・・・・・・・・・

偶然ボタンが全て光った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・偶然って恐ろしいね。」

なんて事を言いながらものび太は中へ入って行った。中には酒樽がたくさん置いてあつた。

「酒樽がたくさん置いてあるな。……ここが酒蔵って事か。……重要な物があるかもしれない。取り敢えずここを探索しよう。」
そう言うとのび太は探索を始めた。

暫くして、探索が終わった。酒蔵から見つけたのは、ハンドガンの予備マガジンが1つと、12ゲージショットシェルが2つ、後は何かの紙だった。

「なんだろこれ？」

と言うとのび太はその紙を見た。それにはこう書いてあった。

『酒蔵管理者の手記』

遂にこの日が来てしまった。地下の牢屋で飼育していた3体の『フローズヴィニルト』が牢を破り2階に上がってきた。奴らは大広間に居座っている。奴らの力は驚異的だ。人一人引き千切る事など容易にやってのける腕力を持っている。にもかかわらず敏捷性にも長け、瞬時に回り込まれることもある。例えば広い空間であっても、大広間のように閉鎖された空間内では奴らに勝つのは非常に困難である。幸い、大広間の扉に鍵をかける事には成功した。これで奴らは大広間から出られないだろう。知り合いの高鷹こうたかに鍵を預けておいた。高鷹には「これは例の実験に深く関わる鍵だから暫く金庫に入れて嚴重に保管してくれ。」と言っておいた。まずは安心だ。しかし奴らが扉を破壊しないとも限らないし、パズル好きな高鷹が誰かに鍵を渡さないとも限らない。だからこれを見ている者に言おう。

例えば大広間の鍵を手に入れたとしても大広間には絶対に行くな！！奴らにかかつては特殊部隊であろうとも一瞬で殺される。これを見ている者が一般人なら脱出の方法を探しているだろうが、この大広

間には脱出の手掛かりはない。しかし、脱出の手掛かりはすぐ傍の小学校にある。その場所は4階西の』

「・・・・・・途中から血で汚れていて見えないな。それよりも、大広間に3体のフローズヴィニルト？何か知らないが、とても危険なものだということはこの文面からわかる。だとすれば健治が危ない！！急いで大広間に行かなきゃ！！」

と言うとのび太は大広間に急いで向かった。

その数分前、大広間では・・・・・・

「・・・・この先が大広間のようだな。行くか。」

と言って健治は大広間の鍵を使い、扉を開けた。所々腐っていて、古そうに見える扉だったが意外と簡単に開いた。

「ここが大広間か。・・・・・・ぱつと見た感じ、特に何もなさそうだがこんな旅館だ、虱潰しに探したほうがよさそうだ。」

「そう言うと健治はすぐ傍に物置部屋があることに気が付いた。そして、扉を開け、安全なのを確認すると、太郎に話し掛けた。

「よし、太郎はその物音に隠れていてくれ。何が出るか判らないからな。」

「うん。わかった。」

そして太郎は物置に隠れた。

「さて、探索をするか。」

と言って健治は探索を開始した。しばらくして探索を終えた健治が呟いた。

「何もなかったな。さて、太郎を連れて他のところの探索をするか。」

と言った瞬間、天井から何かの奇妙な生物が3体下りて来た。不意を突かれた健治は反撃することもできず、袋だたきにあうが何とか抜け出し、大広間のドアに向かった。

一方その頃のび太は、急いで大広間に向かって行った。

「急がなきゃ！早く健治に知らせないと！！」

のび太はそう言っている内に、酒蔵から大広間へ向かって走っていた。やがて、大広間の扉の前まで来て扉を開けた。

「け．．．．．け．．．健治！！？？」

のび太は驚愕した。そこには血だらけの健治がいたから。

「の、のび太あ。この大広間はき．．危険だ。早く．．逃げ．．ろ。」

「わ、わかつてる！酒蔵で拾った手記にこの大広間には3体のフロ―ズヴィニルトが居ると書いてあったそいつらがどんなのか知らないがかなり危ない奴らしい！健治も早く逃げよう！！」

「．．．．．俺はもう駄目だ。こんな深手を負ってちゃあお前にまで迷惑を掛けちゃう。」

「で．．．．でもっ！！」

「．．．．のび太、俺実はさ、理科室でお前が戦つてるところを見てたんだよ。」

「．．．．．」

「お前つて凄いよな。いつもは頼りないのに、こんなときにはと急に逞たくましくなつてさ。それに比べて俺はたいした実績も上げてない。」

「そ、そんな事無いよ！ほ、ほら音楽室で月光を弾いてくれたじゃないか！」

「ああ。それで俺は思つたんだ。」

「？」

「人にはその人にしかできないことを持っているって事を．．．．．だつたら俺は俺にしかできない事をする！自分の役をまっとうするんだ！！」

「そ、それでも死んじゃあ意味が、」

と、のび太が言い掛けたその時だった。大広間の中央にあるシャンデリアの上から唸り声が聞こえてきた。

少しは効いたものの、また直ぐフローズヴィニルトは向かって来る。のび太は後退しながらもショットガンを撃ちまくる。しかし、3体の中の1体がのび太に殴り掛かってきた。のび太は素早くそれを横に交わした。そして、その隙をのび太は逃さなかった。フローズヴィニルトの横っ腹に向かって至近距離でレミントンM870をぶち込んだ。

[illegible]

悲鳴をあげ、フロースヴィニルトはその場に倒れた。しかし直ぐ他の2体がのび太に向かって来る。のび太は大広間の壁に沿って移動しながらショットガンを撃ち放った。僅かながら怪物へのダメージも目立ってきた。すると、1体のフロースヴィニルトがのび太に、超高速で向かって来た。

GOAAA!

それを見たのび太は、壁を蹴り、その反動で反対側に移動し、フローズヴィニルトの攻撃を避けた。しかしフローズヴィニルトも直ぐに方向転換し、のび太を追う。のび太はバックからグレネードランチャーを取り出し、何を思ったのかフローズヴィニルトに急接近していった。そしてグレネードランチャーの銃口をフローズヴィニルトの口に向けた。

「もう榴弾は装填されてある。喰らえ！」

と言つてのび太は引き金を思いっ切り引いた。いきなり急接近したのび太に驚いていたフローズヴィニルトは、何もできずに頭を吹っ飛ばされた。

「ふう。」

安心したのび太がもう1体いるのを忘れていた。もう1体のフローズヴィニルトがのび太に接近してきた。

「うわっ、しまった。もう1体いたんだっ」

のび太は直前に気づき、咄嗟に避けた。しかし、いきなりの事だったので、グレネードランチャーを落としてしまった。

「しまった！グレネードランチャーが！」

すると、その隙を逃さないが如くフローズヴィニルトが急接近してきた。

「駄目だ、もう間に合わない！」

のび太は床に尻を付いてしまった。その時、右手に何かの感触と金属音がした。

力チャ。

「な、何だこれ。・・・健治のナイフだ。」

しかしそうこうしている内にフローズヴィニルトが直ぐ近くにまで接近していた。

「くっ、これを使うしかない。健治、仇を討つ！」

そう言うとのび太はナイフを持った。しかしフローズヴィニルトが左手を振り上げて、今にも攻撃しそうな体制だった。そして、

フローズヴィニルトは一気に左手でのび太を殴りつける。すると、のび太はそれを右に回転しながら捌き、右手でナイフの柄を持ち、左手を右手に沿え、一気にフローズヴィニルトの首に突き刺した。

[illegible]

フローズヴィニルトは悲鳴をあげる。

「このまま、切り裂く!!」

ズバンツ、ブシイイイイ！！

のび太はフローズヴィニルトの首を切り裂いた。フローズヴィニルトはその場で倒れ、もう動かなかった。

「終わったか。健治、仇は討ったよ。さて、物置部屋にいる太郎を連れてこなきゃ。」

そう言うとのび太は物置部屋を向く。その時だった。

「G K Y A A A A A A A A A A A A A A A A
A A A H H ! ! ! ! !」

「！！な、何い！！！」

「自分を責めんじゃねえよ。こんな状況だ。誰が死ぬかわからねえ。」

「……うん。……でもさっき撃った銃は凄かったよ。」

「この事か。」

と言い、ジャイアンはポケットからマグナムを取り出した。

「これはマグナムって種類の銃で、『デザートイーグル』というらしい。」

「何でジャイアンが銃の名称を知ってるの？」

「実はこれは静香ちゃんに貰ったものでな、その時にこの銃の種類や名称、後は特徴なんかを教えてもらったんだ。」

「ふん。」

のび太は腑に落ちない部分があったが、一応は納得したふりをした。

「だけど最後に健治が言った言葉、気になるな。確か『この旅館は、俺達の学校は……』って言うていたけど。……」

「……ん！何だこれ？」

のび太はふと健治を見ると、違和感があるのに気がついた。血が不自然に付いていたのだ。のび太はその不自然な所をよく見た。すると、

「これは何かの紙か？」

と言つてのび太は血まみれの紙を拾い上げた。その紙は2枚のFAX用紙のようだった。そしてのび太はそのFAX用紙を読みはじめた。それにはこう書いてあった。

『7月20日

長、こちらは順調に実験が進んでいますよ。もちろん例の子供達の間も順調です。T-virusワクチンの投与もしました。後は意図的にバイオハザードを起こし、奴らの戦闘データを録るだけです。社員NO.440422332204より。』

『7月21日

報告ご苦労様といったところかな。まあ明日辺り僕も、そっちに向かうから。僕も彼等の戦闘の様子を生で見たいからね。じゃあ詳しい話はそちらに行ってから聴くことにするよ。

社員NO・33542242より。」

「……………ん？もう一枚紙があるようだ。」

「のび太はもう一枚紙がある事に気がついた。そしてのび太はそ手紙を読んだ。それにはこう書いてあった。

『BHRカンパニー幹部のE・Dさん。4階西のエレベーターのバッテリーが切れていたので、外しておきました。予備のバッテリーは家庭科室に置いてあります。研究所か坑道へ行くときには、バッテリーを装着するのを忘れないでください。』

「これは……………もしかしてこのバイオハザードは意図的に仕組まれてたものか！」

「だがまだ情報不足だ。結論を出すのは早いと思うぜ。」

「そうだな……………待てよ。そういえばさっきの手記に学校の4階西には何かがあるような記述があった。そしてこの紙を見ると、学校の4階西から研究所やら坑道やらに行ける記述がある。学校の4階に何かあるんじゃないか？」

「充分考えられるな。だが、4階に通じる階段はシャッターで閉まっていたぞ。」

「問題はそこなんだよね。だけど、何処かで制御できる部屋があると思うんだけど。」

「ああ確かにな。」

「あつ、そうだ！太郎が物置部屋に隠れているんだった。」

「のび太は物置部屋に太郎がいる事を思い出すと、物置部屋に向かつて行った。するとジャイアンが言う。

「じゃあ今度は俺が連れてくよ。」

「ああ、ありがとうジャイアン。」

「お前は太郎を呼びに行ってくれ、俺は健治の死体を隠す。太郎に

は刺激が強すぎるからな。」

「ああ頼んだよ。」

と言うとのび太は物置部屋に向かった。そして太郎を見つけた。

「あつのび兄ちゃん。健治兄ちゃんは？」

「……………健治はもうこの世に居ないよ……………」

「……………え!？」

「早く動こう。僕達は生きてここから脱出しなければいけない。健治の為に！」

「……………うん!」

そう言うのと太郎はのび太についていった。

「あつそうだ。健治兄ちゃんが『もし俺に何かあったらこれをのび太に渡せ』って言うてたんだ。」

と言うと太郎は何かの鍵をのび太に渡した。

「ああ、ありがとう。」

そしてのび太と太郎は物置部屋を出た。そしてのび太は太郎をジャイアンに預け、大広間を後にした。

「そうだ。太郎から貰った鍵をよく見てなかったな。もう一度見てみよう。」

と言うとのび太はポケットから鍵を取り出した。その鍵にはタグが付いており、そのタグには『管理人室』と書かれていた。

「管理人室か。見取り図で確認してみよう。」

そう言うとのび太はバックから見取り図を取り出した。

「……………」

あった・けど、特殊だなこれ。2階から梯子で降りて、地下1階の牢屋にあるのか。取り敢えず梯子のある203号室に行こう。」

と言うとのび太は203号室へ向かって行った。そして部屋の中へ入った。

「場所は……………この奥だな……………」

本棚があるな。場所的にこの裏か。」

と言うとのび太は、本棚を横に動かした。すると、奥に下に行く梯

「……よし、降りるか。」

カンカンカンカン・・・。

「さて、早速探索するか。」

「WAA!」

と言つとのび太は慎重に壁の向こうを見た。すると、

とび太の言う通り

バン！

弾丸は犬の頭に直撃した。続いて2体目にも発砲する。

「C
A
I
N
!
!」

「ふう。よし、周りを警戒しながら探索していくか。」

「牢屋か。牢屋の戸が開いているな。あの犬はここに居たのか。ま

と言つてのび太は、牢屋の中を調べはじめた。しかし何もなかった。

「何もないな。よし、反対側を調べよう。」

そう言うとのび太は、反対側へ進み、扉を開けた。中は前の所と同じ牢屋があった。そして傍には頭を喰われた跡がある死体。それに、金属製の扉があった。

「まずは牢屋を調べよう。」

と言うとのび太は牢屋をくまなく調べた。やがて、のび太は牢屋を調べ終わった。

「牢屋には何も無かったな。でも、牢屋にあった3つの穴は恐らくあのゴリラみたいな怪物がぶち破ったものだな。」

さて、次はあの金属製の扉を調べるか。差し当たり管理人室だと思うんだけど。」

と言うとのび太は、扉の前まで来た。扉の上の方には、『管理人室』と書かれたプレートがあった。

「予想が当たったみたいだな。早速この鍵を使って開けよう。」

と言うとのび太は鍵を使い、管理人室の扉を開けた。中は変わった様子も無く、テーブルと箱があるだけだった。

「まずは箱から調べるか。」

と言うとのび太は箱を開けた。

中には『アサルトライフル』と5・56mm NATO弾2つとハンドガンのマガジンが3つと12ゲージショットシェルが2つ、更に焼夷弾が2つ、硫酸弾が3つ、榴弾が4つがあった。

「この箱は武器庫だったのか？何にせよ助かった。それにこの『アサルトライフル』、どうやら『M4カービン』らしいな。アサルトライフルはサブマシンガンよりも使いやすからな、貰っておくか。」

と言うとのび太は次にテーブルを調べ始めた。テーブルの上には救急スプレーが1つと何かの紙が1枚あった。

「何だろうこの紙。」

と言うとのび太は紙を広げた。それにはこう書いてあった。

『ある研究員の遺書』

7月23日

一緒に逃げていた宮部に、化け物の兆候が現れ始めたので、仕方なく殺して浴室に入れておいた。多分、これで私が最後の一人だ。何故このようになってしまったのか？

今となつては、この研究に参加した事が悔やまれる。最早、私が生きてこの旅館を出ることは無いだろう。準備は終わった。後は勇気を持つただけだ。悔いは残るが仕方が無い。このまま化け物になって人間としての自分が消えてしまうぐらいなら自らの幕を……………

許してくれ、真理奈。』

「……………どうやらここにいた人達は被害者で、事件が起こるまでは何も知らなかったみたいだな。意図的にバイオハザードを起こそうとしたのは他にいるみたいだな。……………取り敢えず後少し探索をするか。……………ん？」

と言うとのび太はテーブルの上にある物に気がついた。

「これは、鍵かな？」

のび太はテーブルの上にある鍵を取った。その鍵にはタグが付いて

おり、『制御室』と書かれていた。

「タグには、『制御室』と書かれているな。……………」
待てよ、確か学校の南舎3階に制御室があったような……………。
よし、学校に行ってみよう。」

と言うとのび太は管理人室を出て、梯子を使って2階に行った。そして203号室を出た。すると、

バアン！バアン！

「銃声？階段の方からだ。」

と言うとのび太は階段の方に向かった。すると、そこには懐かしい者が居た。

「ドラえもん！！無事だったんだね！」

「のび太君じゃないか！無事でよかった！」

「それはこっちの台詞だよ！あの後何処に行ったかわかんなくなっちゃうし……………。ここは一体どうなっているの？」

「僕にも判らない。僕もミーちゃんに会いに行く途中で、得体の知れない変な怪物達に襲われたんだ。」

「でもよかった。ドラえもんに会えて。さあドラえもん、『どこでもドア』を出して。早くこの街から脱出しよう。」

「……………。言いくいんだけど、ポケットが壊れちゃって秘密道具が全部お釈迦になっちゃったんだよ。」

「そんなあ……………。じゃあ『タケコプター』も使えないじゃないか。」

「助かるには脱出ルートを見つけないよ。」

「そうか。」

「そつえばまだ学校に鍵が掛かった扉が沢山あったよね。君はもう一度学校を探索してきてくれないかい？丁度鍵も持ってるみたいだし。」

「……………。何でドラえもんが僕が制御室の鍵を持つてることを知ってるのさ？」

「のび太君……………。手に持つてるそれ……………鍵でしょ？そ

れに僕は『制御室』とは言っていないよ。」

「え、・・・あ、ああそういえば言っていなかったな。」

のび太は右手にずっと握り締めていた鍵に気がついた。

「解った。探索してくるよ。」

「じゃあ僕はもう少しこの旅館を調べるよ。」

と言うとドラえもんは大広間の方に向かって歩いて行った。

「さて、取り敢えず学校に戻ろう。」

と言うとのび太は1階に降りて、旅館を出た。そして裏山を下山し始めた。

その頃、・・・

「ふう、ここら辺も大体探索が終わったな。大広間の探索が終わるか。」

大広間での探索を終えたジャイアンが呟いた。しかし次の瞬間、大広間の扉が開いた。

「誰だ！」

ジャイアンは咄嗟に振り向き、銃を構えた。しかし見覚えのある人影を見て、ジャイアンは安心し、銃をしまった。

「ドラえもん！！無事だったのか！」

「うん。でもポケットが壊れちゃって秘密道具が使えなくなっちゃったんだ。」

「何だって！じゃあ自力で脱出するしかないって事か。」

「・・・そうなるね。」

「・・・ドラえもんは今来たところなのか？」

ふと、ジャイアンがドラえもんに聞いた。

「・・・ちよつと前に来て1階を探索したところだよ。」

「そうか・・・。」

「旅館の探索は僕がやっておくよ。ジャイアンは学校の方に行ってくれ。」

「ああ解った。・・・気をつけるよドラえもん。」

「解ってるよ。ジャイアンも気をつけてね。」

「よし、太郎。学校に行くぞ。」

と、ジャイアンが言うと、太郎が言う。

「うん。解った。」

と言うとジャイアンと太郎は大広間から出た。

暫くしてドラえもんがそこにある3体のゴリラを見る。

「銃創、爆発痕、切り傷。これは誰がやったんだろう?.....

.....でも誰がやったにしても、こんな怪物を倒すって事は相当の腕の持ち主だろうな。」

そう言い残し、ドラえもんは旅館の探索を始めた。

AREA3『迫り来る"何か"』（後書き）

今回のあとがきルームはっ！ゲストをのび太君にしたいと思いまっす！！

「やたらテンション高いね。それに何で僕1人？」

だって、前書きで言っただけだけど今回は文字数が10000越えしたし、取り敢えず一段落ついたって事でさ。

「・・・それはいいけど僕1人の理由は？まさかまた人を集めるのが大変とか？」

「・・・ん、・・・まあそれもあるけど、取り敢えず『CHAPTERの終わりとか、一区切り付いたときに、のび太を1人で『あとがきルーム』に出そうかなと思っていたから。」

「ふん。そう。」
まあ、作中に出てきた資料も作中で言っただけ、ここで言う物は無いな。（もし言っただけだったものがあれば、感想欄に一言お願いします。）

次回予告は、・・・要らん。

「ええ！？」

だってほぼ同時に投稿してるし。

「まあいいか。」

こんな作者ですが今後とも宜しくお願いします。

次回のあとがきルームでまた会いましょう。

AREA 1『怪物』

のび太はスムーズに下山し、学校の裏口まで来た。しかしのび太はこの時まで知らなかったのだ。学校にとんでもない化物が潜んでいることを……。

「ふう。取り敢えず南舎4階にある制御室の扉をこの鍵で開けるか。」

「
」
と言つてのび太は裏口の扉を開けた。そして南舎に行こうとした時だった。

ガチャ。

扉の開く音がして、向こうから誰かが出てきた。

「……………ゾンビか。」

のび太は落ち着いた様子で銃を構えた。しかし、ゾンビの向こう側から緑色の”何か”が飛んできて、ゾンビの首を跳ねた。

「何だこいつは!!!!!!!!!!」

突然飛んできた”それ”は、肩幅が広く、背は1.7Mはあり、恐らくは人の首をも簡単に跳ばせるであろう鋭い爪があった。

「KIYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!」

唸り声をあげてのび太に襲い掛かる。のび太はバックステップでそれを避け、グレネードランチャーを怪物に撃った。

「KIYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA
AAAAAAAAA!!」

のび太の放った榴弾は怪物の首辺りに命中し、爆発した。怪物は断末魔の叫び声をあげて、その場に倒れた。

「何だコイツは……!? こんな怪物先刻は居なかったはずなのに!?」

すると、何処からか叫び声が聞こえてきた。

「キャアアアア!!」

「聖奈さん!? 南舎からだ!!」

と言つとのび太はすぐ傍の階段を昇り、南舎に向かった。南舎に向かう途中もあの緑の怪物が数体居た。

「何なんだこの怪物は！？僕が旅館に行つて居ない間に何があったんだ！？」

と言いながらものび太は南舎に続く廊下を抜け、南舎のドアを開けて南舎に着いた。

「声が聞こえたのはこの辺りかな？」

と言うとのび太は視聴覚室の扉を開けた。

そこには、教卓の辺りで座り込んでる聖奈と、その聖奈を今にも襲い掛かろうとしている緑の怪物が居た。

「聖奈さん!!」

のび太が聖奈に向かって叫んだ。

「K I Y A A A A A A A ! !」

怪物は尚も聖奈に襲い掛かるうとしている。

「おい化け物！こっちに來い！！」

のび太が怪物を挑発すると、怪物は一直線にのび太に向かって来た。すると、のび太は素早く左に避け、至近距離でショットガンを撃った。

A A A A A A A ! !
K I Y A A A A A A A A A A A A

怪物はその場に倒れた。

「聖奈さん大丈夫ですか!？」

のび太は聖奈に駆け寄る。

「のび太君……心配かけてごめんなさい……」

「間に合ってよかったよ。ここはもう危険だ。早く脱出する方法を探そう。」

「はい。」

「僕が先に行きます。聖奈さんは仲間と合流して行動してください。その間は君一人になるが冷静に判断して行動するんだ。」

「解りました。」

「絶対に生きてここを脱出しよう！」

と言うとのび太は、視聴覚室を出た。その時、

R R

いきなり通信機が鳴った。のび太はそれに出る。

「こちらのび太。………ジャイアンか。どうしたジヤイアン。」

「のび太か！今何処に居る？」

「……視聴覚室だけど。何かあったの？」

「どうやらスネ夫が北舎1階の体育館に行ってるみたいなんだが、危険な状態らしい。悪いけど行ってくれねえか？」

「解った！すぐ行く！！」

と言うとのび太は体育館へ向かった。

AREA 1『怪物』（後書き）

今回もあとがきルーム開館です。今回のゲストはのび太と聖奈です。

「僕よく選ばれるね。」

「私はのび太さんと一緒に出るのは初めてですね。」

「まあ、そうだね。・・・そうだ、聖奈さんはいつあの怪物の存在に気付いたの？」

「え」と。のび太さんが来る少し前にあの怪物が現れたんです。私とスネ夫さんは、丁度探索をしていて、それで2人で分かれて逃げたんです。スネ夫さんも無事だといいいけど。」

「ああ、そこは大丈夫。さつきスネ夫から通信があったから。」

「あつ、そうなんですか。よかった。」

（スネ夫が今どんな状況かもわからないけどね・・・・・・。）

お前らばかり話してんじやねええい！！

「うわつ、ビックリした。」

作者を忘れないでくれよ。

「ごめんごめん。」

さて、今回で新しいCHAPTERに到達しましたね。だいたい全体の半分くらい進んだでしょうか。まあこれからも頑張っていきますけれども。どうやってたら感想を沢山もらえるか考え中でもあります。

「まあ、頑張つて下さいね。」

（おのれ、人事だと思つて。）

「それじゃあこれくらいで切り上げましょうか。」

そうだな。では、次回予告。

体育館に着いたのび太、そこには危険な状態のスネ夫が居た。のび太はスネ夫を助けられるか？

・・・こんな感じです。あ！あと、次回では新キャラが登場します。楽しみにしていってください。

AREA 2『生存者』

のび太は南舎の階段を駆け降り、1階に行ってから北舎に向かった。やがて北舎に着いた。

「この奥の筈だ。待つてろよスネ夫！」

と言うとのび太は体育館の扉が見えた。入ってすぐ目についたのは、ステージの上でアサルトライフルを連射していたスネ夫であった。そしてその下にはゾンビが群がっている。

「スネ夫！！」

そうだ、グレネードランチャーで！」

そう言うとのび太はゾンビの足元に向かって榴弾を撃った。

ボガアアン！バリン！

当たった床板は爆発で崩れ落ちた。その床板に乗っていたゾンビ達は勿論体制を崩した。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

「アアアオオオオオオオオオオ。」

「ウワアアアアアアア。」

「ウウウウウウウウウウウウウウウ。」

「ウアアアウウ。」

「アアアアアアアア。」

「ウオオオオオオオオオウウ。」

のび太はすかさずスネ夫に叫んだ。

「今だスネ夫！」

すかさずスネ夫がアサルトライフルを撃ち放つ。のび太もM4カービンで応戦する。2丁のアサルトライフルによる銃弾の雨を受けては、流石に何体もいたゾンビもすぐ倒れた。ゾンビを全員倒すとスネ夫がのび太に駆け寄ってきた。

「ありがとうのび太。助かったよ。」

「スネ夫も気をつけてよね。」

「ああ解ってるよ。まだこの探索が終わってないんだ。」

「じゃあ2人で探索しよう。まずはステージ周辺からだ。僕が右を探索するから、左をスネ夫が頼む。」

「ああ解った。」

2人は会話を交わすと、早速探索に取り掛かった。

暫くして、のび太とスネ夫が元の場所に戻ってきた。

「こっちは何も無しだ。スネ夫、そっちは？」

「こっちも何も無かった。」

「そうか・・・、じゃ残りは後ろの体育倉庫だけだな。」

と言うとのび太とスネ夫は、体育倉庫に向かって歩いた。すると体育倉庫の入口にはゾンビが大量にいた。

「・・・ゾンビがかなりいるな。」

「のび太、早めに片付けようぜ。」

「でもなんかおかしくない？」

「何が？」

「何でゾンビが体育倉庫のドアを叩いてるのさ？」

「さあ？知らないよゾンビの考えてる事なんて。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ゾンビって確か僕達みたいな一般人を襲うんだよね。」

「……！体育倉庫の中に生きてる人がいるって事か！」

「多分そうだと思う。」

「じゃあ尚更このゾンビ達を倒さないと！」

「だけどちよつと待ってよスネ夫。体育倉庫のドアは木製なんだよ。このまま撃つたら向こうに貫通しちゃう。」

「じゃあどうするんだよ？」

「ゾンビの注目をこっちに向ければいいんだ。こういうふうにな。」
と言うとのび太はゾンビを蹴った。

「な、何してんののび太！？」

「いや、……だってドアから放さないといけないし。」

「荒っぽいよ！」

しかしそんな会話をしている間にゾンビ共はのび太達に近づいていった。

「おつと、そんな事を話している場合じゃなさそうだ。スネ夫二手に分かれよう。」

「OK！解った。」

と言うとのび太は左に、スネ夫は右に散開した。そしてのび太はハンドガンでゾンビを的確に狙い、スネ夫はサブマシンガンである、『UZI』を連射した。先程と同様、簡単に片が付いた。

「ふう、どうやらもういないみたいだな。」

「早く体育倉庫を確認しよう。」

と言うとのび太とスネ夫は体育倉庫の扉の前まで来て、そして、のび太達は扉を開けた。中には1人の女の子がうずくまっていた。

「ちよつと君……。」

と、のび太が言いかけた時、その娘が振り向き、のび太はその娘が誰だか判った。

「君は前の席にいた、真理奈ちゃん！」

「の、のび太君？ここは一体どうなってるの！？あの変な人達は何！？？」

「詳しい話は皆を集めてからだ。ここは危険だ。取り敢えずここを

「出るのが遅かったけど、何かあったの？」

「ごめんなさい。出られない状況だったの。」

「そうか……。これから皆、一度相談室に集まるんだ。」

「解ったわ。他の人には言ったの？」

「ああ。他の皆には全員に連絡した。」

「じゃあ今すぐ行くわ。」

と、静香が言うとのび太は通信機を切り、相談室へ向かった。

やがて、相談室に着いた。中には、まだジャイアンしか居なかった。

「おうのび太。まだスネ夫達は来てねえぞ。」

「解った。」

と言うとスネ夫と聖奈が相談室に入って来た。そしてスネ夫が喋る。

「まだ来てないのは静香ちゃんか？」

「ああそうだ。だけど、先に真理奈ちゃんに現状を説明しよう。・

・・・つと言っても僕達もあまり知らないんだけどね。」

と言うとのび太は徐に語りはじめた。

「僕達は3日前まで無人島にバカンスに行ってたんだ。でも、帰ってきたらいきなりこんな事になっていたんだ。只一つ判っているのは、あの怪物達は僕達、生きている者を襲って食べるっていう事だ。」

「な、なんていう事……。・・・。」

ると、ジャイアンが言う。

「だが、何かあるはずだ。自然にこんな事が起きるわけねえ！」

するとスネ夫が聖奈に訊いた。

「そういえば聖奈さんはずっとこの街に居たんだよね？いつからこんな状態になったの？」

「ええと、……確か数日前からテレビでは猟奇的殺人事件がどうのこうのってやってたけど、あのゾンビみたいなものが現れたのは今日からだったわ。」

と、聖奈が答える。

「って事は、いきなりゾンビが大量に徘徊し始めた訳じゃなさそうだな。」

と、のび太が言う。

「まっ、こんな所でグダグダ考ても仕方ねえ！探索あるのみだ！！」
と、ジャイアンが言う。すると、相談室の扉が開き、静香が入って来た。

「ごめんなさい。少し遅れちゃったわ。」

「大丈夫だよ。じゃ早速、探索結果の報告をしよう。」

「それじゃあ俺様から報告するぜ。」

と、ジャイアンが言う。

「俺様は裏山にある旅館で、弾薬を大量に手に入れた。俺様は使わないから、ここに置いとくぜ。」

と言うとジャイアンは弾薬をテーブルの上に置いた。そして次は静香が喋る。

「私は残念ながら殆ど何も見つけれなかったわ。だけど、各種ハーブを見つけたから此処に置いとくわ。」

と言うと静香はバックから緑、赤、青のハーブを大量に取り出してテーブルの上に置いた。

「じゃあ次は私ね。私は救急スプレーを数個見つけました。後は、皆から分けてもらったハーブで調合した回復薬です。」

と言うと聖奈は救急スプレーと、紫色の液体が入ったペットボトルを数個、テーブルの上に置いた。

「あ！後、探索の途中でこんな鍵を見つけました。」

と言って、聖奈がバックからタグが付いてなく、銀一色の小さな鍵を二つ出した。それを見たスネ夫が喋る。

「タグが付いてないから何処の鍵か判らないけど、このサイズからして、何処かの引き出しかロッカー、あるいは南京錠の鍵だろうな。」

そして最後に、スネ夫が喋る。

「じゃあ次は僕だね。僕は弾薬と銃器を見つけた。更に、何かのMOディスクとUSBメモリーを」

そう言うとスネ夫はテーブルの上に弾薬と銃器を置き、MOディスクとUSBメモリーを全員に見せた。するとジャイアンが喋った。

「中身は何なんだ？」

それにスネ夫が返す。

「まだ判らないよ。視聴覚室のパソコンなら判ると思うけど・・・。」

そしてジャイアンが全員に喋った。

「よし、じゃあ弾薬とハーブ等を全員で分けよう。」

と言うとジャイアンは弾薬とハーブ類を同じ数全員に配分されるように分けはじめた。

一方、のび太はというと、スネ夫に話し掛けていた。

「スネ夫。さっき言っていた銃器ってのはどれ？」

「ああ、これさ。」

と言うとスネ夫はショットガンとアサルトライフルを出した。

「・・・これは、『AK-47』と『ベネリM3』だな。・・・この『ベネリM3』、貰ってもいい？」

と言いながら、のび太はショットガンを持った。

「ああいいよ。」

と、スネ夫が言う。すると、のび太は隅っこにいる真理奈に話し掛けた。

「ちょっと、真理奈ちゃん。」

「ん？何？のび太君？」

「真理奈ちゃん。ここは危険だ。何か身を守る物が必要だ。これはショットガンといって、複数の弾丸を撃ち出す。僕の持っている『レミントンM870』とは違ってポンプアクションじゃなくてセミオートだから排莖の必要が無いから使いやすいよ。」

「で、でも私こんなの使えない!」

「真理奈ちゃん、気持ちは判るよ。でも今は非常時だ。自分の身は自分で守るしかないんだ。」

「……判ったわ。私もやってみる。」

と言うと真理奈はのび太から『ベネリM3』を受けとった。

「それはそうとのび太君、この銃は何ていう銃?」

「ああ、それは『ベネリM3』っていうんだ。」

「ふん。」

のび太と真理奈が会話を交わしていると、ジャイアンが皆に喋った。
「よし、こんぐらいだな。皆、弾薬とハーブ類の配分は済んだ。バツクに詰め込んだら、視聴覚室に行くぞ。」

と、ジャイアンが言う全員はテーブルの上にある弾薬とハーブ類を同じ数だけ取った。のび太も弾薬を取った。のび太はハンドガンのマガジン4個と12ゲージショットシェル2個と、榴弾2個、焼夷弾2個、硫酸弾2個と5・56mm NATO弾のマガジン（アサルトライフルのマガジン）2個と、
救急スプレー2個と紫色の液体が入ったペットボトル1個、グリーンハーブ4個、レッドハーブ2個、ブルーハーブ3個を取ってバツクにしまった。

するとスネ夫がのび太に話し掛けてきた。

「のび太、これやるよ。」

と言うとスネ夫はハンドガンのマガジン3個と12ゲージショットシェル2個をのび太に渡した。

「こんなにいいのかスネ夫。」

「ああいいよ。先刻助けてもらったしね。」

「……判った。ありがたく頂いておくよ。」

う。ここで考えていても仕方ないからな。」

「うん。そうだね。」

と、のび太が言う。

「なら2人一組で行動しようぜ。まず、スネ夫と聖奈さん、俺と太郎と静香ちゃん、そしてのび太と真理奈。3チームで行動だ。」

と、ジャイアンが提案した。皆はそれに賛成のようだった。

「よし、じゃあ散開！！健闘を祈る！」

と、ジャイアンが言う。と全員は視聴覚室から出て行った。のび太と真理奈のチームも視聴覚室から出る。そして真理奈がのび太に話しかけた。

「ねえのび太君。何処に行くあてはあるの？」

「ああ。南舎3階の制御室に行こうと思ってる。さっき鍵を見つけたから制御室でシャッターの操作が出来るはずだ。」

と言うとのび太と真理奈は一度北舎へ行き、3階に上がってから南舎へ行った。

AREA 2『生存者』（後書き）

あとがきルームの時間だZE!!

「いつになくハイテンションだな。」

いやいや、これぐらいテンションが上がないと小説の執筆が効率よく進まないって。

「あつそう。」

まあそれはそうと今回の『あとがきルーム』のゲストはスネ夫と聖奈です。

「『あとがきルーム』での私の出番が多いですね。」

「確かに。ちよつと多めに参加してるね。作者さんの何か意図的なもの？」

いや、成り行きでこうなった。今回の『あとがきルーム』のゲストは新キャラの真理奈を参加させようと思ってるけどね。

「成る程。」

因みに今話してる空間は『あとがきルーム』の中の『ミーティングルーム』という部屋なんだ。

「それじゃあ『あとがきルーム』はこの部屋以外にもあるって事ですか？」

その通り。だけど他の部屋はまだ準備中でね、今使えるのはこの部屋だけなんだ。後少しで使える部屋が一つあるけど、使えるようになったら、『あとがきルーム』でその部屋の紹介をしようと思う。

「後どれくらいかかるの？」

そうだな………一ヶ月か二ヶ月くらい経てば準備が終わると思う。因みに部屋が二つ以上使えるようになったらその複数の部屋からランダムで選ばれて、『あとがきルーム』の会場になるから。只、その部屋の仕様上、必然的に会場に選ばれる回数が減る事もあるから。でも一応リクエストは受け付けます。もう一度見てみたい部屋があったら感想欄に表記してくだされば、もし

かしたら会場に選ばれるかもしれません。

「ふうん、成る程ね。じゃあそろそろ終わりますか。」

あ！ちよつと待って。ちよつと伝えたい事があるんで。

mondora@gmail.com

上記に記載されてるアドレスが僕のパソコンのメールアドレスです。
この小説の感想欄では言いにくい事（ネタバレを含む質問等）の質問やリクエスト等をしてきて下さい。でも、メールを見るのが不定期なので返信が遅れることがあります。でも、なるべく早く返信するようにするのでこれからも宜しくお願いします。
では次回の『あとがきルーム』まで。

A R E A 3 『エレベーター』（前書き）

なんか毎回毎回更新が遅くなってすいません。でもこれで半分くらいは終わったかと。

AREA 3『エレベーター』

のび太と真理奈は南舎3階に着くと、真っ直ぐ制御室に向かった。
やがて制御室の前まで来た。しかしその時、異変が起きた。

ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド

！！

ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド

！！

ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド

！！

すぐ近くの教室から扉を叩くような凄まじい音が聞こえてきた。咄
嗟の事に、真理奈は驚いて、

「きゃあ！ちよつと何よ！怖い！！」

驚いた真理奈がのび太に飛びついた。

「恐らくはあのドアの向こう、・・・5年の教室にゾンビが居るな。
今の所は大丈夫みたいだけど、破られないとも限らない。早く動こ
う。」

と言うとのび太は、真理奈の手を引き、急いで制御室の鍵を開けた。
そして中へ入った。入った後すぐ、のび太は扉をしめて鍵を閉めた。
「取り敢えずこれで一安心だな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

真理奈はまだしばらく震えていた。たがのび太はここは幾らかは安
全だと思っていたので、真理奈の事は気にせずに、制御室を見渡し
た。制御室には何かの機械と、グレネードランチャー用の弾薬が一
つあった。のび太はその弾薬を拾った。

「・・・・こいつは榴弾だな。取っておくか。」

と言つてのび太は何かの機械に近づいた。その機械は『P・S・C・
S』と書いてあり、ディスプレイと幾つかのキーがあった。のび
太はその機械の電源を付けた。

『システム起動中・・・』

暫くすると、ディスプレイに文字が表示された。

『解放及び閉鎖するシャッターを参照して下さい。』

解放中シャッター：S1L / S1R / N1L / N1R / N2L / N2R

閉鎖中シャッター：S2L / S2R / S3L / S3R

シャッターを個別に指定して解放及び閉鎖する場合は対応するキーを押して、解放及び閉鎖のボタンを押してください。全てのシャッターを解放及び閉鎖する場合は『ALL』と書かれたキーを押しながら解放及び閉鎖のキーを押してください。』

「成る程、これでシャッターを操作できるということか・・・。」

と言うとのび太は『防火シャッター制御システム』を操作した。無論、全てのシャッターを解放するので『ALL』キーを押しながら『解放』キーを押した。するとディスプレイに、

『全ての防火シャッターを解放します。』

と表示された。

「どうやらこれで全てのシャッターが開いたようだな。4階の探索をしよう。」

と、のび太は真理奈に話し掛けた。

そして2人は制御室から出ようと扉に近づいた。しかしその時ののび太はあることに気がついた。

制御室の扉の窓に緑色の”もの”が見えたのだ。のび太はそれに瞬

時に対応した。

「危ない!!!」

と言うとのび太は真理奈の手を引っ張り、横に避けた。その瞬間、緑色の怪物が扉をぶち壊して制御室の中に入ってきた。

「KIYAAAAA」

怪物は唸り声を上げている。のび太は落ち着いて怪物を狙い撃つ。

『ベレッタM92』から放たれた一発の『9mmパラベラム弾』は怪物の頭を直撃した。

「KYAA!」

それだけで怪物は止まらず、尚ものび太に向かって来る。のび太はすかさずグレネードランチャーに持ち換え、榴弾を撃ち放った。榴弾は怪物に直撃し、怪物は破裂した。辺り一面に放射状に血液が飛び散った。

「・・・ふう、びつくりした・・・」

と呟きながらのび太はその場にへたり込んだ。

「・・・のび太君、大丈夫?」

「あ?あ、ああ。大丈夫だよ。さあ先を急ごう。」

と言うとのび太と真理奈は制御室から出た。そして、驚きの事実直面した。

「!!何でこんなに大量のゾンビがいるんだ!?!」

廊下には今まで居なかったはずのゾンビが大量にいた。5年1組と5年2組の扉が破壊されて、そこからゾンビが湧いて出ていた。

「真理奈ちゃん!君は早く4階へ上がるんだ!」

「のび太君はどうするの!?!」

「僕はここでゾンビを食い止める!大丈夫だ、こんな危機なんて前に幾つも経験してきたんだ!」

「わ、判ったわ。のび太君も早くね。」

「ああ、判っている。上にも何かいるかもしれないから真理奈ちゃんも気をつけて。」

と、会話を交わすと、のび太は向かい来るゾンビ共を撃ちまくり、

真理奈は4階へ上がっていく、のび太の方は大分手慣れた様で、ゾンビ共を効率よく掃討していく。最早事態が収まるのは時間の問題だった。

一方真理奈はその頃、4階へ上がっていき、丁度階段の踊り場に着いたところだった。

「ふう、慎重に上がっていかないと。もしかしたら上がった瞬間に「ウゝアー」って来るかもしれないし・・・。」

と呟きながら真理奈は慎重に階段を昇っていく。そして階段の上にあるものを目視した。

「あれは、さつき制御室にいた怪物！このまま上がったら気づかれちゃう！」

と、真理奈は引き返そうとしたが、その瞬間、階上にいた怪物が真理奈に気がつき、襲い掛かってきた。

「KYAA！」

雄叫びを挙げた。

間一髪真理奈には直撃せず、服の端を掠めただけだった。しかし、その衝撃で真理奈は踊り場まで吹き飛んだ。

「きゃあー！」

悲鳴を挙げる真理奈であったが、そんなものは気にもせず怪物は突っ込んできた。

「KYAAA!」

戦いに不慣れな真理奈はこの状態に混乱していた。だが、武器を構えることは出来た。半ば自棄で引き金を引いた。ショットガンから放たれた弾丸は至近距離で命中した。怪物はその場で破裂した。ぴくりとも動かなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

真理奈は暫く放心状態になっていた。やがてのび太が4階に上がってきた。のび太は死んでいる怪物とボーっとしている真理奈を見ると、全てを把握したようだ。そしてのび太は真理奈に話し掛けた。

「大丈夫?」

「・・・・・・・・・・あ、ああええ大丈夫。」

「じゃあ4階の探索を進めよう。」

と言うとのび太と真理奈は4階に昇った。4階は1〜3階までと違い、北舎と南舎に分かれておらず、南舎分しかない。階段のすぐ傍のところには、選択教室が2部屋あり、のび太達はまずそこを調べた。

しかし、ドアが打ち付けられているらしく、開かなかった。気を取り直し、北側に進んで行くと、そこには男子便所、女子便所そして男性職員用更衣室、女性職員用更衣室があった。するとのび太が真理奈に話し掛ける。

「僕は男子便所と男性職員用更衣室を探索するから、真理奈ちゃん
は女子便所と女性職員用更衣室を探索してくれ。くれぐれも気をつ

けて。

「うん、解つた。」

と言うとのび太と真理奈は分かれて探索をした。のび太はまず、男
子便所の探索をした。

男子便所には12ゲージショットシエルが2つだけだった。その場を後にして、のび太は男性職員用更衣室に入った。男性職員用更衣室のロッカーは殆ど全てが歪んで、壊れていた。しかし、中央のロッカーを見ると、確かに歪んではいるものの、戸が半開きになっており、中を見ることは出来そうだった。

「・・・このロッカー、力を込めれば開きそうだな。・・・よし、やってみるか。」

と言うとのび太は手に持っていた銃をポケットにしまい込み、両手で取っ手に手を掛けた。

「よい……しょつと……!!」

と、のび太は力を込めるが戸は開かない。

「くつ．．．．．そ．．．．．きついな．．．。」

更にのび太は力を入める。すると、

バキンッ！

という音を出してロッカーの戸が開いた。

「わっ！！」

いきなり戸が開いたので、び太は驚いて尻餅を付いた。

「痛た・・・。」

のび太は尻を押さえながら、少しの間痛がっていたが、すぐに立ち上がり、ロッカーの中を見た。ロッカーの中には何か光るものがあった。ただだった。

「何だろこれ？」

と言うとのび太は光る小さなものを拾い上げた。それは、タグの付いている鍵で、タグには、『家庭科室』と書かれていた。

「これはどうやら家庭科室の鍵のようだ。後で寄ってみるか。」と、のび太は呟き、振り返った。すると、扉が弾け飛んだ。

「KYAAAAA!」

扉の向こうから、あの緑の怪物がのび太に飛び掛かってきた。

「くそっ、横に飛ぶしかない！」

するとのび太は、素早く左に飛んだ。

怪物の爪はのび太に当たらず、風を切った。しかし、のび太は回避には成功したものの、飛んだ時にポケットに入れていた銃を落としてしまった。

「!・・・しまった!!」

「KYAAAAA!」

のび太は急いでハンドガンを拾おうとしたが、怪物が叫び声を挙げながら襲ってきているので、拾いに行けなかった。

「くっ・・・ここは一度更衣室を出て体制を整えよう。」

と言うとのび太は更衣室を出た。

西側の方は探索してないからそこを探索しよう。」

「じゃあ早く行こう。」

「ああ。……あ、ちよつと待ってて。」

と言うとのび太は男性職員用更衣室へ戻った。

少しすると、のび太が戻ってきた。

「お待たせ。先刻更衣室で銃を落としちゃってね。取りに戻ったんだ。」

「そうなんだ。……じゃあ早く行こう。」

と言って真理奈がのび太の手を引く。するとのび太は思った。（さつきまで脅えてたのに何でいきなり元気良くなってるの？……）

やがてのび太達は4階の西側の方に行き、扉を開けて奥へ進んだ。まず目に付いたのは、普通の扉と下へ続く梯子だった。

「まずはあの扉の中へ入ってみよう。」

と言うとのび太達は扉の中へ入っていった。中はどうやら生徒指導室のようだった。のび太達は早速探索を開始した。部屋の右側をのび太が、左側を真理奈が探索する事にした。

やがて探索が終了し、のび太と真理奈はテーブルに集まった。そしてまずのび太が喋った。

「僕が見つけたのは、『.357マグナム弾』1つだ。」

「.357・・・・・・？」

「ああそれはマグナム弾だ。でもまだ肝心のマグナムが無いからまだ使えないけどね。」

「じゃあ次は私ね。テーブルの上からこんな本を見つけたよ。」

と言うと真理奈は紅い本を目の前に出した。その表紙には、

『最後の書（上）』

EAGLE of EAST WOLF or WEST』と書かれていた。そしてのび太が徐にその本を取った。

「・・・・・・この本、・・・・・・やけに重量があるな。それに表紙に書いてある英語みたいなのは何を意味するんだろう？」

そしてのび太は真理奈にその本を渡した。

「これは真理奈ちゃんが持つててよ。」

「うん。判った。」

と言って真理奈は本を受け取った。

「・・・・・・わっ！」

しかしのび太が手を離すのが早かったので真理奈の手から落ちてしまった。

「ごめん。大丈夫？」

「うん。大丈夫よ。・・・・・・あれ？これは？」

紅い本を見た真理奈が不思議そうにしていたのでのび太も紅い本を見た。すると、本が開いて、中から一枚のメダルが出ていた。

「何だこれ？」

すると、のび太はそのメダルを持ち上げて見た。そのメダルは金色をしており、よく見ると大鷲のような模様が刻まれていた。

「・・・・これは、何かの仕掛けに使うのか？・・・・・・取り

「敢えずこのメダルだけ貰っておこう。」

と言うとのび太はメダルを真理奈に渡した。すると真理奈が喋る。

「ねえちよつと休まない？ここは安全そうだし。」

「そうだな。少しここで休むとするか。」

「わーい。やった。」

と、喜びの表情を浮かべると、真理奈は生徒指導室にもかかわらず寛ぎ始めた。のび太はテーブルの上に銃を全て出し、銃の手入れを始めた。

（・・・これから何が起きるか判らないし、何が出るかも判らない。
・・・思い返してみれば、ベレッタM92から始まって、レ
ミントンM870やコルトM79グレネードランチャー、そしてコ
ルトM4カービンには大分世話になったな。それに、・・・
・・・皆がいたから今の僕がいる。大量のゾンビによつて校長室に
閉じ込められた時にはスネ夫に助けられてもらつたし、カメレオン
みたいな怪物にやられそうになった時には安雄が身を呈して助けて
くれた。フローズヴィニルトに危うく殺されかけた時にはジャイア
ンが助けてくれた。・・・だけとその分失つたものも、
大きいな・・・。安雄・・・。健治・・・。
・・・。ただ今僕がすることは、これ以上犠牲者を
出さず、皆で無事に脱出することだ。）

そう思いながら、のび太は暫く銃の手入れをしていた。やがて真理
奈が話し掛けた。

「ねえ、そろそろ探索を再開する？」

「そうだな。あんまりゆつくりもしてられないし、そろそろ再開し
よう。・・・でも何でいきなり元気にな
つてんの？今まで脅えてたのに。」

「ああそれ。だつてのび太君が意外に強くてさ、いざとなつたら守
つてくれそう。だつたらそんなに脅えてても仕方ないから。」

（・・・つまり人任せね。）

「でもいざという時一人で戦えないと・・・。」

「いゝのいゝの。さあ早く行こつ。」

(・・・・・・・・まあいिया。こういう時は隣に元気な人がいたほうが気を紛らわせられるし。)

のび太達は生徒指導室を出た。そして、奥の方に進むと、貯水管理室に続く梯子を発見した。のび太達は梯子を降りて行った。降りた先は勿論、貯水管理室で、奥の方にエレベーターがあつた。それを視認すると、のび太達はエレベーターに近づいて行つた。

「・・・・・・・・このエレベーター、何処へ行けるんだろう？・・・・・・起動しないな。」

エレベーターを弄^{いじ}つていたのび太が呟^{ささや}いていた。だが、暫くすると横に何かがあるのに気が付いた。

「ん！この窪みは何だろう？・・・・・・・・エレベーターの横にあるんだからバッテリーか何かか。」

と言つとのび太は真理奈に向き直り、真理奈に言つ。

「どうやらここは何もなさそうだ。」

「そのエレベーターは？」

「電圧が落ちていて動かない。恐らくバッテリーが無いからだと思う。」

「そう。・・・で、次は何処に行こつ？」

「家庭科室だ。実はさっき鍵を見つけたんだけど4階から探索していこうと思つて言つてなかったんだ。」

「じゃあ早く行こつ。」

と言つとのび太達は1階へ向かつた。

やがて1階に着いた。そして、家庭科室へ行つた。家庭科室の前まで行くとのび太は鍵を取り出し、扉を開けた。

「よし、中に入ろつ。」

と、のび太達は中に入った。しかし中は真つ暗だつた。

「……………電気を付けなきゃいけないようだな。扉の近くにあったはずだけど。」

といい、のび太は手探りで電気のスイッチを探した。

カチッ！

スイッチが切り替わる音と共に部屋の電気が付いた。しかし、次の瞬間恐ろしい事態に気が付いた。

部屋の奥にあの緑色の怪物がいたのだ。電気が付いた瞬間、その怪物もこちらに気づき、向かってきた。

「KYAAAAAAAA！」

怪物はテーブルを乗り越えて一直線にのび太達に向かってきた。のび太はハンドガンを構えた。そして、
ドン！

当たったのはハンドガンの弾丸ではなく、真理奈の投げた『ミシン』だった。それに当たった怪物は一度体制を崩し、しかしすぐに体制を立て直してのび太に向かって行った。その時のび太は、グレネードランチャーを怪物に向けていた。そして撃った。

ドオン！

ジュワアアア！！

怪物に見事に当たり、当たった瞬間怪物から煙が上がり、熔け出した。

「……………熔けた？」

真理奈が不思議そうにしていたのでのび太が説明した。

「先刻、生徒指導室で銃の手入れをしていた時に、グレネードランチャーに装填していた榴弾が弾切れしていたから硫酸弾に切り替えただ。」

すると、怪物は一発で動かなくなった。

「・・・硫酸の威力は凄いな。一発であの怪物を倒すとはね。・・・他に怪物も居ないようだし、手分けして探索を進めよう。」
と言うとのび太達は探索を始めた。

暫くして、のび太達は探索を終えた。結果、見つかったのは、『バッテリー』と赤い本だった。赤い本の表紙には、『Bandage With Blood』と書かれていた。

「こつちの『バッテリー』は恐らく4階のエレベーターのものだろうけど、この赤い本は何だろう？中には何も書かれていないようだけど。」

と言いながらのび太は、考え込んだ。その時・・・！
ガチャ。

いきなり扉が開く音がした。

「何だ！」

と言つてのび太は扉の方を見た。そこには何度も見ている顔があった。

「スネ夫！聖奈さん！」

扉を開けたのはスネ夫と聖奈の2人だった。

「のび太！それに真理奈ちゃん！」

と、スネ夫が言った。するとのび太が喋る。

「そうだスネ夫。今ここで赤い本を見つけたんだけど訳が判らないんだ。」

と言つとのび太は赤い本をスネ夫に差し出した。

「・・・なんだこれ？」

赤い本を見たスネ夫は何がなんだか判らない様子だった。

しかし、それを横から見ていた聖奈が言った。

「あつ、この本は！」

聖奈が何かに気が付いた様子だったもののび太は聖奈に訊いた。

「この本の事、知ってるんですか？」

すると聖奈が返す。

「ええ、確か図書室の書庫にこんな本が大量にありました。」それを聴いてのび太が言う。

「じゃあ図書室の書庫へ行こう。」

と言つとのび太と真理奈とスネ夫と聖奈は図書室の書庫に向かった。校舎の丁度反対側にあったが、特にアクセントも無く、短時間で無事に書庫に着いた。のび太達は更に奥の方に進んで行った。そこには赤い本で一杯の本棚があった。しかし、一箇所本が抜けていて、そこだけ不自然に空きがあった。

「ほら、ここの本棚です。さっきの本と大分類似していると思うん

ですけど……。」

と、聖奈が言う。すると、のび太が言った。

「じゃあ早速嵌めてみるか。」

と言うとのび太は赤い本を抜けているスペースに嵌めた。

すると……、

ズズズズズズ……。

赤い本を嵌めた瞬間、本棚が左に移動した。よく見てみると、床と本棚にレールが付いていて、本を差し込むと本棚が移動するように出来ていたようだ。そして、本棚が元あった場所には、長方形の穴が開いており、そこに金庫がピッタリ挟まっていた。

「……この金庫開くかな？」

と言うとのび太は金庫を開けようとした。金庫には鍵穴が付いていて、^{なおか}尚且つダイヤルも付いていたので、開かないと思って、大した期待もせずに金庫を開けたが、意外にも容易く開いた。中には2丁の回転式拳銃があった。

「何、これ？」

真理奈が疑問を投げ掛けた。すると、のび太が、2丁の回転式拳銃を手に取り、他の3人に喋った。

「これは、2丁共『^{マグナム}大口径銃』だな。」

「『マグナム』って何だ？」

「『マグナム』っていうのは、口径が大きく威力の高い弾薬を撃ち出す銃だよ。だけどその分撃った時の反動が『ハンドガン』とは桁違いに大きいから汎用性は『ハンドガン』には劣るね。今は何が起るか判らない状態だから、使い安さとしては『ハンドガン』の方がいいね。」

と、のび太が言うとスネ夫が喋る。

「ふ〜ん。そうなんだ。……で、その2つの銃は何という銃なの？」

「ああ、こっちのが『コルトパイソン』だ。」

と言うとのび太は『コルトパイソン』を見せた。それは木製のグリ

ツプに6発装填のシリンダーがあつた。グリップ部分以外は青みがかった色をしていた。

次にのび太はもう一つの銃を見せた。

「で、こっちの方は『スタームルガーレッドホーク』だな。」そういつて見せた銃は、同じ様な木製のグリップがあり、6発装填のシリンダー、そして銃身、シリンダー、トリガー含め、グリップ部分以外は銀色をしていた。

するとスネ夫がのび太に質問した。

「それってどつか違う所あるの？装弾数が同じだから大して違わないように聞こえるんだけど。」

「それは大分違う。この二つの銃は使用する弾薬が違うんだ。『コルトパイソン』の方は『.357マグナム弾』を使うけれど、『スタームルガーレッドホーク』の方は『.44マグナム弾』を使うんだ。威力的には『.44マグナム弾』の方が強い。」

「へえ、そうなんだ。」

と、スネ夫が納得した。すると真理奈がのび太に話し掛けてきた。

「ねえ、その弾丸ってこれのこと？」

と言いながら真理奈は弾丸の入った箱を幾つか持ってきた。

「・・・・・・確かにこれは『.357マグナム弾』と『.44マグナム弾』だけど、何処から持ってきたの？」

すると真理奈はそれに笑いながら答えた。

「え、金庫の中に入ってたよ。のび太君もあんまりよく見てないね。」

「・・・・・・」

のび太は絶句した。

すると聖奈が喋った。

「じゃあその銃はのび太さんに持ってもらいましょう。私達ではどんな性能がいまいちよく判りませんし。」

「ああ、うん。解った。」

と言うとのび太は2丁の『マグナム銃』をしまった。

「じゃあ4階のエレベーターに向かう。さっきバッテリーを見つけたから動くはずだ。」

と、のび太が言った。そして全員は4階に向かった。そして梯子を降り、貯水管理室へ向かった。貯水管理室に着いた時、スネ夫が呟いた。

「僕達の学校にこんなものがあつたなんて知らなかったな。」

「まあね。パソコン室にも隠し部屋があつたし、僕達の判らないことだらけだよ。」

と言っている内にのび太達はエレベーターの前まで来ていた。

「じゃあバッテリーを嵌めるよ。」

と言うとのび太はバッテリーをエレベーターの横にある窪みに嵌めた。そしてエレベーターを呼び出した。バッテリーを装着していたので何の問題も無くエレベーターは動いた。4人はエレベーターに乗り込んだ。

AREA 3『エレベーター』（後書き）

どうも、作者兼『あとがきルーム』館長の『MONDOERA』です。大分遅れてしまいましたが、今回も『あとがきルーム』を開館していきたいと思います。今回は『ミーティングルーム』ではなく、『死者の間』での開館です。

「オイイイ！？俺何でこんな所来てんの？」

「……………安雄、少し落ち着け。」

「誰だよお前？」

「……………そういえばお前と会うのは初めてだったな。俺は翁蛾健治だ。んで、こっちに居るのが作者のMONDOERAさんだ。」

どうも初めまして。『あとがきルーム』の経営をしている、館長兼作者の『MONDOERA』です。……………つてさつきも言ったなこれ。まあいいや、取り敢えずこの部屋の説明をしよう。

この部屋は作中で死亡した人が集い、会話をする場所なんだ。

「成る程、死亡したキャラにも出番を持たせようとする企画か。」

まあそうなるね。でも使用頻度はあまり多くないけどね。現在では『ミーティングルーム』での開館が普通になるかと。

「まあ妥当だな。この『死者の間』に出演する人を増やすために登場人物を死なせてしまつては元も子も無い。あくまでメインは本編であつて、あとがきはおまけ要素に過ぎないからな。」

「……………何二人だけで話してんのさ。」

おお、すまん忘れてた。

「忘れてたじゃねえよ。わざわざ呼んどいてそれはねえよ。」

「まあそんな言うな安雄。折角『あとがきルーム』に来たんだから何か話そうぜ。そうだな……………『死者の間』なんだから死んだ時の話でもするか。」

「まあそうだな。じゃあ俺から喋るか。俺が死んだ所は理科室だな。あの変な緑色をしたカメレオンみたいな怪物にグレネードランチャ

「をぶつ放した後、噛み付かれてそのまま喰われたんだ。だがその後、内側から手榴弾を爆発させて吹っ飛ばしてやったぜ。」

「そいつはすげえな。」

「健治はどうなんだ？」

「俺はまあ何と言うか。のび太に探索して見つけた資料を渡して、3体のゴリラみてえな野郎に殺されたんだ。」

「そうか。でもものび太すげえな。1人でその3体を倒したんだろ？」

「まあ、なんだかんだでのび太って戦闘能力高いからな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「あのさ、俺ら死んだんで、今ののび太達の状況を知らんから喋ることがもう無いんだけど。」

「じゃあ今回はこちら辺で閉館といきますか。」

「つておい！こんなだけかい！」

でも、『死者の間』で会話する事なんてこんなもんなんで。じゃあ終わります。次回も宜しくお願いします。・・・・・・・・勿

論本編をね。

登場人物紹介（前書き）

今回は本編は進めず、登場人物の紹介をしていきたいと思います。
本編の半分位を越した記念と思ってもらえれば幸いです。

登場人物紹介

・ のび太

《所持武器》

ハンドガン

・ 自動拳銃

ベレッタM92

サブマシンガン

・ 短機関銃

未所持

ショットガン

・ 散弾銃

レミントンM870

グレネードランチャー

・ 擲弾発射器

コルトM79グレネードランチャー

アサルトライフル

・ 突撃銃

コルトM4カービン

スナイパーライフル

・ 狙撃銃

未所持

マグナム

・ 大口径回転式拳銃

コルトパイソン（6インチモデル）

スタームルガーレッドホーク

マグナム

・ 大口径自動拳銃

未所持

〔得意技〕

精密かつ素早い正確な射撃性能

【備考】

この物語の主人公。友達とバカンスに行つて、帰つてきた時にこの事件に巻き込まれた。のび太の才能は、詭弁や閃き力の凄さが挙げられるが、極めつけは、常人より遙かに卓越した射撃技術である。これにより、ゾンビを遙かに凌駕した怪物相手でも比較的楽に倒すことが出来る。

・スネ夫

《所持武器》

ハンドガン

・自動拳銃

スプリングフィールドXD

サブマシンガン

・短機関銃

UZI

ステアーTMP

ショットガン

・散弾銃

フランキ・スパス12

モスバーグM500

グレネードランチャー

・擲弾発射器

未所持

アサルトライフル

・突撃銃

AK-47

FA-MAS

スナイパーライフル

・狙撃銃

未所持

マグナム

・大口徑回転式拳銃

未所持

マグナム

・大口徑自動拳銃

未所持

〔得意技〕

豊富なプログラミング知識によるハッキング等

【備考】

のび太の友人であり、骨川グループの社長の息子。かなりのビビリで、事あるごとに「ママ~~~~~!!」と叫ぶ。戦闘能力は低めだが、幾度かのび太に助けられて何とか生き延びている。プログラミング知識がかなり豊富であり、コンピュータにハッキングすることも出来る。

・ジャイアン

《所持武器》

ハンドガン

・自動拳銃

未所持

サブマシンガン

・短機関銃

未所持

ショットガン

・散弾銃

未所持

グレネードランチャー

・擲弾発射器

未所持

アサルトライフル

・突撃銃

未所持

スナイパーライフル

・狙撃銃

未所持

マグナム

・大口徑回転式拳銃

未所持

マグナム

・大口徑自動拳銃

デザートイーグル

〔得意技〕

強力な腕力により体術のみで敵を殲滅する

【備考】

のび太の友人であり、がき大将。彼は、彼がキャプテンの野球チーム『ジャイアンズ』を創設した。彼はスーパースラッガーであるが、他の人が足を引っ張るので、結局は他のチームに負けてしまう。今回の事件では、全員の中で唯一、銃器をあまり使わないで、殆ど腕力だけでゾンビ等を倒している。旅館に行く前に静香から『デザートイーグル』を貰った。

・静香

《所持武器》

ハンドガン

・自動拳銃

コルトガバメントM1911A1

ブローニングHP

サブマシンガン

・短機関銃

イングラムM11

ショットガン

・散弾銃

ウィンチエスターM1300

グレネードランチャー

・擲弾発射器

未所持

アサルトライフル

・突撃銃

H&K MP5K

スナイパーライフル

・狙撃銃

未所持

マグナム

・大口徑回転式拳銃

未所持

マグナム

・大口徑自動拳銃

未所持

〔得意技〕

無し

【備考】

のび太の学校に通っている、のび太の友達の人。慣れてない筈なのに何故か銃の扱いに慣れている。手にした銃の内、「自分には上手く扱えないから」と言っつて、ジャイアンに『デザートイーグル』をあげた。

・聖奈

《所持武器》

ハンドガン

・自動拳銃

グロック17

サブマシンガン

・短機関銃

H&K MP5K

ショットガン

・散弾銃

イジエマツシサイガ12K

グレネードランチャー
・ 擲弾発射器

未所持
アサルトライフル
・ 突撃銃

未所持
スナイパーライフル
・ 狙撃銃

未所持
マグナム
・ 大口径回転式拳銃

未所持
マグナム
・ 大口径自動拳銃

未所持

〔得意技〕

ハーブ等の傷を癒す植物等を調合し、回復薬を生成すること

【備考】

のび太の通う学校の生徒会長兼テニス部部长。銃器による戦闘能力は高いものの、ハーブ等の調合が上手く、回復薬を大量に生成し、皆に分けている。重量が小さく、コンパクトな銃器を使う。

・ 安雄

《所持武器》
ハンドガン

・ 自動拳銃

未所持

サブマシンガン
・ 短機関銃

未所持

ショットガン
・ 散弾銃

未所持

グレネードランチャー
・ 擲弾発射器

コルトM79（死後、のび太に託す。）
アサルトライフル
・ 突撃銃

未所持
スナイパーライフル
・ 狙撃銃

未所持

マグナム
・ 大口径回転式拳銃

未所持

マグナム
・ 大口径自動拳銃

未所持

〔得意技〕

無し

【備考】

バイオハザード発生時はのび太達とは別の場所において、別行動をしていた。しかしカメレオンみたいな怪物に襲われて倒れているところを聖奈に見つけられてのび太達に合流した。のび太がカメレオンみたいな怪物と戦っていて、危うくカメレオンみたいな怪物に殺されそうになった時、のび太を護るためにグレネードランチャーを乱射するが、弾切れの隙を付かれて、喰い殺されてしまう。だが、カメレオンみたいな怪物の内部で手榴弾を爆発させて、怪物を倒した。その後は、のび太にコルトM79と戦利品（ケブラーベスト）を授けた。

・ 健治

《所持武器》

ハンドガン
・ 自動拳銃

未所持

サブマシンガン
・ 短機関銃

未所持

ショットガン
・ 散弾銃

未所持

グレネードランチャー
・ 擲弾発射器

未所持

アサルトライフル
・ 突撃銃

未所持

スナイパーライフル
・ 狙撃銃

未所持

・ マグナム 大口径回転式拳銃

未所持

・ マグナム 大口径自動拳銃

未所持

〔得意技〕

ナイフの様な鋭利な刃物による近接戦闘

【備考】

のび太の学校に通う小学5年。ナイフの扱いを得意とし、ゾンビ程度なら簡単に倒せる。旅館の大広間を探索した時に『フローズヴィニルト』に急襲され、のび太に遺言を遺し、絶命した。

・ 太郎

《所持武器》

・ ハンドガン 自動拳銃

未所持

・ サブマシンガン 短機関銃

未所持

・ ショットガン 散弾銃

未所持

・ グレネードランチャー 擲弾発射器

未所持

・ アサルトライフル 突撃銃

未所持

・ スナイパーライフル 狙撃銃

未所持

・ マグナム 大口径回転式拳銃

未所持

・ マグナム 大口径自動拳銃

未所持

〔得意技〕

無し

【備考】

のび太の学校に通う小学1年。その小さい体を活かし、ゾンビ共を擦り抜けられたので、今現在なんとか生き残っている。銃器が使えないので、戦闘能力は1番低い。

・真理奈

《所持武器》

ハンドガン

・自動拳銃

未所持

サブマシンガン

・短機関銃

未所持

ショットガン

・散弾銃

ベネリM3

グレネードランチャー

・擲弾発射器

未所持

アサルトライフル

・突撃銃

未所持

スナイパーライフル

・狙撃銃

未所持

マグナム

・大口径回転式拳銃

未所持

マグナム

・大口径自動拳銃

未所持

〔得意技〕

無し

【備考】

のび太の同じクラスで、のび太の前の席に座っている女子。今回の事件では、のび太達が救出するまでずっと体育館に隠れていた。今までは戦闘の経験が皆無であり、戦闘能力は低かったが、のび太達の戦闘を見ている内に成長していつている。

・ドラえもん

《所持武器》

・ 自動拳銃
ハンドガン

不明

・ 短機関銃
サブマシンガン

不明

・ 散弾銃
ショットガン

不明

・ 擲弾発射器
グレネードランチャー

不明

・ 突撃銃
アサルトライフル

不明

・ 狙撃銃
スナイパーライフル

不明

・ 大口径回転式拳銃
マグナム

不明

・ 大口径自動拳銃
マグナム

不明

〔得意技〕

解析不能

【備考】

自他ともに認めるのび太の親友。今回の事件では旅館の2階で、のび太に出会った。旅館でのび太と会話していただけなので、所持武器や得意技は不明。

登場人物紹介（後書き）

張り紙がある。

『今回は登場人物紹介なので』あとがきルーム『は休館とさせていただきます。』

『あとがきルーム』館長 MONDOERA『

A R E A 1 『疑惑』 (前書き)

今回は早めの更新です。

AREA 1『疑惑』

ゆつくりとエレベーターの扉が開く。目前には坑道と思われる風景が広がっていた。それを見たスネ夫が呟く。

「……僕達の学校にこんな所があったのか……」
するとのび太が喋る。

「取り敢えずこの事をジャイアン達に連絡しよう。」
RRRRRRRRRR

「こちら武。どうしたのび太？」

「貯水管理室が坑道らしき洞窟に続いているのを発見した。僕達は今からこの坑道を探索する。」

「恐らくあの紙にあった坑道の事だな。じゃあ俺達もそっちに向かう。気をつけて探索しろよ。」

「解った。」

ピッ

のび太は通信を切ると、前の方を見た。そして思った。

（……道が二つあるな。ここは手分けして探索した方がいいな。）

そして、のび太は皆に喋った。

「ここは道が二つに分かれてるから二手になって探索しよう。僕とスネ夫、聖奈さんと真理奈ちゃんでもいい？」
するとスネ夫が喋る。

「まあチーム分けはそんなもんでいいんじゃない？でもどっちの道を行こうか？」

のび太達の目前には手前で右に曲がる道と、真っ直ぐの道で、暫く行った後、突き当たって左に曲がる道の二つがあった。

「じゃあ私達は真っ直ぐの道を探索します。」

先立って言ったのは、聖奈だった。

「解りました。じゃあ僕らは右に曲がる道を探索します。」

と、のび太が言った。全員異存は無い様だった。そして、それぞれはそれぞれの道へ行った。のび太達の行った通路は、大きな空間になっており、中央には正方形の大穴が空いていて、周りには柵が設けられていた。奥には鋼鉄性の扉があり、左奥には、更に奥へ進める通路があつた。

「まずはあそこに見える扉から調べよう。」

と言うとのび太達は扉の前に進んだ。そして、スネ夫がドアノブを回した。

ガチャガチャ。

「……………どうやら鍵が掛かっているみたいだな。確か左の方に更に奥に進める通路があつた筈だ。言ってみよう。」

と、スネ夫が言うと、スネ夫とのび太は左奥の通路に進んだ。通路は一度右に曲がつた後、真っ直ぐ伸びていた。突き当たつた所には、何かの明かりが付いていた。

「何だろう、あの明かり？」

のび太が疑問を投げ掛けた。するとスネ夫が答える。

「取り敢えず行ってみよう！」

すると2人は明かりに向かって走り出した。

やがて明かりの下に辿り着いた。

明かりの正体は壁に取り付けられていたランプだった。そして、通路は更に左に続いていた。のび太達は左に進んだ。すると、見覚えのある人物に出逢つた。

「はる夫！無事だったのか！！」

そこにいたのは、のび太の同級生である、少々小太りの少年だった。……………のび太とスネ夫か。無事だったのか。」

はる夫は掠れた声で言った。

「ああ、何とかね。それより、その傷はどうしたの！？」

のび太の目の前にいるはる夫という人物は、血を流しており、見るからに痛々しく、既に瀕死の状態だった。

「俺達の街はもう終わりだ・・・それに、俺達の中に裏切り者が居る。」

「え！どういう事なんだ！？」

意外な一言を聞き、のび太は驚いた。そして、はる夫は続けた。

「探索を進める度にどんどん化け物共は強くなっていく。誰かが裏で意図的に送り込んでいる様に見えるんだ。」

「そんな馬鹿な。」

のび太とスネ夫は信じられない様な顔だった。

「何れ判るさ。・・・そしてこの事件は全て『ナムオアダフモ機関』の仕業だ。」

と、はる夫が言う。

「『ナムオアダフモ機関』？」

はる夫の口からまたしても意味深な言葉を聞き、のび太とスネ夫の頭に疑問符が浮かんた。しかし、それもお構い無しに、はる夫は更に続ける。

「奴らが俺達の街で・・・」

バン！

するといきなり後方で銃声がした。

「はる夫！！誰だ！！」

咄嗟にのび太とスネ夫は後ろを振り返った。しかしもう誰も居なかった。再びのび太達ははる夫を見た。

「はる夫・・・心臓を撃ち抜かれている。足も酷い怪我をしている。身動きが取れなかったのだろう・・・ん？これは、クランクかな？」

と言うとのび太はクランクを取った。

「・・・のび太・・・」

スネ夫がのび太に喋った。するとのび太は顔を上げて、

「奴を追おうスネ夫！まだ近くにいます筈だ！！」

「ああ！」

と言うとのび太達は、今来た道を戻ろうとした。しかし、曲がり角

の手前でび太が止まった。

「……………？　どうしたのび太。」

「静かに。何か聞こえる。」

そう言つとスネ夫も耳を済ませた。

ペタペタペタ

それは独特の足音を立てていた。

「多分何かの怪物が曲がり角の向こう側に居るんだろ。」

太は「スタームレッドホーク」に「44マグ

ナム弾薬』を装填し、銃を構えた。

やがて怪物の姿が見えた。怪物は緑色をした怪物だった。頭が見え

た瞬間のび太はマグナムを撃った。

ガァン！

ハンドガンとは違う銃声を立てて、弾丸が発射された。

A A A A A A ! !
K I Y A A A A A A A A A A A A A A

たったの一発で怪物は絶命した。流石はマグナム銃、そして、『44マグナム弾』といったところか。そしてのび太は走って戻るが、至る所にさっきの怪物がいた。

「さつきは居なかったのに何でこんなに!？」

と、のび太がおかしく思っていると、スネ夫が答えた。

「もしかしてさつきはる夫が言っていた、『裏切り者が居る。』って言うていたのと、『探索を進める度にどんどん化け物共は強くなつていく。誰かが裏で意図的に送り込んでいる様に見えるんだ。』っていうのは本当かな？」

更にそれにのび太が答える。

「それは判らないが、恐らくその可能性が高いな。」

と言いながらのび太達は怪物共を擦り抜け、エレベーターがあった所へ着いた。

「ここには居ないようだな。」

そうなのび太が言った。すると後方から声が聞こえた。

「あれ?のび太君?何してるの?」

「え?」

驚いて振り向くと、そこには聖奈と真理奈がいた。するとスネ夫が喋る。

「……そっちの探索は?」

「いやあ、こっちは四角い穴が空いた器械しかありませんでした。後は大穴が空いていて進めませんでした。」

と、聖奈が喋るが、のび太はハッとした様子で聖奈に訊いた。

「もしかして四角い穴ってこのぐらいの穴?」

のび太はさつき手に入れたクランクの先端を指差しながら言った。

「ええ、大体そんな大きさでした。」

聖奈はクランクの先端を見ながら言った。すると、のび太が皆に喋る。

「恐らくその器械は、このクランクで動く筈だ!行こう!」

と言うとのび太は一目散に真っ直ぐの通路に向かって走って行った。スネ夫と聖奈と真理奈も慌ててのび太の後を追う。やがて、問題の器械の所まで来た。

「よし、このクランクを……。」

と言いながらのび太はクランクの先端を四角形の穴に嵌め込んだ。

クランクの先端は見事に嵌まり、のび太はそのままクランクを時計回りに回した。すると・・・、

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

さっき迄、大穴が空いていた所に折り畳み式の橋が掛けられていた。それを見ていたスネ夫が言った。

「成る程。そういう仕掛けだったか。」

そしてのび太はクランクをしまうと、言った。

「早く行こう。もたもたしてる暇は無い！」

すると真理奈が返す。

「うん！行こう！」

続いて聖奈も返した。

「ええ行きましょう。」

と言うと全員はその先へ進んで行った。

AREA 1『疑惑』（後書き）

どうもこんにちは、MONDOERAです。じゃあ、早速『あとがきルーム』開館といきましょう。ゲストは聖奈と真理奈です。

「どうも、緑川聖奈です。」

「じゃあ初めまして。相葉真理奈といいます。」

あ、初めてフルネーム出た。

「ああ、そういえば言ってなかったですね。ところで、この『あとがきルーム』では主に何をするんですか？」

まあ特にこれといったことはしない。本編から外れて登場人物達が喋るだけだ。

「ああそうなんですか。」

「そういえば真理奈ちゃんはバイオハザード発生時から体育館に隠れていたの？」

「そうですよ。いやあお恥ずかしいところを……。」

「まああんな事態が起きて、平気で探索できる方が凄いからね。それに一人だったし。」

「その時に助けが来た時は本当に嬉しかったよ。」

「まあそうですね。」

ではそろそろこちら辺で終わりという事で……。

「『あとがきルーム』ってこんなもんなの？」

まあこんなもんですよ『あとがきルーム』なんて。それでは次回もよろしく願います。

A R E A 2 『出木杉英才』 (前書き)

今回いい所で切ってます。

AREA 2 『出木杉英才』

のび太達は橋を渡って道なりに進んでいた。橋を真っ直ぐ少し行つた所で道が突き当たって右に曲がっていた。のび太達は右に曲がり、真っ直ぐ行くと、左に鋼鉄性の扉が一つと、右に曲がる道が一つあった。のび太は先行して左にあった鋼鉄性の扉を開けようとした。ガチャガチャ。

「開かないな。また鍵が掛けられてるみたいだ。右の通路へ行こう。」
「
と言うとのび太達は右の通路を直進する。突き当たった所で、右に曲がっていた。全員は右に曲がり直進した。すると、とんでもないものが道を塞いでいた。

「・・・・・・この大岩何でこんな所にあんの？」

のび太が疑問を投げ掛けた。それにスネ夫が答える。

「ここは迂回するしかないんじゃないか？何処かでこれを破壊する物があるかもしれないし。」

「そうだな。・・・迂回するか。」

と言うとのび太達はその場を離れた。すると・・・・・・

ゴゴゴゴゴゴ

後ろで何かの音がした。しかし、のび太達には聞こえていないのか、気づかずにそのまま前進する。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

更に音が大きくなる。流石にのび太達も気がついて、後ろを振り返った。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

かなりの轟音が響いた。そしてスネ夫が喋る。

「もしかしてあの岩こっちへ向かって・・・・・・。」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
ゴゴゴゴゴゴ！

大岩はのび太達に向かってかなりの速さで転がって来た。すると
のび太が叫ぶ。

「走れええ~~~~!!!!」

全員は直ぐさま走った。しかし、大岩はそれを越える速度で転がって来て、徐々に距離を詰められる。しかし、暫くすると左への横道が見えてきた。そして全員はその横道に避難した。

ドガッ

大岩が向こうの壁に激突した音が聞こえた。すると全員は安堵の溜め息をついた。

「はあ。何よ今の！」

「何かの罠かな？」

「でもこれで先へ行けるようになった。行こう！」

と言うとのび太は一人で進んで行く。他の皆も反対する理由はなかった。大人しくついて行った。さっきまで大岩があった場所には、右へ続く道があった。のび太達は其中へ入る。中は広い空間で、幾つかのランプが壁に掛かっていたので、明るかった。その部屋の中央辺りには80cm×250cm程度の楕円形の穴が空いていて、その付近にある人が通信機で誰かと話をしていた。

「・・・はい、作戦は成功です。ちゃんと”アレ”も回収しました。後は彼等と戦わせて戦闘データを録れば全て終了です。証拠？証拠なんて残りませんよ。政府には原子力発電所の事故と伝えてあります。全てが終了次第、街ごとね・・・それではこの辺で・・・」
そのある人が通信機を切ると、のび太が前に出て、その者の名を読んだ。

「出木杉!!」

後ろの声に気づくと、出木杉は振り向いた。

「!!!!のび太君か・・・よく無事だったね。とても心配してたんだよ。」

「さっき通信機で話してたのは・・・ナムオアダフモ機関なのか？」
「・・・何を言ってるんだい？今のはジャイアン君と話をして

「ただよ。」

「何でお前がジャイアンの通信機の周波数を知ってるんだよ！この通信機はたまたま見つけた物なんだぞ！」

その時、出木杉は少し下を向いた。

「……いやはや、君みたいな屑が此処まで嗅ぎ付けていたなんて思いもなかったよ。」

「はる夫が言っていた裏切り者はお前の事だったんだな！そしてはる夫を殺したのも！」

「……そうだよ。知らなくていい所まで知ってしまったんだからね彼は。」

「何故だ！何故僕達を化け物共と戦わせるんだ！！」

「地元の警察はトロイからね。色んな世界を旅して色んな人達を救っている君達の方が、戦闘能力が高くてデータが録りやすいんだ。現に此処まで生き残っている事が何よりの証拠だね。」

「お前のせいで大勢の人が死んだんだぞ！人の命をデータ扱いするな！！」

と言うとのび太はベレッタM92を構え、出木杉に向けた。出木杉は顔色一つ変えず、のび太に喋った。

「どうしたんだい？そんな物騒な物を構えて？」

「撃つぞ！！」

「撃てるものなら撃つてみるがいいさ。」

「ほ、本当に撃つぞ！！本当に本当に撃つぞ！！！！」

と言いながらもののび太はまだ出木杉に撃てずにいた。やがて、痺れを切らした出木杉が持っていたハンドガン、『FNファイブセブン』を撃った。弾丸はのび太の近くの地面を直撃し、その瞬間、岩の破片が飛び散り、その一部がのび太の頬に当たった。

「君は優し過ぎるんだよ。いいかい？僕は仲間だった君達を何も感じずに、それこそあの怪物達を始末するように殺すことが出来るんだよ。僕達は君達を裏切ったんだよ。」

「……………」

「・・・・・・・・・・じゃあそろそろ・・・・・・・・・・。」

と、出木杉が言った瞬間天井から何かが降下してきた。

「GYAOOOO!!」

降りてきた”それ”は奇声をあげた。”それ”の姿は真つ黒な蜘蛛のような身体をしていて、大きさは2.5mはあった。

「何だ!!?」

何かと思い、出木杉は振り向いた。そして、驚いた様な表情をして言った。

「!!コイツ!?何故こんな所に・・・!」

すると、蜘蛛の怪物が口から糸のようなものを吐き出した。出木杉は咄嗟にそれを後ろに跳んで避けたが、後ろにあった大穴に落ちてしまった。

「しまった!!うわあああああああああああああああ
ーーーー・・・・・・・・。」

「出木杉!!やるしかないか・・・。」

と言うとのび太は蜘蛛の怪物に銃を向けた。すると、スネ夫がのび太に喋る。

「のび太!僕達も戦う!」

そしてのび太がスネ夫の方を向く。その時、あらぬ事態に気がついた。

「スネ夫!上だ!!」

スネ夫の頭上にさっきの蜘蛛の怪物を小型化したような怪物が4、5体現れた。更に続いてゾンビの犬や虫のような人型の怪物が大量に出現した。

「何っ!!・・・・・・・・くそっ、聖奈さん!真理奈ちゃん!逃げながら戦うぞ!!」

「えっ!でものび太さんは?」

「のび太は大丈夫だ!僕達がここにいると、かえって邪魔になる!僕達のする事はこの大量にいる怪物共を引き付けることだ!!」

と、スネ夫が聖奈と真理奈に向かって叫ぶと、踵を返して怪物の方

へ向き直ると、怪物に向かって叫んだ。

「掛かって来い！化け物共！！」

「GRURURURURURURURU！」

「SYAAAAAAAAA！」

「GYAOOOO！」

怪物共は奇声をあげながらスネ夫達に向かって来る。スネ夫は手にした『FA-MAS』を連射しながら後退し、怪物を引き付けた。聖奈や真理奈も同様に迎え撃つ。聖奈は『グロック17』で遠くから撃ち、近くに敵が寄ってきたら、『H&K MP5K』で迎撃する。真理奈は『ベネリM3』で、固まっているゾンビ犬を数体一度に撃破していた。

その頃のび太も蜘蛛の怪物と戦っていた………。

「くそつ、図体がでかい割にはシャープな動きをするな。」

蜘蛛の怪物は左右にステップしながらのび太に接近していった。流石ののび太も、これでは狙いずらく、苦戦していた。

「………奴の攻撃の瞬間を狙って撃つしかないか。………」

・それにしても奴と戦っていると、リアン達と行った、『未開の星』の鉄蜘蛛を思い出すな。」

と、思い出に浸りながらものび太は懸命に戦っていた。蜘蛛の怪物は白い蜘蛛の糸を吐いて、攻撃をしている。少し戦闘をしただけでも、天井から壁から地面まで蜘蛛の糸だらけになった。無論粘着性があり、粘着力が高いので、のび太は移動の制限をされた。

「……この蜘蛛の糸のせいでうまく間合いを取れないな。何とか回り込めないかな？」

すると、のび太は後ろに回り込めないかと試してみたが、のび太の動きに合わせて蜘蛛の怪物も同じように動いた。

「やはり無理か。しっかりと張り付いてくる。まるでサッカーのデイフェンダーだよ。」

とか言いながらのび太はなんとか回り込める方法がないかと考えていた。その間にも蜘蛛の怪物は、攻撃を仕掛けてくる。口腔から酸を3つ程吐き出したのだ。なんとかのび太はそれを避ける。

「危ないなあー。しかも当たった地面がシューシュー言ってるし。直撃したら溶けるぞこれ。．．．．．直撃してよ。これを吐き出している間、奴は動けない筈。上手く誘って回り込めれば．．．！」

そして、のび太は蜘蛛の怪物に不即不離（即かず離れず）の間合いを保ち、先程の酸を吐き出した攻撃を誘った。

すると、蜘蛛の怪物は誘いに乗り、酸を吐き出した。のび太はその瞬間を逃さずに蜘蛛の怪物の横を擦り抜けた。そして反対側の壁まで走り、振り向いて銃を構えた。

「．．．．．あれ？アイツ何処行った？」

のび太が振り向くと、さっきまで蜘蛛の怪物が居た所に、怪物は居なかった。

「．．．．．これは、なにかヤバイ気がするぞ。」

のび太は一通り部屋を見渡したが、蜘蛛の怪物は見当たらなかった。

「この短時間で一体何処に消えたんだ？」

AREA 2 『出木杉英才』（後書き）

作者のMONDOERAです。今回の『あとがきルーム』ではゲストの収集は行いませんでした。（皆さん忙しいので。）まあ特に喋る事ありませんが、今回いい所で切ってしまいました。すみませんねこんな作者で。割と楽に決着はつきますよ、ええ。

ところで話は変わりますが、オリジナル小説を同時進行で執筆しようか迷ってます。2つ同時に執筆すると1つの執筆速度が遅くなるのでどうかとは思いますが、どうでしょう？最近執筆速度が速くなってるのでいいんですが、果たしてこの調子を維持できるか心配です。

この小説終わったらオリジナル書こうかな・・・。

A R E A 3 『ナムオアダフモ機関社員』（前書き）

家庭の事情で更新遅れました、すいません。

AREA 3 『ナムオアダフモ機関社員』

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

のび太はまだ蜘蛛の怪物を探していた。

「何かの気配はするんだけど・・・、奴の姿が見えない。理科室にいた『カメレオンみたいな怪物』の様に擬態しているとは思えないし。」

するとその瞬間、天井から蜘蛛の怪物が酸を吐きながら降下してきた。

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

のび太は前に前進し、酸を避けたが、逆に蜘蛛の怪物に捕まってしまった。

「っ！まずい！何とかして引き剥がさないと！！」

と言いながらのび太は、ショットガンを撃った。

「GYAOOOO!!」

ショットガンに直撃した怪物は悲鳴をあげながら少し飛んだ。

「くそっ天井にも壁にも張り付けるのか。厄介だな。早めに倒すか。」

「

すると、のび太はハンドガンを連射する。勿論よく狙って。しかし怪物は次々と弾丸を避ける。のび太が発砲した直後に動いているので、流星ののび太もこれでは当たらない。

バン！

「当たらない！」

バン！

「当たらん！」

バン！

「マジで速いコイツ!!」

バン！

「消えた！また天井か！！」

バババン！

「ちよつと待て。どんだけシャープ過ぎるんだよ。」

怪物は地面、壁、天井を縦横無尽に駆けていた。

「まずいぞ！コイツは今までの怪物とは違う！！」

そしてのび太は怪物の右側から抜け、怪物から見て右側の壁に立ち、銃を撃とうとした。

「しまった！糸に引つ掛かった！！」

なんと のび太は蜘蛛の怪物の糸に引つ掛かってしまった。その時のび太は落ちていて考えた。

（ちよつと待てよ。落ちていて考える。この糸は何だ？・・・粘着力が高い。引き剥がすのは無理そうだな。・・・この糸の素材は何だろう？・・・差し当たりこの蜘蛛の怪物の粘液か。それでその粘液を固めてこの糸を作り出しているんだな。そういうことならば粘着力が高いのも頷ける。・・・だとすると、この粘液の弱点を突けばいいのかな？・・・熱か！確か粘液は熱に弱いという話を聞いた事がある。・・・焼夷弾を使えば！・・・恐らくあの怪物の口腔内に粘液が詰まっているはずだから口の中に焼夷弾をぶち込めば奴を焼けるはず！早速実行に移そう！！）

と、のび太は得意の閃き力をフル稼働させて答えを導き出すと、急いで焼夷弾を『コルトM79』に装填して、蜘蛛の怪物に向けた。怪物はもう既にすぐ傍まで接近しており、口を開けて急接近してくる。どうやらのび太を喰らうつもりのようだ。

「一か八か！一発必中だあああ！！！！」

と、叫ぶとのび太は引き金を引いた。

焼夷弾はグレネードランチャーから勢いよく放たれ、蜘蛛の怪物の口の中に直撃した。

「GYAOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO！！！！！！」

今までにない大きな叫び声をあげ、全身が燃えだした。

「痛っ！」

のび太の腕に銃弾が掠った。しかし幸運にも軽傷で済んだ。そして、のび太はなんとか岩の陰に潜り込んだ。すると、のび太は考え出した。(どうするか。このままやっても埒が開かないぞ。でもあのヘビ―マシンガンに敵う銃火器は無いしな。……………)

そう考えながら、のび太は部屋中を見回した。すると、天井に目が止まった。

(……………もしかしたら”あれ”が使えるかもしれない。)

すると、のび太は手持ちの武器をコルトM79に持ち替えると、榴弾を装填した。そしてスネ吉の真上の天井に向かって撃った。

大きな音を立てて、榴弾が爆発し、天井が崩れた。

「何っ！」

スネ吉は驚きつつも落下してくる岩石を回避した。

「中々やるねえのび太君。ちょっと動くのが遅かったら致命傷にならないまでも怪我を負っていただろう。流石にもたもたしている場合じゃなくなったな。君は全力で始末する！」

と言うとスネ吉は再び『LIGHT MURDER』を構えて撃とうとした。しかしあることに気がついた。

「…………これは！…………へえ、のび太君は結構な策士だねえ。

これも計算ずくかい？」

するとスネ吉は『LIGHT MURDER』をのび太に見せた。

『LIGHT MURDER』は蜘蛛の糸が絡まっていて、もう撃てない状況だった。

「…………天井に蜘蛛の糸があったから、もしかしてと思って天井を攻撃したんだ。」

と、のび太が言った。

「ふうん、運も君の味方かな？」

と、スネ吉が言う。一拍置いてのび太が言う。

「まだやるのか？」

「いいや、もう武器は無いしね。ここは退かせてもらうよ。」

と言うとスネ吉は出てきた穴の奥へ行った。

「待てっ！」

そしてのび太もその後を追いかける。穴の奥は一つの部屋になっていて、ランプが一つと、80cm×210cm程のサイズのテーブル一つに、椅子が二つあった。入ったすぐ右にはエレベーターらしき扉があり、スネ吉がまさに今乗り込んでいるところだった。

「待て！お前には訊きたい事がある！」

と、のび太がスネ吉に言うと、スネ吉は答える。

「おっと、今は止めておくよ。生きていれば何れ出会う^{いず}だろうから、その時にいくらでも答えてやるよ。」

するとエレベーターの扉が閉まった。閉まった扉からスネ吉が喋る。「ああそうそう。確か回収し忘れた資料にBHRカンパニーという単語が出てきたと思うけど、あれはナムオアダフモ機関の別名だから。別に特にこれといった情報じゃないけれど、一応言っておくよ。・・・それじゃあね。また会える事を楽しみにしておくよ。」すると、エレベーターが降下する音が聞こえた。

「逃げられたか。横に付いてあるカードリーダーみたいな物は恐らくナムオアダフモ機関の社員カードを入れるんだろ。」

のび太はエレベーターの横にあるカードリーダーを見て言った。やがて、踵を返し、

「さて、こちら辺に何かあるかもしれない。探索をしてみよう。」

と言うとのび太は探索を始めた。部屋があまり広くなく、探索はすぐに終わった。見つかった物は同じ形状の鍵2つと、青い本で、表紙には、

『最後の書（下）』

EAGLE of EAST WOLF or WEST

と書かれた本だった。2つの鍵はタグが付いており、1つのタグに

は、『休憩室』と書かれていて、もう1つのタグには『弾薬倉庫』と書かれていた。

「・・・この青い本、学校の生徒指導室にあつた赤い本と同じタイトルだな。もしかすると中にメダルがあるかな？」

のび太は青い本を開いた。案の定そこにはメダルがあり、狼の模様が刻まれていた。

「見つける物も見つけたからスネ夫達と合流するかな。」
と言うとのび太は部屋を出た。

AREA 3 『ナムオアダフモ機関社員』（後書き）

こんにちはMONDOERAです。そしてあとがきルームです。今回のゲストは真理奈とスネ夫です。

「どうもこんにちは。」

「ふう、やっと化け物共を倒した後に何だよ。」

あとがきルームでの談話お願いしますよ。

「じゃあ大量の化け物共と戦った時の話でもするか。」

僕は、『UZI』や『ファマス』で化け物共を撃ちまくったんだ。聖奈さんも『H&K MP5K』で化け物を撃っていたんだ。」

「で、私は『ベネリM3』でスネ夫君達の援護をしたんです。役に立ててましたか？」

「そりゃあね。随分助かったよ。銃火器の扱いも結構様になっていたし。」

「それなら良かったです。」

というか、武器はショットガンだけでいいのか？

「それはまあ、威力ありますし、結構使えるのでしばらくはこれでいいかと思います。」

そうか。まあ何れ他の武器も使うことになりそうだけだな。じゃあそしたら、そろそろのび太の所に戻った方がいいんじゃないか？

「ああ、そうだったな。のび太の様子を見てこないとな。」

「ええ。早く行きましょう。」

という訳で今回のあとがきルームは終了とさせて頂きます。

AREA 4『合流』

「あつ、のび太君!」

部屋から出てきたのび太の耳に入っただけはその声だった。続いて他の二人も喋る。

「のび太さん、無事でしたか。」

「のび太、化け物は倒したか?」

真理奈、聖奈、スネ夫の順に喋り、のび太が現状を説明する。

「さっきの蜘蛛の怪物は倒したよ。それと、戦闘中に壁の一部が崩れて部屋を見つけたから探索して、鍵を2つ見つけた。」

と言うとのび太は、2つの鍵を3人に見せた。

「これは、さっき鍵が掛かっていた扉のものか?」

と、スネ夫が言うとのび太が返す。

「多分ね。早速確かめに行こう。」

そして、4人は近くの金属製の扉に鍵を使った。鍵は『休憩室』と書かれたタグが付いている鍵を使い、開けることが出来た。

扉を開けたのび太達が見たのは、『休憩室』と書かれたプレートが付いている金属製の扉と、右側に更に続く通路だった。

『休憩室』と書かれたプレートが付いている金属製の扉はすぐ正面にあり、正に入ってくれと言わんばかりだった。

「まずは正面の扉に入ろう。恐らくここが休憩室の筈だ。」

と、のび太が言うとのび太は扉を開けた。その中はテーブルと10個の椅子、更に部屋の奥に、90cm程の台に乗っているパソコンがあり、大量の空のビール瓶が専用の籠に入っていた。のび太と聖奈と真理奈は椅子に腰掛けた。

「はあ、疲れたあ。」

最初にそう言ったのは真理奈だった。

「のび太君も疲れない!? だってゆうか、あんな怪物と戦って怖くないの!?!」

真理奈は少々ヒステリック気味にのび太に喋った。

「まあもう慣れたよ。」

と、のび太が返す。

「こんな所、正に地獄ですね。」

と、聖奈が言う。

「・・・地獄か。でも僕達も真相に近づいて行っていると思うんだけど・・・。」

聖奈の言葉にのび太が返す。

「だといいんですが。」

聖奈が不安の言葉を漏らす。すると、のび太がスネ夫を見て言った。

「・・・スネ夫、何やってんの？」

スネ夫は部屋の奥にあるパソコンをいじくっていた。そしてスネ夫はのび太の呼び掛けに応えた。

「このパソコンが動くかどうか試していたんだよ。・・・でも無理そうだ。くそっ！」

スネ夫はやや苛々していて、台を蹴った。不思議な感触がしてスネ夫は台の蹴った箇所を見た。

すると、台には観音開きのタイプの開き戸が付いていた。スネ夫はその戸を開いた。中には蓋の付いてない木箱があった。スネ夫はその木箱を取り出した。木箱の中には幾つかの銃火器があった。

「おいのび太、見ろよ。こんな所に銃がある。」

スネ夫はのび太に話し掛ける。すると、のび太が驚いた。

「何だって！」

驚いたのび太はスネ夫の近くまで行った。そこには木箱の中に4つ程の銃火器があった。あったのはどれも短機関銃サブマシンガンだった。

「これは、『ベレッタM12』と『H&M P5』、『H&M P7』と『H&M UMP』だね。」

のび太が銃の名前を言うと、スネ夫は皆に向かって喋った。

「ならここにいる4人で銃を山分けするか。」

4人に異存は無いようで、早速銃を選びはじめた。

「じゃあ僕はこれを買うかな。」

と言うとスネ夫は『H & amp; K MP 5』を取った。

「僕の方はこれを取るよ。」

と言うてのび太は『ベレッタM 12』を取った。いつの間にか真理奈と聖奈ものび太達のすぐ傍まで来ていた。

「私はえ〜と、重量が軽めのこれを選びます。」

と言うと、聖奈が『H & amp; K U M P』を取った。

後に残った『H & amp; K MP 7』と木箱に一緒に入っていた、『H & amp; K MP 7』用の弾薬、『4・6mm×30mm弾』を真理奈が取った。

「のび太君、この銃の特徴は？」

と、真理奈がのび太に訊いた。それにのび太は応えた。

「垂直グリップと、伸ばして肩に掛けられるストックが特徴かな。」

のび太は簡単に説明した。すると、スネ夫が思い出したように喋る。「そうだのび太！さっき鍵が掛かっていて開かなかった金属製の扉があったよな！多分あそこは『弾薬倉庫』って書かれたタグが付いている鍵で開くと思うから、今すぐ開けに行こうよ！！」

それにのび太が返す。

「そうだな。それに弾薬倉庫なら寄って行って損は無いだろう。弾切れを起こしたら元も子も無いからな。聖奈さんと真理奈ちゃんはここで待機していてくれ。」

と、のび太は聖奈と真理奈に向かって言った。2人はそれに返す。

「解りました。全員が行っても特に意味は無いですからね。」

と、聖奈が言う。

「でも、気をつけてよ。死んじやったら意味ないからね。」

と、真理奈が言った。

「ああ、充分に気をつけるよ。」

と、のび太が言う。スネ夫は既に鍵を持っていて行く準備は出来ていた。

「おいのび太！早く行くぞ！」

と言うとスネ夫はさっさと出て行ってしまった。のび太もそれに続く。出る直前に真理奈と聖奈に喋った。

「何かあったら連絡する。それじゃあまた後で。」

と言うとのび太は休憩室を出た。のび太はスネ夫と合流すると、鍵が掛かっていた扉に向かった。

やがて扉の所に到着し、スネ夫が『弾薬倉庫』と書かれたタグが付いている鍵を回した。鍵はこの扉に合い、解錠された。中にはやはり大量の弾薬があった。

「やっぱりここは弾薬倉庫だったか。……でも見た感じ大口径の弾薬ばかりで小口径の弾薬は無いな。まあでも、全部取っておこう。」

とスネ夫が言うと、のび太とスネ夫は弾薬をそれぞれのバックに詰めた。弾薬倉庫にあった弾薬は、.357マグナム弾18発分、.44マグナム弾24発分、.50AE弾21発分、榴弾18発分、焼夷弾30発分、硫酸弾12発分だった。そしてそれらは、種類毎に箱詰されていた。

やがてバックに弾薬を詰めるのが終わると、のび太達は弾薬倉庫を出た。そして休憩室に戻ろうとした。しかし道中思わぬ人物達に出逢った。

「ジャイアン！静香ちゃん！太郎！ここに来てたのか！」

3人を見たのび太は嬉しさと驚きを隠せない様子だった。

「おうよ！のび太、無事だったか！それにしてもここは何なんだ？ジャイアンがのび太に話し掛けた。」

「まだよくは判らない。だけど僕は、この先に何か重要な何かがあると踏んでいるんだけど……。」

と、のび太は返す。

「先に行かねえと判らねえって事か……。」

とジャイアンが言う。

「あっそうそう、この先に休憩室があるんだ。一度そこに全員集まろう。」

と、のび太が言うと、のび太とスネ夫は他の3人を案内した。その道中でのび太は真理奈に連絡した。

RRRRRRRRRRRRRRRRRRRR

「はい、真理奈です。」

「あっ、真理奈ちゃん。道中でジャイアン達を見つけたから全員で休憩室に集まろうと思う。今後の事も話し合いたいしね。一応連絡しておくよ。」

「えっ、そうなんですか。良かった〜。じゃあ待ってますね。」
ピッ

会話を交わし終わると、のび太は通信を切った。

やがて休憩室に着いた。休憩室の中に入ると、全員はそれぞれ椅子に座り、寛ぎ始めた。

「あっ、そういえば皆さんに渡したい物があります。」

唐突に聖奈が全員に話し掛け、バックから何かを取り出した。それは人数分あり、円筒形のタンクにガスバーナーの口が付いたような物だった。

「学校の理科室にあった、持ち運び出来る『簡易ガスバーナー』です。いつか役に立つかもしれないので……。」

と言うと聖奈は全員に配った。

「ガスバーナーか。怪物に対してはあまり有効じゃなさそうだな。」
とジャイアンが言う。

「……ん？聖奈さんは空き瓶で何をしてるの？」
と、スネ夫が言った。見ると聖奈は空き瓶に何かの薬品を詰めていた。

「ええ、これはここにあった空き瓶を使って『火炎瓶』を作ってい

るんです。」

と、聖奈は言う。

「……『火炎瓶』……。」

と、真理奈。

「因みに今私が作っているのは塩素酸塩と硫酸の化学反応によって炎上するものです。」

聖奈が説明口調で言った。するとジャイアンが喋る。

「こんな所でうだうだしてもしょうがねえ。スネ夫！のび太！この先を探索するぞ！！」

と、ジャイアンが叫んだ。

「判った。僕もそろそろ動かなきゃいけないと思っていたからね。」
と、のび太が言う。

「ええ！？ジャイアン、何で僕が行かなきゃならないのさ？」

と、スネ夫が泣き言を言うと、ジャイアンがささず言う。

「何だと？スネ夫のくせに俺様の言う事が聞けないって言うのか？
のび太はすぐに承認したぞ。」

と、ジャイアンがゆっくりと且つ重みのある声で言った。

「あゝもう解ったよ！行けばいいんでしょ！行けば！！」

と、スネ夫が自棄になって叫ぶと、ジャイアンは扉の前にいて、行く気満々だった。のび太達も行こうとすると、不意に誰かの声がした。

「あつ、私も行く！」

と言ったのは真理奈だった。

「いいの？真理奈ちゃん？」

と、のび太が訊く。

「うん、大丈夫だよ。」

のび太の声に返した真理奈はすぐに席を立ち、のび太に着いて行っ
た。するとジャイアンがスネ夫に話し掛けた。

「スネ夫は臆病者だな。真理奈ちゃんでも自主的に探索に出掛ける
というのに。」

「ほ……ほつといてよ……」

スネ夫は情けない声で言った。そして、のび太、ジャイアン、スネ夫、真理奈の4人は奥へ進んで行った。奥は、狭い通路が続いており、怪物とは戦いにくい空間だった。しかし幸い怪物は一体も出て来なかった。80メートル余りの通路は左に道が続いていた。左への道は少し道幅が広がった。4人はそのままその道を直進した。暫く進むと、巨大な何かが見えた。

「……………何だこりゃ？」

ジャイアンが疑問を投げかける。そこにあったのは、のび太達が先程目にし、命懸けの追いかけてこをした岩と同等の大きさをしていた。

「もしかしてこれ……………」

「ジャイアン。恐らくこの岩は僕達がここから離れると転がって来るんだと思う。」

と、スネ夫が言う。ジャイアンが返す。

「何でそんな事判るんだ？」

ジャイアンの問い掛けにスネ夫が答える。

「前に僕達が見た岩もこんな感じだった。それで引き返すと、その岩が転がって来たんだ。」

と、スネ夫が説明した。

「成る程な。」

ジャイアンが納得し、岩の方を向くと、のび太が居た。そしてジャイアンはのび太に話し掛けた。

「おいのび太。そこで何してんだ？」

ジャイアンの問い掛けに気づいたのび太が振り返り、言う。

「ああ、この岩が転がってくる仕組みがどうなっているのかを調べていたんだ。」

そう言ったのび太にジャイアンは訊いた。

「仕組みは判ったのか？」

それにのび太は答える。

「ああ判った。これは多分地雷の起爆する原理と同じだ。岩の接している地面を見て気づいたんだけど、僕達が踏んでいるこの地面は少し陥没しているんだ。特殊な仕掛けが施されていて、僕達が乗っていることで重力が掛かって、それで陥没しているんだろう。そして僕達がこの陥没している地面を離れたら陥没している部分が元に戻り、それで何らかのスイッチが入り、この岩が転がってくるんだと思う。」

と、のび太は説明した。

「じゃあ足の速い奴が残って、残りの3人は予め避難した方がいいな。」

と、ジャイアンが言う。

「あまり気が進まないけれど、現状ではそれが最善の選択だね。」
と、のび太が言った。

「じゃあ誰が残るかね。」

と、スネ夫が言うと、ジャイアンが言う。

「ならここはスネ夫だな。」

ジャイアンがそう言うと、すかさずスネ夫が言う。

「何でだよ！」

と、スネ夫が言うとジャイアンが言う。

「だってお前が1番足速いだよ。・・・安心しろ。弔いはしてやるよ。」

ジャイアンのその言葉にスネ夫はすかさず返した。

「やだよ死ぬなんて！」

と、スネ夫が言う。

「そう怒るな。ちょっとした冗談だよ。だが、この4人の中で1番足が速いのはスネ夫だとは思っから、やってくれねえか？」

と、ジャイアンが喋った。

「・・・判ったよ。」

スネ夫は渋々了解し、4人は作戦を決行した。スネ夫以外の3人が先に避難し、スネ夫は大岩の近くで待機した。のび太の推測通り、

大岩は転がって来なかった。

「……とは言ってもやっぱり怖いな」

と、スネ夫が呟くと、スネ夫の通信機が鳴った。
ピッ

「おいスネ夫聞こえるか？」

スネ夫の通信機から聞こえてきたのは、ジャイアンの声だった。

「……聞こえるよ。」

スネ夫の返事を聞いたジャイアンは話し出す。

「よし、遠慮無く走れよ。スタミナ切れしない程度にな。危なくなったら援護してやるから安心しろ。」

それにスネ夫は返す。

「ああ、判ったよ。」

ピッ

スネ夫は通信機を切った。

「……じゃあ行くか。」

と言うとスネ夫は大岩と反対方向に走り出した。それに続いて大岩も転がってきた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

スネ夫は全速力で走った。初めの頃は、大岩の転がる速度より速かったものの、大岩は等加速度運動（等間隔で加速する運動）をしているので、段々スネ夫に接近してきた。

「お、追いつかれる……！！」

スネ夫は泣き言を言いながら全力疾走をしていた。

やがて横道とスネ夫との距離が約60m辺りまで差し掛かった時に、のび太はスネ夫に叫んだ。

「スネ夫！姿勢を低くしろ！！」

スネ夫は言われるままに前屈みになった。

ガン！

のび太が撃ったコルトパイソンが大きい銃声をあげ、転がってくる

大岩の上部を直撃した。マグナムの弾丸が当たった大岩は直撃した時の衝撃により、一瞬止まった。すかさずのび太はスネ夫に叫んだ。「スネ夫！今だ！走れ！！」それを聞いたスネ夫は横道まで全力疾走した。

スネ夫は何とか横道に滑り込んだ。
ドオン！

大岩が壁に激突する音が聞こえた。その直後、スネ夫が喋った。「はあ、はあ、何とか間に合った。」

「危機一髪だったな。」
と、ジャイアンが言う。

「のび太がマグナムを発砲して大岩を一瞬止めてくれたおかげで助かったよ。」

スネ夫がのび太の方を向きながら喋った。

「まあこうでもしないと僕達はただ逃げただけだからね。」
と、のび太が言う。

「じゃあそろそろ先へ進もうぜ。こんな所でゆっくりしてられないしな。」

と、ジャイアンが言うと、全員は先へ進んだ。さっきまで大岩があった場所には左へ続く通路があった。

「どうやらさっきの大岩がこの道を隠していたようだね。何か意図的な感じを受けるな。」

と、スネ夫が言うと、他の3人も相槌を打った。

通路を進むと、奥の方に上に続く階段が見えた。のび太達はその階段を上がっていった。

「どうやら下に続いているようだね。」

と、スネ夫が喋る。

「僕が先に下へ降りよう。皆も続いて来てくれ。」

と、のび太が言うと、のび太はさっさと梯子を下っていった。3人も、のび太の後に続いて行った。下っていった先は、研究所の様な所で、重要な施設にありそうな大型エレベーターがあった。

「・・・これは・・・。。。」

と、のび太が呟いた。

「いよいよ何かありそうな所に来たな。」

と、ジャイアンが喋る。

「じゃあ皆を呼んで来ようよ。」

と、真理奈が言うと、スネ夫がそれに返す。

「そうだね、この先を進むのは皆と合流してからにしよう。」

と言うと4人は全員を呼びに休憩室へ向かった。

やがて数分後、のび太達7人全員は先程来た大型エレベーターの前まで来た。

「僕達の学校にこんな所があったなんて・・・。」

と、太郎が呟く。

「・・・一介の小学校の地下に坑道、そして、研究所の様な何らかの施設にあるような大型エレベーター。もう何が出て来ても驚かないわ。」

「

と、聖奈が言う。

「こんな所で喋っても仕方がない。早くエレベーターに乗ろう。」

と、のび太が急かした。すると全員はエレベーターに近づいていった。しかし、聖奈が皆に向かって叫んだ。

「皆さんちょっと待って下さい！渡したい物があります！」

聖奈がそう言うと全員は聖奈の方を振り返った。聖奈はバックから瓶を取り出していた。

「火炎瓶を作りました！いざという時に役に立つと思うので受け取ってください！！」

聖奈がこう言うと、太郎とジャイアン以外の全員は火炎瓶を一人二つずつ取った。

やがて全員は大型エレベーターに乗り込んだ。

AREA 4『合流』（後書き）

どうもあとがきルームです。今回でやっと『闇の坑道』編終了です。今回のゲストはのび太です。

「今回の戦いは、今までで1番きつかったな。」

蜘蛛野郎の事か。

「ああ、弾丸を避けられたしな。それにスネ吉も出て来たのは驚いたよ。」

これから先、まだまだナムオアダフモ機関について明かされる事があるんで、楽しみにしていってくれよ。

「・・・楽しみに出来ないんだけど。どうせまた新しい怪物が出るんでしょ？」

まあな。と言っても新しい怪物が出て来るのは、この小説の続編だけど。

「へえ、続編の構想は出来てるんだ？」
まあな。

・・・さて、例によってまた話す事が全然無いというね。

「何か特別な資料も無いしね。」

んじゃあそろそろ終了といこうか。

「いつもながら短いね。」

仕方ない。これが現状での限界だ。

それじゃあこれで今回のあとがきルームは終了します。それではまた次の話で。

AREA 1『スライドフィルター』

ギユウウウウウウン

大型エレベーターが降下音を立てながら地下へ進む。暫くすると、エレベーターのドアが開いた。第一声を開いたのはスネ夫だった。

「……………ここは……………」

「どうやら研究所のようだね。……一体どうなっているんだ？ 僕達の学校は。」

とのび太が言った。

「よし、じゃあ今回は2ルートに分かれて探索する。俺と静香ちゃんと太郎のチーム、のび太とスネ夫と真理奈ちゃんと聖奈さんのチームで進むぞ。」

「解りました。」

と、聖奈が喋り、

「もう行くしか無いよね。」

と、スネ夫が喋った。

「それじゃあ行くぞ！ 皆死なないように気をつけるよ！！」

と、ジャイアンが言うと、ジャイアンのチームはさっさと奥へ行ってしまった。

「僕達も行こう！ 絶対ここに何かある筈だ！！」

と言ったのび太は先へ進んだ。通路の先には大型エレベーターと下へ続く梯子があった。大型エレベーターにはこう書いてあった。

『緊急時脱出用車両直通エレベーター』

緊急時にはライトが赤く点灯し、自動的にロックが解除されます。』

「このエレベーターを使えばここから脱出出来そうですね。」

と、聖奈が喋る。

「でも非常事態にしか作動しないエレベーターみたいだ。隣のライトはグリーンだから非常事態として認識されていないと思う。非常事態として認識させる必要があるだろうな。」

と、のび太が言った。

「じゃあ傍にある梯子を下ってみよう。」スネ夫がそう言うと、全員は梯子を下った。下っていった先は何も無い小部屋で反対側に自動扉があった。のび太達はその先へ進んだ。進んだ先はL字廊下になっでいて、突き当たりを右に曲がった後の突き当たりで左右に道が分かれており、右側は階段があり、左側は何かの部屋があった。そしてそこには2体のゾンビがいた。

「私が討つわ!!」

と、聖奈が言うと、聖奈はH & a m p ; K M P 5 Kを連射した。

「ウオオオオオオ!!」

「アアアアアア!!」

ゾンビ共は悲鳴を挙げて倒れた。

「ゾンビ共は私達に任せて!」のび太さん達はいざという時に怪物が出た時の為に、体力を温存しておいて!」

と、聖奈が言った。

「・・・判った。ありがとう聖奈さん。」

のび太が礼を言うと、全員は先へ進む。道が左右に分かれている所まで行くと、スネ夫が喋った。

「左側は何かの部屋で、右側は下へ続く階段か。まずは左側の部屋を見てみよう。」

と言うと4人は部屋に入ってしまった。部屋の中は、ダイヤル式のロツクが掛かっている金庫とスライドフィルターを映し出すプロジェクターがあった。

「ねえ、このプロジェクター、スライドフィルターがセットされているみたいだよ。」

プロジェクターを調べていた真理奈がそう言った。

「よし、早速映してみよう。」

と、のび太が言うと、真理奈はプロジェクターを起動した。映し出されたスライドにはこう書かれていた。

『ナムオアダフモ機関生物兵器開発資料』

それを見た全員は息を呑んだ。

やがて真理奈は徐にスライドのページを送った。
次のページを見た瞬間、スネ夫が叫んだ。

「こ、こいつらは学校に居た狂犬！まさかこのバイオハザードは仕組まれたものだったのか！！」

と言うとのび太も言う。

「……だろうね。」

そこに描かれていたのは血みどろで内臓や骨が露出した犬の絵で、スライドの上方には、『MA - 39 CERBERUS』と書いてあった。

そして真理奈は次のページを開いた。次のページには、同じく血みどろで内臓や骨が露出していたカラスが映されていた。スライドの上の方には、『MA - 18 CROW』と書かれていた。続いて真理奈は次のページを開く。次のページには、虫のような人型の怪物が描かれており、スライドの上の方には、『MA - 87 BRAI NDI MOS』と書かれていた。それを見たのび太が喋る。

「こいつは……！家庭科室やパソコン室にいた怪物だ！！」

と言うと真理奈は次のページを開く。そこには緑色をしていて、所々血管が浮き出ている巨大なカメレオンの様な怪物が映っており、スライドの上部には『MA - 96 BIOGALES』と書かれていた。

「……！！あの時理科室にいた怪物だ！」

と、のび太が叫んだ。やがて真理奈は次のページを開く。次のページには、皮をひん剥いた様なゴリラの様な怪物が映されており、スライドの上部には、『MA - 153 FROZEVINILT』と書かれていた。

「……！！旅館にいたゴリラの怪物だ！酒蔵にあった手記には『フローズヴィニルト』と書いてあったな。あの酒蔵の管理人もこの関係者だったって事か……。」

のび太がそう言うと、真理奈は次のページを開く。次のページに映ったのは、緑色をしていて、身長が1.7m程で、肩幅が広い怪物だった。スライドの上部には、『MA-121 HUNTER』と書かれていた。

「……………!!この怪物!途中から学校に居た怪物だわ!!」
と、聖奈が言った。続いて真理奈が次のページを開く。次のページには、巨大な蜘蛛の怪物が映されており、スライドの上部には、『MA-138 BLACKTIGER』と書かれていた。

「こいつはあの時の蜘蛛だな。こいつも開発された生物兵器だったのか……………」

と、のび太が言う。そして真理奈が次のページを開く。次のページに映されてあったのは、今まで見たことも無い怪物だった。体軀は全体的に黒色であり、両手には鋭いカギ爪があり、そして背骨が露出していた。スライドの上部には、『MA-135 KIMERA』

「これは、今まで見た事の無い怪物ですね。」

真理奈がそう言うと、のび太も言う。

「そうだな。ここにも新しい怪物がいるかもしれないから充分に気を付けなきゃいけないな。」

と言うと真理奈は次のページを開いた。そのページに映っていたのは、左手に巨大な爪がある人型のシルエットだった。スライドの上部には『CODE:T-002 TYRANT』と書かれていた。

「これも今まで出て来てない怪物だね。」

と、スネ夫が言う。

「ええ、しかし今までの生物兵器と違ってシルエットになっていますね……………まだ開発中ということでしょうか?」

聖奈がそう言うと、スネ夫が喋る。

「……………こんな所で考えても仕方がないよ。」

と言うと、真理奈が皆に喋る。

「もうスライドはありません。どうやらさっきのが最後のスライドだったみたいです。」

と言うと真理奈はプロジェクターの電源を切った。そして、中からスライドフィルターを取り出して言った。

「このスライド、一応持って行きましようか？」

と言うとのび太が喋る。

「一応持つて行こう。何か重要な資料になるかもしれない。」

と言うと真理奈は自分のバックにスライドフィルターを入れた。

「そろそろこの部屋を出よう。反対側に下り階段があった筈だ。」

とのび太が言うと、全員は映像資料室を出て、下り階段を下っていった。

その頃・・・・・・・・・・。

「ここは何なんだ？」

と、ジャイアンが言う。

「鋼鉄製の扉・・・・・・・・。何かを厳重に保管しておく場所かしら？」

と、静香が言う。

「んー。訳が判らないね。」

と、太郎が言う。

3人はそう言いながら、3つ並んだ鋼鉄製の扉を調べた。しかし、手前の2つの扉は開かなかった。しかし1番奥の扉は割と簡単に開いた。

「お、ここは開くな。中を調べてみるか。」

ジャイアンはそう言うと、中を調べ始めた。

しかし、中には特に気になる物は無かった。

「何も無いな。ここはハズレか。」

と、ジャイアンは言った。そしてその部屋から出ようとすると、いきなり扉が閉まった。

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ガンガンガン!!!!

ジャイアンは扉を叩く。しかし鋼鉄製なので生半可な力ではびくともしない。

「静香ちゃん!! 太郎!! ここを開けてくれ!!!!」

ジャイアンは静香と太郎に助けを求めた。しかし助けてくれる訳は無い。なぜなら、扉を閉めて扉の鍵を掛けたのは静香だったのだから。

「あ…………あ…………。」

太郎は驚きのあまり、うまく声が出せない様子だった。

「……………」

静香は少しの間沈黙していたが、やがて太郎に近づくと、太郎を殴った。太郎は吹っ飛んで壁に激突した。

太郎は何も言えずにその場に倒れ込んだ。やがて静香はその場を離れた。少しすると静香は何処かに通信した。

「こちら『アフィマーサー』。潜入工作は良好。そして『ジャイアン』を監禁室に監禁しました。」

静香がそう言くと、通信の向こうから返事が来た。

「ご苦労。ではこれから動力室へ行き、エレベーターの電源を落とせ。それが終わり次第、引き続き潜入工作を遂行しろ。」と言うと、静香はそれに答える。

「了解しました。」

ピッ

静香は通信を切り、エレベーターで上に向かった。

AREA 1『スライドフィルター』（後書き）

こんにちはあとがきルームです。今回のゲストはのび太と真理奈です。

「また私ですか。」

「・・・僕の出番が多い。」

は？

「いや、僕の出演率が高くないか？」

「そうでも無いと思うが。」

「そうかなあゝゝ。」

「そんな事より本編について雑談しませんか？」

ああそれもそうだな。

「差し当たり、あのスライドフィルターかな。」

「そうですね。今出しますよゝ。」

あれ、でもプロジェクターが無いと映し出せないぞ。

「細かい事は気にするなよ。」

「準備出来たよゝ。」

「・・・改めて見てみると、今まで出会った怪物が全て載っているな。」

「何の為にこんな事をするんだろう？」

「僕は判らないな。作者さんは知ってるんじゃないの。」

それを言ったらネタバレになるだろうが。

「あ、そうか。」

まあ物語が進めば自然と明かされる。

「どのくらい進めば明かされるの？」

あと、2〜3話分くらいだな。

「そうか。じゃあ今回はこの辺であとがきルームを切り上げよう。」

それは僕の台詞だ。・・・まあいいや。じゃあ次回のあとがきルームまでさようなら。

AREA 2 『解説』

一方その頃、のび太とスネ夫と真理奈と聖奈は階段を下っていた。下った先は、前と左側に通路があり、すぐ右側には自動扉があった。しかし、すぐ右側の扉と左側の通路にはゾンビがかなり居た。

「！！取り敢えず前方の通路に逃げるぞ！！」

のび太がそう言うと、4人は前方の通路に走っていった。走っていた通路はすぐ突き当たり、左に通路が続いていた。すぐ傍には両開きの大きな扉があったがその前には1体のゾンビが居た。

「今度は私が撃つわ！」

と、真理奈が言った。すると、真理奈は『H & a m p ; K M P 7』を構えてゾンビに向けて撃ち放った。

タタタタタタタタタタ！

「オオオオオオオオオオオ！！！」

ゾンビは悲鳴を挙げて、その場に倒れた。

「じゃ、入ってみよ」

真理奈はそう言うと、そそくさと扉の前まで行った。そして、扉の中に入った。のび太達も真理奈に続いて、扉の中に入った。部屋の中は、2つ程のカプセルと幾つかの何らかの機材、そして、奥の方にパソコンがあった。スネ夫はパソコンの方へ行った。

「・・・・・・このパソコン。もうログインしてあるな。」

スネ夫がそう言うと、のび太が喋る。

「誰かがこのパソコンをさっきまで操作していたって事か？」

のび太がそう言うと、スネ夫が応える。

「判らないけど、・・・・・・多分そうじゃないかな？」

と言うとのび太が喋る。

「でも、このパソコン・・・・。視聴覚室で参照出来なかった『MOディスク』と『USBメモリー』を参照出来るんじゃないか？」

のび太がそう言うと、スネ夫も答える。

「確かにそうかもね。これだけの施設だと、もしかしたら参照出来るかもしれない。」

と、スネ夫が言うと、スネ夫はバッグからMOディスクとUSBメモリーを取り出し、まず、MOディスクをセットした。すると画面に文字が表示された。

『緊急時脱出用車両起動コードが認識されました。
外部デバイスにコードを転送しますか？』
ダウンロード

その文章を見たスネ夫は『YES』をクリックした。しかし、クリックした次の瞬間、

『E：ドライブに必要な外部デバイスがセットされていません。ブランクCDを挿入し、再試行して下さい。』
と、表示された。

「・・・これは、CD-Rを探さないといけないみたいだね。」
と、スネ夫が言った。

「ならその『CD-R』っていう物を見つければいいんでしょ？」
と、真理奈が言うと、聖奈が反論する。

「そんなにうまく見つかるでしょうか？」
と言うとのび太が言う。

「これだけ大きな施設だと、予備のCD-Rくらいあるんじゃないか？」

と言うとスネ夫が喋る。

「ま、多分あると思うよ。CD-RやCD-RWは大容量記憶媒体と呼ばれて、USBメモリーの次に使われている記憶媒体だからね。僕のパパが社長の『骨川グループ』でもCD-RやCD-RWはよく使っていると聞いたからね。」

それを聞いた真理奈はスネ夫に訊く。

「え、スネ夫君ってあの有名な株式会社の『骨川グループ』の社長の子供なの？」

と言うとスネ夫は応える。

「え、ああまあね。」

それを聞いた真理奈は騒ぎ出す。

「わー、すっごくいいじゃあ次期社長とか？」

その言葉にスネ夫は応える。

「……まあ、……そうかな。」

と、スネ夫が言うと、真理奈がのび太に話を振った。

「ねえのび太君はどう思うの？」

すると、のび太は無表情で言った。

「……僕は喧^{やかま}しいと思うな。」

それを聞いた真理奈はきょとんとして、喋る。

「え？」

一拍置いてのび太が喋る。

「仮にも緊急事態なんだから、あまり騒ぐのはどうかと思うんだけど。」

のび太は真理奈を諭すように喋った。

「うー、ごめん。」

真理奈はそう言って謝った。すると、のび太がスネ夫に言う。

「スネ夫。USBメモリーの方を頼む。」

その言葉を聞いたスネ夫は返事をした。

「……判った。」

と言うとスネ夫はパソコンにUSBメモリーをセットした。

カタカタカタカタカタ。

スネ夫はパソコンのキーボードを引っ切り無しに叩いている。それを見たのび太がスネ夫に向かって言う。

「スネ夫、何をしているんだ？」

それにスネ夫は応える。

「どうやら暗号化されてるみたいだね。このパソコンに搭載されているOSとソフトウェアで暗号を解けそうなんだ。すぐに終わると思うよ。」

と言つとのび太が言う。

「判った。」

と言つとのび太は座り込み、銃と弾薬を出した。それを見た聖奈がのび太に喋る。

「のび太さん、何をしているんですか？」

聖奈が訊いたのでのび太は応えた。

「銃に装填する弾薬の調節をしているんだ。本当は銃自体の調整も定期的にしなないといけないけど、時間が無いからね。だけど、弾薬の調節ぐらいはやっておいた方がいいかと思ってね。」

と言いながら、のび太はハンドガンのマガジンに弾薬を入れていた。

やがてスネ夫が全員に喋った。

「暗号の解読終わったよ。」

と言つと真理奈が言う。

「どんな事が書いてあったの？」

真理奈のその言葉にスネ夫は応える。

「『《各種生物兵器の特徴及び白兵戦における対処方法》』と書いてあるな。」

それを聞いたのび太が呟く。

「生物兵器に対する対処法、か。」

と言つと聖奈が喋る。

「どんな内容なんですか？」

聖奈がスネ夫に訊くと、スネ夫は喋る。

「ちよつと長いから、暇がある時に読んだ方がいいよ。今、プリンターに出力しよう。」

と言つとスネ夫は、解読した文書を印刷しようとした。しかし、

『印刷用紙がセットされていません。』

と、表示された。

「・・・どうやらA4サイズの印刷用紙も探さないといけないみたいだね。」

スネ夫がそう言うとのび太が喋る。

「だけどこれでやる事は決まったな。空きのあるCD-RやCD-RWの探索、A4サイズの印刷用紙の探索、脱出経路の確保、取り敢えずはこの3つだな。」

と言うと聖奈が喋る。

「じゃあ手分けして探索するんですか？」

聖奈がそう言うとのび太は応える。

「ああそうだ。スネ夫はこのパソコンで引き続き、情報収集をしてくれ。真理奈ちゃんは、ここにゾンビが来るといけないから、ゾンビを殲滅する為の戦力としてここに待機していてくれ。聖奈さんと僕でこの施設を探索する。」

と言うとすかさず真理奈が言う。

「なんで私が待機なのさ？」それにのび太は応える。

「拠点の護衛も重要な役目の一つだよ。暫くはここを拠点としようと思うからね。」

と言うと真理奈は喋る。

「・・・解ったよう。・・・まああのび太君が言うなら仕方ないか。」

と、真理奈は了承した。

「じゃ、聖奈さん。僕達は早く探索を進めよう。」

のび太がそう言うのと、聖奈は返事をする。

「ええ、解りました。」

と言うとのび太と聖奈は小実験室を出た。

AREA2『解説』（後書き）

今回は『あとがきルーム』は休館とさせて戴きます。

by MONDOERA

AREA 3 『探索』

「じゃあ聖奈さんは右側を探索してくれ、僕は左側を探索する。」
のび太がそう言つと、聖奈が返事をする。

「ええ、お互いに気をつけましょう。」

と言つとのび太と聖奈は分かれて探索する。聖奈は階段付近まで移動した。階段付近まで来ると、すぐ左側に自動扉が見えた。聖奈はその扉を開き、奥へ進む。扉を開いた先は、右側の壁に、『E-12』と書かれている通路だった。左に1つの自動扉、右に1つの自動扉、そして、更に奥に1つの自動扉があった。そして、聖奈はまず、左側の扉に入った。入った先は、ベットが3つ程と、レントゲンボードがあり、医務室のようだった。

「ここは、・・・医務室だったのかしら。何かあるかもしれないわね。」

と言つと聖奈は医務室を探索した。

暫くすると薬品棚を調べていた聖奈が呟く。

「・・・役に立つものは見当たらないわね。仕方ないわ。次の部屋に行きましょう。」

と言つと聖奈は医務室を出た。そして、向かい側にある自動扉を開けた。そこには大量の紙の資料の様な物があつた。

「ここは多分資料室ね。何か見つかるかもしれないわ。」

と言つと聖奈は探索を始めようとした。しかし、

「アアアウウウウウ。」

と、ゾンビの声が聞こえてきた。

「・・・ここにもゾンビがいるのかしら？気づかれない内に早めに

倒しましょう。」

と言うと聖奈は『グロック17』を腰に構え、壁を背にしてゆつくりと息を潜めてゾンビを探す。資料室はL字になっていて、ゾンビは奥のロッカーがある所に5体程固まっていた。

「この場合はハンドガンよりサブマシンガンの方がいいわね。」

と言うと聖奈は『H & a m p ; K M P 5 K』を構えて、ゾンビ共に9mmパラベラム弾を撃ちまくった。

「アアアウウウウウ。」

ゾンビは、悲鳴を挙げて倒れた。

「・・・もうゾンビも居ないことだし、早く探索しましょう。」

と言うと聖奈は探索をした。といっても、資料が大量にあるので、気になる資料だけを取った。

探索を終えた聖奈は取った資料を見て言った。

「・・・これは何かしら？」

聖奈が唯一取った資料は、ホッチキスで留められた紙の束だった。それにはこう書いてあった。

『 研究所・警備システム資料 』

- 1 F -

『 緊急用避難経路 』

緊急時のみの時以外には入室しない。未確認の侵入者は直ちに射殺せよ。

- B 1 F -

『 映像資料室 』

映像資料室を特研部管轄の下に設置。利用に関する裁量権は、徳田陽平室長に委任するものと定める。

- B 2 F -

『 動力室（動力棟） 』

燃料に二ト口化合物を使用している為、本社派遣の監督官以外の者の入室を禁ず。

尚、顧問研究員が特別な指示を受けた場合はこの限りではない。ま

と言うと聖奈は資料室を出た。そして聖奈は通路の奥へ進んだ。

進んだ先は、L字になっていて、すぐ右側には自動扉があり、少し進んだ右側に、更に右に続く通路があった。

「まずはこの扉の中に入ってみましょう。」

と言うと聖奈はすぐ右側の扉を開けた。すると、幾つもの自動扉が横に並んでいた。

「・・・扉の横に掛かってあるプレートに『徳田陽平』や『堀大樹』と書かれてあることから考えると、どうやらここはこの研究所の社員の為の寮だったようね。・・・多分開かないと思うけれど、試してみようか。」

と言うと聖奈は左側から順に扉を調べていった。

その頃、スネ夫の方では・・・

カタカタカタカタ・・・

スネ夫はずっとパソコンのキーボードを打っている。すると、真理奈が話し掛ける。

「ねえスネ夫君、さっきからキーボード打ちっぱなしだけど、何か進展あったの？」

と言うとスネ夫が応える。

「特に無いな。文書データは幾つかあるけれど、どれもこの施設の概要ぐらいで、重要な資料なんかは無いな。生物兵器の研究資料なんかがあればいいんだけどね。」

と、スネ夫は応えた。

「そう。」

と、真理奈は素っ気ない返事をした。

カタカタカタカタカタカタカタカタカタ・・・

スネ夫は依然キーボードを打っている。暫くすると、スネ夫は何かを見つけた。

（・・・これは、『A・C・A・Mについて』?・・・何

が重要な資料の感じがするな。結構なプロテクトが掛かっているけど、・・・やってみるか。」

とスネ夫は考えると、早速プロテクトの解除を始めた。

その数分前、のび太の方では・・・

「よし、早く探索を済ませよう。」

と言うとのび太は左側の探索を始めた。小実験室から左に進むと、26m程進んだ所で突き当たっていて、左に通路が見えていた。のび太は左に曲がり、通路を進んで行った。24m程進むと突き当たって、すぐ右に自動扉があり、左に通路が続いていた。その通路の先には、上に続く階段と、自動扉があった。

「向こうは聖奈さんが探索している筈だから、僕が探索するのはこの自動扉の奥か。・・・慎重に探索しよう。」

と言うとのび太はすぐ傍にある自動扉を開けた。開けた先は通路で、丁字路の造りになっていた。正面には自動扉、そして左右には、それぞれ左右に続く通路があった。

「まずは正面に見える扉に入ってみよう。」

と言うとのび太は正面の自動扉を開けた。扉の先は休憩室のようだった。

「ここは休憩室かな？取り敢えず探索だな。」

と言うとのび太は探索を始めた。

暫くして探索を終えたのび太は言う。

「あったのはグリーンハーブ1つとレッドハーブ1つと榴弾が3発分か。・・・特に重要な物は無かったな。よし、探索の続きをしよう。」

と言うとのび太は休憩室を出た。そして、まず左に進んだ。しかし、ある死体を見て、のび太は驚いた。

「・・・・・・・・！！これは、『フローズヴィニルト』か!？」
のび太の眼前には、頭が吹っ飛んだ『フローズヴィニルト』が倒れていた。

「しかもこいつ頭が吹っ飛んでいる。・・・やっぱりここに誰かが居るのか?・・・しかもよく見ると、頭を一発で吹き飛ばされているぞ。・・・・・・・・ロケットランチャーか、グレネードランチャーをピンポイントで直撃させたって事だろうな。・・・・・・・・・・こんなところで考えても仕方が無いな。早くこの先へ行こう。」

と言うとのび太は慎重にその先へ進んだ。進んだ先は、一つの大きな扉があり、『動力室』と書かれていた。

「・・・・・・・・動力室か。ここなら何か見つかるかもしれないな。」
と言うとのび太は動力室の扉を開けた。

その頃聖奈は、・・・・・・・・

「あつ、この扉は開くわ!」

聖奈は左から順に扉を開いていったが殆どの扉は開かず、やっと開いたのが『南原晃』というプレートが掛かっている扉だった。聖奈はその扉を開け、中に入っていた。中は一つの部屋で、左側に一つのベッドがあり、右側の奥には作業用のデスク、そのすぐ左には本棚があり、その左には、ロッカーがあった。

「ここには何かあるかしら?」

と言うと聖奈は探索を始めた。ベッド付近や本棚には何も無かったが、作業用のデスクを調べた聖奈が何かに気づき、呟いた。

「・・・・・・・・この引き出し、鍵が掛かっているわ。私が持っているこの鍵で開くかしら?」

と言うと聖奈はバッグから銀色の鍵を取り出し、鍵穴に差し込んで回してみた。

カチッ

鍵を回した瞬間、解錠の音がした。すると聖奈は徐に引き出しを開

けた。

「これは『CD-R』かしら？・・・後でスネ夫さんに見せてこよう。・・・後探索してないのは、ロッカーだけだわ。」

と言うと聖奈はロッカーを調べた。ロッカーは3つ並んでおり、左側と真ん中の2つは何も無かったが、右側のロッカーは鍵が掛かっていた。

「・・・もう一つあるこの鍵で開くかしら？」

と言うと聖奈はバッグからさっきと同じ様な形状をした、銀色の鍵を取り出し、それを鍵穴に差し込み、回した。

カチッ

さっき解錠した時と同じ音を立てて、鍵は解除された。そして聖奈はロッカーを開いた。中には、長方形の袋があり、その中には大量の白紙の紙があった。長方形の袋の表面には、『A4印刷用紙』と書かれていた。

「これが印刷用紙ね。これで印刷出来る筈だわ。早くスネ夫さんの所に持って行きましょう。」

と言うと聖奈は『小実験室』へ走っていった。

その頃のび太は、動力室の扉を開けるところだった。

ガコン！

大きな音を立てて、動力室の扉は開いた。

「・・・ここが動力室か。機械や蒸気の音がややでかいから、生物兵器の足音に気づかないかもしれないな。充分に気をつけよう。」
と言うとのび太は奥へ進んで行った。

暫く進むと、のび太は異変に気がついた。そして、足を止めて耳を澄ませ、考えた。

（・・・何か様子が変だな。微かだけど、僕以外の足音が聞こえる。でも人間じゃない、これは恐らく生物兵器の足音だ。）

するとのび太は、周りを見渡した。しかし、生物兵器も人間も見つからなかった。

（・・・・・・何処にもいないな。・・・・・・もしかして上か？）と、のび太は考えると、上を見上げた。すると突然怪物の奇声が鳴り響いた。

「KSHAAAAA!」

突然天井から、生物兵器が襲い掛かってきた。

「うわっ!!」

のび太は運よく直前で気づいたので、後ろへ跳んで避けることが出来た。すかさずのび太は『レミントンM870』を構えて、撃った。
ダアン!

「KSHAAAAA!」

生物兵器は悲鳴を挙げて、再び天井に張り付いた。

「今だ!一気に叩き込む!!」

と言うとのび太はバグから、『ベレッタM12』を取り出し、天井にいる生物兵器に撃ち放った。

タタタタタタタタタタタタタタタタタタ

「KSHAAAAA!」

生物兵器は大きな悲鳴を挙げて地面に落ちて、倒れ込んだ。

「ふう、危なかったな。もう少しで攻撃を喰らうところだった。・

・そういうばこいつ、スライドフィルターに描かれていた『キメラ』っていう生物兵器だな。まさか天井を移動して来るとは思わなかったな。・・取り敢えず天井に気をつけながらも、早く先へ進もう。」

と言うとのび太は先へ急いだ。道中に幾つかの『キメラ』が居たが、『レミントンM870』で怯ませた後に、『ベレッタM12』を撃ち込むことで、楽に倒せた。途中までの道程は一本道だったが、暫く進んだ所で右と正面の二つの道に分かれていた。のび太はまず、右の道を進んで行った。右の通路を進むと、すぐに突き当たり、更

に右に曲がる通路があった。のび太はその通路を右に曲がり、直進した。すると、何かのダイヤルとディスプレイが表示されていた。それにはこう表示されていた。

『パスコード出力端末

パスコードは既に入力され、ロックは解除されています。』

「………解除されているか。………じゃあ引き返して、もう一つあった道を進もう。」

と言うとのび太は今来た道を引き返し、先程通っていなかった道を進んだ。その道を進むと、すぐに自動扉が見えた。その自動扉には、

『動力室最深部

特別な場合を除き、研究主任以外の入室を禁ずる。』

と書いてあった。

のび太はその中に入って行った。

その中には、研究所の動力の中枢と思われる大きな機械があった。

「この機械の何処かに端末がある筈だ。探そう。」

と言うとのび太はその機械とその機械の周辺を探索した。扉がある所の反対側を探そうとした時、のび太はある死体を2つ見つけた。

「こいつはキメラか。例によって、一発で頭を吹っ飛ばされているな。………近くに端末の様な物がある。これ操作していたのか？」

と言うとのび太は近くにあった端末のディスプレイを見た。それにはこう書いてあった。

『研究所動力制御端末

エレベーターの動力は既に供給されています。

エレベーターの電圧を落としますか？』

それを見たのび太は呟く。

「………ここでエレベーターの電圧を供給する作業をしていたって事か？まあ電圧を落とす必要は無いから、この端末はこのままにしておいて大丈夫だろう。………そういえば休憩室があった通路の奥の方へ行ってなかったな。そっちへ行ってみよう。」

と言つとのび太は元来た道を引き返した。

その頃、聖奈は走って小実験室へ向かっていた。

やがて、小実験室に着いた。

ガコン

音を立てて小実験室の扉が開く。

「スネ夫さん。印刷用紙とCD-Rを発見しました。」

と、聖奈が言つと、スネ夫が言つ。

「ほ、本当!？」

と、スネ夫が言つと、聖奈はバッグからA4印刷用紙とCD-Rが入ったCDケースを取り出した。それを見たスネ夫が言つ。

「・・・CD-Rは何も記録されていないし、印刷用紙の枚数も充分。これで何とかかなりそうだ。」

と言つと聖奈は喋る。

「よ、良かった・・・。」

と言つと、真理奈が喋る。

「あれ、そういえばのび太君帰ってきてないね。」

真理奈がそう言つと、聖奈は驚いた。

「え!のび太さんまだ来てないんですか!？」

と言つと聖奈は扉の方を振り向き、言つ。

「じゃあ私、のび太さんの所へ行つてきます!」

と、言うか言わない内に小実験室を飛び出して行つた。聖奈はのび太が担当した範囲を探した。のび太が入っていた扉を見つけるのは、そう難しくは無かつた。聖奈は、その扉を開けた。扉の先は丁字路の様な通路だつた。

「・・・のび太さん、何処にいるの?・・・まずは左側に行つてみましょう。」

と言つと聖奈は丁字路の様な通路を左側に進んで行つた。

AREA 3『探索』（後書き）

どうも、あとがきルームです。今回のゲストは、真理奈とスネ夫です。

「んもおゝ私の出番がすくなあゝい！」

仕方ないだろ。待機中なんだから。

「それにしても、真理奈ちゃん変わったなあ。前まではオドオドしていて、頼りなかったのに。」

「へっへゝ。凄いでしょ。」

「・・・もしかしてのび太のおかげか？」

「う、・・・そうだよ！悪い！？」

「いや、別に悪くは無いけど。」

「あっそうそう、スネ夫君って、パソコンで何を色々やってたの？」

「ん、ああその事か。重要そうな、暗号化された文書を見つけたから、その暗号の解除をしているんだ。」

「それって難しいの？」

「そりゃあね。情報の世界は深いよ。」

「・・・そうなんだ。」

話は終わったか？

「作者さんは話を終わらせたかったの？」

「いやいやいやいやいや。そんな事ないって。只、出番が無さ過ぎる。なら、何か喋れよ。」

台詞が見つからない。

「やれやれ。で、結局何が言いたいの？」

誰か台詞をくれ！

「自分で考える。」

だよねえ。まあ安心したまえ。本編の方はバッチリだ。

「なら安心だね。」

しかし、そろそろあとがきルームが終わりな訳だが。

「じゃあここら辺で終了か。」

まあそういう事になるな。では、次回のあとがきルームまでさようなら。

次回からは何か台詞を考えておこう。まあ多分無理だが。

A R E A 4 『黒幕』 (前書き)

物凄く更新が遅れた。読者の皆様すみません。

AREA 4 『黒幕』

左側の通路を進むと、一際大きいエレベーターがあった。聖奈はエレベーターを呼び出した。すると、向こうから誰かが来た。その者を見た聖奈は言った。

「静香さん！・・・あれ、ジャイアンさんと、太郎君は？」

その言葉に静香は応える。

「ごめんなさい、探索の途中で別れてしまったの。」

それを聴いた聖奈が応える。

「そうなんです。実は今、私ものび太さんを探しているんですよ。この先にいるといいけど。」

と、聖奈が言うと、静香も言う。

「そうね。」

と言うと、暫くして、エレベーターの扉が開いた。聖奈と静香の2人はエレベーターに乗り込んだ。

ガシャアアアアン。

音を立ててエレベーターは降下した。少しして、エレベーターは停止し、扉が開いた。聖奈達は通路を進んだ。その通路は「」字の形で、暫く進むと、通路が左へ曲がっていたので、左へ曲がり、進んだ。少し進むと、隣に居た静香が聖奈に「コルトガバメントM1911 A1」の銃口を向けた。

「！？どういう事？訳が判らない。あなたは一体誰？」

聖奈の目の前には青い体の者が居た。そして青い体の者は聖奈に話し掛ける。

「やあ、確か君は・・・・・・・・・・緑川聖奈といったかな？僕の名は『ドラえもん』という。まあそれよりも、どうだった？僕が用意したアトラクションは？僕自身驚いてるよ。君達が此処まで生き延びるなんて・・・。」

と、ドラえもんが言うと、聖奈が言う。

「あ、あなただったんですか。あの生物兵器共の実戦データを録るために私達を利用してたのは！そして・・・静香さんも！」

それを聞いた静香は言う。

「ウフフフ・・・ごめんなさい。私は学校の生徒に成り済まして研究所の警備をする潜入工作員なの。このくらいの玩具おもちゃなら使い慣れたるのよ。」

その言葉を聞いた聖奈が言う。

「だから安雄さんがカメレオンの怪物に噛まれて、猛毒に冒された時、的確な血清が判ったという事なのね。」

「・・・・・・・・・・じゃあ出木杉君も同じって事？」

聖奈のその言葉を聞いたドラえもんは応える。

「出木杉に会ったのか。まああいつが動いてるという事は回収の方は済ませたんだな。折角此処まで生き延びた君には、事の全てを教えてやるう。この研究所はN・M・O・A・D・F・M・O・O・（ナムオアダフモ機関）、つまり『New Make Of Arms Development For Military Object Organization』、和訳すると、『軍事目的による新型兵器開発機関』が所有する極秘軍事研究施設で、『T・ウィルス』を拠点として運用していた所なんだよ。」

と、ドラえもんが言うと、聖奈は疑問を露にした。

「『T・ウィルス』・・・・・・・・？」

それを聞いたドラえもんは応える。

「正式には『Tyrant Virus』。生体の遺伝子を組み換える始祖ウィルスの特性を強化した物だ。あらゆる生物を突然変異させ、肉体や凶暴性を強化する生物兵器の主となるウィルスだよ。人間に投与すれば、死んだ細胞を復活させることが出来る。歩けない足を歩けるようにするのも可能だ。」

ドラえもんがそう言うと、静香が喋る。

「でも投与しても抗ウィルスを投与し続けないと細胞が突然変異を起こし、体が耐えられなくなり死に至る。そして死んだ人間は再び

甦り、突然変異の影響で皮膚の腐敗が進行。ゾンビになるのよ。」
それを聞いた聖奈は喋る。

「・・・彼等はそのウイルスに侵されて、あの様な姿になったというの・・・？」

と、聖奈が言くと、静香が言う。

「彼等の異常な生命力の源となっているのは、急速に働く新陳代謝機能。之により、常に膨大なエネルギー供給を必要とする為、一定の行動を取りつづけるのよ。」

と、静香が言くと、聖奈が訊く。

「つまり・・・？」

その聖奈の言葉に静香は応える。

「喰べる事よ。」

と、静香が言くとドラえもんが喋る。

「ハハハハ、怖いだろ。まあお前含め、ススキケ原に残っていた者の中で、生存者が結構いたのは計算違いだったけどな。まあ直に奴等も死ぬ。一人は確実と言ってもいいけどな。」

と、ドラえもんが言くと聖奈は呟く。

「え・・・？」

聖奈がそう言くと静香が言う。

「剛田武はこの研究所の何処かに閉じ込めておいたのよ。」

それを聞いた聖奈は驚いた。

「ジャイアンさんを！？」

その言葉を聞いた静香は冷静に喋る。

「可哀相に・・・時間が経てば八つ裂きにされるでしょうねえ。」

と、静香が言くと、聖奈は悲しそうな表情をして、呟いた。

「そ、そんな・・・。」

その様子を見た静香は喋る。

「そんな悲しい顔をしないでちょうだい。直に貴女も後を追うことになるわ。大丈夫、死ぬ時はそんなに苦しくないから。」

と言くと静香は『コルトガバメントM1911A1』の撃鉄を起こ

した。

その時、曲がり角の陰から誰かが出て来た。

「そこまでだ!!」

そう言った者は、手に持っていた『ベレッタM92』を撃った。

放たれた『9mmパラベラム弾』は見事に静香の持っていた『コルトガバメントM1911A1』のグリップに命中し、弾き飛ばした。聖奈は徐に後ろを振り返った。すると、その者の名を叫んだ。

「のび太さん!!!」

と言うとドラえもんも呟く。

「………のび太君か。」

と、ドラえもんが呟いた。そしてのび太が大きな声で喋る。

「今までの話は全て聴かせてもらった。悪いけどこれ以上誰も死なせない!」

と、のび太が言うのと、静香は喋る。

「ふふっ、威勢のいいこと。でも威勢だけじゃ何にも出来ないのよ。」

「

と言うと静香は顔を手で覆い隠し、数秒後顔を見せた。それにのび太は驚いた。

「!!!!それは!!!?」

静香の顔は、真ん中で真っ二つに割れており、中から銃が出ているのが見えていた。銃のサイズはハンドガンと同じ位だった。すると、ドラえもんが喋った。

「おいおい、『アフイマーサー』。もう正体を現すのかい?」

ドラえもんがそう言うのと静香は言う。

「ドラ様、仕方ありませんわ。」

静香は冷静に言った。すると、のび太がドラえもんに訊いた。

「ど、どういう事なんだ!!」

と言うとドラえもんは応える。

「まあいい、教えてやろう。君達が静香だと思っていた者は、正式名称を、『潜入工作及び特殊工作用戦闘型アンドロイド』といい、

『Arms For Infiltration Maneuver And Special Engineer Android』
略して、A・F・I・M・A・S・E・A・（アフィマーサー）だ。」

ドラえもんが説明すると、続いてアフィマーサーが喋る。

「フルスペックで稼動すれば、貴方の持っている武器、そして、貴方の特技の一つ、『精密且つ素早い射撃能力』を考慮に入れても、こちらが遥かに勝っているわ。それでも戦うというの？」

と、アフィマーサーが言う、のび太が言う。

「言っただろ！！これ以上誰も死なせない！僕達は生きるために戦っているんだ！例え勝率が低かろうとも戦って、そして勝ってみせる！！」

と言うとのび太は『ベレッタM92』を構えた。

タン！タン！タン！

のび太はハンドガンを撃った。しかし、全てアフィマーサーの腕に弾かれた。そして、アフィマーサーは、2つに分かれた頭部に搭載されたハンドガン状の銃をのび太に撃った。

タン！タン！タン！タン！タン！タン！

「うわっ！！」

のび太は何とか9mmパラベラム弾を避けた。

「あら、中々やるじゃないの。じゃあこれはどうかしら？」

と、アフィマーサーが言うと、アフィマーサーの右手が収納され、代わりにショットガンの様な銃口が展開された。

ダァン！

アフィマーサーはショットガンを発砲した。

「ぐっ！」

のび太は散弾を避けきれず、弾丸が数発掠ってしまった。

「命中精度に長ける散弾銃を避けるとは中々やるわね。やはり数々のパーフェクションB・C・Wを倒すだけのことはあるわ。」

と、アフィマーサーが言うとのび太は訊く。

「『パーフェクション B・C・W』？何だよそれは？」

すると、アフィマーサーが言う。

「何れ判るわ。まあ貴方が戦ってきた生物兵器の事ね。」

と、アフィマーサーが言うと、アフィマーサーは急接近して来た。

シャツ！

ガリッ！

「……これは……？？」

アフィマーサーの両手を見たのび太が驚いた。アフィマーサーの両手は、いつの間にかナイフの様な鋭利な刃物に変わっていた。

「貴方には、遠距離からの射撃より、近接戦闘の方が効きそうだからね。悪いけど、近接戦闘で行かせてもらっわ。」

と言いながらアフィマーサーはのび太に切り掛かる。

シャツ！シャツ！

ナイフが空を切る音が聞こえる。のび太は何とかナイフの斬撃を回避していた。すると、ナイフが壁を切り付けた。

「壁が欠けた！？こんなもん喰らったただじゃ済まない……！」

と、のび太が驚く。しかし、それを気にせずに、アフィマーサーは少しも休まずに、ナイフでのび太を切りつけようとする。のび太はナイフの斬撃を巧く回避するが、やはり疲労が出て来て、体制を崩し、ナイフの斬撃の軌道に入ってしまった。

「……しまった……！」

ここままの軌道で斬撃が進んだら、のび太の首が切れる。ところが、のび太はハンドガンを構えて、ナイフを狙撃した。

タン！

カキイイイイン……！！

ナイフは9mmパラベラム弾の直撃によって、軌道をずらされた。

「……これは……！」

アフィマーサーが驚き、一步退いた。のび太はその隙を見逃さなかった。

「……今だ……！」

と言うとのび太はバッグから『コルトM4カービン』を取り出し、連射した。

タタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタ！

「ぬうつ！」

と言うとアフィマーサーはのび太から距離を取った。のび太の方は、『コルトM4カービン』の弾薬が尽きたので、リロードをしている最中だった。

「……………どうやら貴方を見縊^{みくび}っていたようね。最大スペックで作動するわ。」

するとアフィマーサーの左手にあったナイフは収納され、代わりに、何かの銃口が現れた。

（今度は遠距離戦か……………？）

と、のび太が考えていると、銃口から銃弾が発砲された。ガガアン！

（……………これはマグナムか。ショットガンじゃないから避けるのは割と楽だな。しかし、これで終わりでは無さそうだな。）

と、思考を張り巡らしていると、アフィマーサーがナイフを展開している右手で斬り掛かってきた。

「わっ！」

のび太は咄嗟に避けようとしたが、左の二の腕を斬られてしまった。「くっ、遠距離と近距離を使い分けるって事か……………」

とのび太が言うと、アフィマーサーが喋る。

「ふふ、その通りよ。悔しいけれど私の照準性能は貴方より劣っているわ。しかし、兵器の使い方では私の方が遥かに上回っているわ。銃だけでは勝てないのよ。」

と言うとアフィマーサーが接近してくる。するとのび太は考えた。（こんなアンドロイドとともに戦っていても、はつきり言って勝ち目は無い。どうにか奴の機能を停止出来ればいいんだけど、あの兵装は厄介だ。近距離か遠距離かどちらかに限定できれば勝ち目もあるんだけど……………ん？待てよ、アンド

ロイドは人間とは目の構造が違う筈。確か人間の眼球は光を吸収して物が見えるんだったな。アンドロイドはおそらく人間と同じライトセンサー（光感知）かサーモセンサー（熱感知）だな。……だとしたら、”アレ”が使えるな。一度試してみるか。）

そう考えるとのび太は、接近してきたアフィマーサーの斬撃と銃撃を避けて、アフィマーサーと距離を取った。そしてバッグから”何か”を取り出そうとしていた。

「今更何をしようと無駄よ。貴方は私に殺されるのよ。」

と、アフィマーサーが言ったが、のび太は気にせずにバッグから”何か”を取り出した。その”何か”とは前に聖奈が全員に配った火炎瓶だった。そしてのび太はそれをアフィマーサーの頭に向かって投げ付けた。

「……ぬう！！火炎瓶か！！……でもまさかこんな物で私を倒せると思っているんじゃないんでしょうね？」

とアフィマーサーがのび太に言う。しかしのび太は既にアフィマーサーのすぐ近くまで接近していた。そしてのび太はアフィマーサー右手をグレネードランチャーで吹き飛ばした。

「ぐう！！……これで右手に格納されていたショットガンとナイフは使えないわね。でもまだ左手があるのよ。」

と、アフィマーサーが言うとのび太は言う。

「だからどうしたよ！僕が火炎瓶を投げた理由をまだ気づかないのか？」

のび太の言葉にアフィマーサーは驚き、そして気が付いた。

「何？……！！火炎の熱でサーモセンサーが役に立たない！！」

アフィマーサーの人工眼球内部にある熱反応の機構が高熱により一時的な麻痺を起こし、更に、高熱により光が曲がり、ライトセンサーも元の機能を果たしてはいなかった。アフィマーサーが事態を把

握すると、のび太がアフィマーサーに喋る。

「その通りさ！僕の投げた火炎瓶が高熱を放ち、お前の視力を奪ったんだ！！」

のび太のその言葉を聞くとアフィマーサーが呟く。

「何・・・だと！！」

そしてのび太はグレネードランチャーに榴弾を装填し、アフィマーサーに撃った。

5発程撃つと、アフィマーサーは完全に機能を停止した。

「・・・ふう、なんとか勝った。」

A R E A 4 『黒幕』(後書き)

今回の『あとがきルーム』はお休みです。

b y 『M O N D O E R A』

AREA 5 『真相』

「……………こいつは面白い。想定した数値を遥かに上回っている。」

と、ドラえもんが薄ら笑いを浮かべながら言った。

「何が言いたいんだ!？」

のび太がドラえもんに対し、凄い剣幕で叫んだ。

「まさか君が……………いや、君じゃなくても、あの『アフイマ―サー』を倒した事が凄いと思ってるね。」

と、ドラえもんのび太の言葉に応えた。ドラえもんは続いて喋る。「さあ、着いて来たまえ。いいものを見せてあげるよ。」

と言うとドラえもんは奥の扉を開けた。のび太と聖奈もドラえもんが続いて部屋に入った。部屋の中は縦に長い長方形型をしており、大量の小さいカプセルと、それに繋がっているコードがあった。入ってすぐの場所、部屋の中央に一際大きなカプセルがあった。

「……………これは……………?」

のび太がドラえもんに訊くと、ドラえもんは喋る。

「中を覗いてみたまえ。」

ドラえもんがそう言うと、のび太はカプセルの中を覗いた。カプセルの中には左胸に露出した心臓があり、右手は人間と変わらないが、左手には巨大な爪がある人型の巨大な怪物がいた。

「……………!!何だこいつは!!!!」

思わずのび太は叫んだ。それに対し、ドラえもんは冷静に言った。

「『CODE:T-002 TYRANT』だ。映像資料室でスライドを見たのなら知っているだろう?」

ドラえもんは続いて喋る。

「悲しくなってくるよ。こんな物が最高傑作とはね。」

と言うとのび太はドラえもんに訊いた。

「どういう事なんだ?」

のび太の問いにドラえもんは答える。

「之を最高傑作と言ったのは『アンブレラ』さ。」

聞き慣れない単語にのび太は疑問を露にする。

「『アンブレラ』?」

のび太のその問いにドラえもんは答える。

「外国の製薬会社だ。・・・表向きはね。だが裏ではT・ウィルスによる生物実験を行っていたんだ。我々ナムオアダフモ機関はその『アンブレラ』からT・ウィルスを奪取したんだ。」

続いてドラえもんは笑みを浮かべながら喋る。

「本当に悲しくなってくるよ。T・ウィルスを使っているのにこんな物を最高傑作とするなんてさあ。」

それを聴いたのび太はすぐさまドラえもんに訊く。

「お前達はそれ以上の物を造ったのか!？」

のび太のその言葉にドラえもんは答える。

「ああそうだ。『バイオガラス』と『フロースヴィニルト』はナムオアダフモ機関オリジナルのB・C・Wだ。どちらも性能は『タイルント』よりも上だ。」

また聞き慣れない単語が出て来た為、のび太はドラえもんに訊く。

「B・C・W? 何だそれは?」

ドラえもんはその問いに答える。

「化学生物兵器の事だ。Bio Chemical Weapon.
略してB・C・Wだ。」

それを聴いたのび太はすぐにドラえもんに訊いた。

「何故こんな物を開発するんだ!？」

と言うとドラえもんは応える。

「おいおいさつき言っただろう? 我々はナムオアダフモ機関、軍事目的による新型兵器開発機関だと。つまりは軍事目的だ。」

と、ドラえもんが言った。

「くっ!」

のび太は反論出来ない様子だった。ドラえもんは続いて喋る。

「まだまだこれで終わりじゃないよ。本社の方にはまだ、約3体の新型のB・C・Wの情報が保管されているからね。」

驚愕の事実のにび太は驚く。

「な、何っ!!!」

驚いたのにび太を見たドラえもんは冷静に喋る。

「まあでも、君達はそれを拝むことは出来そうに無いけどね。」

ドラえもんが意味深な言葉を放ったので、のにび太がドラえもんに訊く。

「どういう事だ!!」

のにび太が言ったその言葉にドラえもんは答える。

「この研究所の地下には『中性子爆弾』が仕掛けられているんだよ。」

と言うのにび太は呟く。

「『中性子爆弾』?」

中性子爆弾をよく知らないのにび太はドラえもんに訊く。ドラえもんはのにび太のその言葉に応え、中性子爆弾の説明をする。

「核爆弾の一種だよ。『中性子爆弾』は小型の限定核で、爆発半径は狭いものの、膨大な放射線を周囲に散布し、建物や施設には何の影響も与えず、生物のみを死滅させる。これによりススキケ原の生物は全て死滅するだろうね。」

それを聞いたのにび太は叫ぶ。

「な、何でそんな事が出来る!お前達の兵器だって、社員だって消えるんだぞ!!それに、そんな事をしたら政府が黙ってない!大ニユースになるぞ!!」

と、のにび太が叫ぶとドラえもんは冷静に応える。

「B・C・Wの戦闘データは既に録ってあるさ。それに社員だって末端社員さ。特に重要じゃない。そして、我々は既に政府と話を付けている。原子力発電所での事故による放射能漏れ。市民やメディアにはそう伝えておけと言ってある。」

と言うのにび太は叫ぶ。

「お前達は正気なのか!!」

のび太は握り拳を前に出して、感情を露にした。

「ククク、僕は何時だって正気だよ。」

ドラえもんは笑みを浮かべながら言った。そして、のび太がドラえもんに訊く。

「そうだ！お前に訊きたい事がある！スネ吉もお前達の中樞の人間なのか？」

と言うと、ドラえもんは驚いた様な表情をして言う。

「な、何だと!!スネ吉にあつたのか!？」

と、ドラえもんが言うと、予想外の反応に疑問を持ちながらも、のび太が応える。

「……?そうだけど。」

と、のび太が言うと、ドラえもんは少々厳しい表情をして言う。

「チツ、相変わらず遊び癖のある奴だ。」

と言うとのび太がドラえもんに訊く。

「どういう事なんだ？」

のび太のその言葉にドラえもんは応える。

「スネ吉は『ススキケ原T・ウィルス散布及びB・C・W・戦闘デ
ータ算出実験』には参加していない筈なんだ。」

と、ドラえもんが言った。すると、のび太が言う。

「……だけどスネ吉は僕達を始末するのが仕事だと言っていたけど。」

のび太がそう言うと、ドラえもんは応える。

「スネ吉の事だからそれは嘘だろう。恐らくお前達の戦闘力を直に見たかったんだと思うが。」

と言うと、のび太は黙ってしまった。恐らく、何も訊く事が無くなつたんだろう。のび太が黙っているのを確認すると、ドラえもんは続けて喋る。

「だけど、お喋りは此処までといこうか。廃棄処分する手間が省けたよ。」

と言うとドラえもんは巨大なカプセルの傍にあるコンピューターを操作した。そしてドラえもんは言う。

「今、タイラントを起動させた。僕は今から中性子爆弾の起動をしてくる。……存分に戦ってくれよ。」

と言うとドラえもんは部屋から出た。

暫くすると、巨大なカプセルから培養液の排出を行う音が聞こえた。

「……………いよいよか。」

と、のび太が言うと、聖奈が喋る。

「のび太さん。私、怖い。」

と言うとのび太は聖奈の方を振り向き、喋る。

「あれ、聖奈さん。さっき喋ってなかったみたいだけど。」

と言うと聖奈が応える。

「ごめんなさい。あの時はあまりの驚きに何も喋れなかったの。」

聖奈がそう喋ると、のび太が言う。

「そうか。それよりあの巨大なカプセルから距離を取ろう。聖奈さんは小型のカプセルの陰に隠れていて。」

と言うと聖奈は反論する。

「どうしてですか？私も戦いますよ。」

聖奈がそう言うと、のび太は応える。

「聖奈さんには援護射撃をしてもらいたいんだよ。」

と言うと聖奈は承諾した。

「……解りました。」

と言うとのび太と聖奈は巨大なカプセルから距離を取ろうとした。すると、

ドン！

巨大なカプセルから轟音が響いて、巨大なカプセルの一部分が凸状に変形した。

「……これは、中からカプセルを破壊しようとしているのか……!」
ドン! ドン! ドン!

タイラントは引っこ無しにカプセルを叩く。カプセルは今にも壊れそうだ。

「……まずい！今すぐあのカプセルから離れるんだ……！」

と、のび太が言った直後、カプセルが破壊されて、その破片がのび太達の方に飛んできた。

「くそっ！」

のび太はハンドガンを構えて破片を撃った。

タン！タン！タン！タン！タン！

キン！キン！キン！キン！キン！

撃った弾丸は全て破片に命中し、破片は軌道が逸れて、のび太達には当たらなかった。

[illegible]

いきなりタイラントが両腕を広げながら、巨大な唸り声を挙げた。

「聖奈さん！早く放れるんだ！！」

のび太がそう言っと、聖奈は応えた。

「……わ、解ったわ！」

と言うと聖奈は遠くの小型カプセルの陰に隠れた。

「やっとお出ましか！さあ来いよ！！」

と言うとのび太はタイラントに銃口を向けた。そして6発ほど撃った。6発の9mmパラベラム弾はタイラントに直撃したが、あまり効いていないようだった。

[illegible]

するとタイラントは大きな唸り声を挙げながら、のび太に向かってきた。そして、左手の爪をのび太に振り下ろした。しかし、動きが緩慢であり、のび太に楽に避けられた。のび太は続いてハンドガンを撃ち続ける。しかし、3発程撃つと、弾切れを起こしたので、バツグから、ハンドガンの予備カートリッジを取り出し、装填した。タイラントはリロードの隙を見逃さず、のび太に爪を振り下ろそう

「聖奈さん、早く行こう！ドラえもんが中性子爆弾を起動させる前に脱出するんだ！」

と言うとのび太と聖奈は『大実験室』から出た。そして、B2FとB4Fを繋ぐ大型エレベーターに向かった。大型エレベーターに乗り込む直前にアナウンスがなった。

「WARNING！WARNING！WARNING！」

緊急用爆破装置が作動しました。繰り返します、緊急用爆破装置が作動しました。解除は不可能です。各員は1Fにある『緊急用脱出用車輛直通エレベーター』よりB5Fへ行き、『緊急用脱出用車輛』に起動コードを転送し、研究所から退避して下さい。」

ビー！ビー！ビー！ビー！

そのアナウンスが終わると、続いて警報が鳴り響いた。すると聖奈が驚く。

「今のアナウンスは！？」

聖奈のその言葉を聴いたのび太は叫ぶ。

「きっとドラえもんが中性子爆弾を起動させたんだ！くそつ、こんな早かったとは！急がないと！！」

と言うとのび太達はエレベーターに乗り込んだ。そしてエレベーターは動き出す。

暫くしてエレベーターがB2Fに到着し、エレベーターの扉が開いた。そしてのび太達は、小実験室に向かって進んだ。しかし、丁字路の所に見覚えのある子供が居たので立ち止まった。

「太郎！無事だったのか！ジャイアンは何処か判るか？」

と、のび太が太郎に訊くと、太郎は応える。

「この場所の反対側にあるエレベーターを降った先の扉に閉じ込められているんだ。」

太郎のその言葉を聴いたのび太は喋る。

「解った！僕はジャイアンを助けに行く！太郎は聖奈さんと一緒に小実験室に行くんだ！聖奈さんはスネ夫に『緊急用脱出用車輛』を

起動させるように言ってくれ!!」

それを聴いた聖奈は応える。

「解ったわ!のび太さんも気をつけてね!!」

と、聖奈が言った。

「KSHAAAAAAAAA!!」

いきなり上方からキメラの唸り声がした。のび太達は武器を構えていなかったたので、キメラを迎え撃つ事は出来なかった。キメラは今にものび太に襲い掛かって来そうな雰囲気だ。そしてその音は唐突に来た。

ドカアアアアン!!

「KSHAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!」

大きな悲鳴を挙げてキメラは床に倒れた。キメラは何かの爆発物で一発で倒されたようだ。

よく見ると、エレベーターがあつた所とは反対側の曲がり角に、ロケットランチャーを担いだ一つの人影があつた。そして、その人影はのび太達に話し掛ける。

「よお、危ないところだったじゃないか。」

そう言つた人物は、白衣を着た20代程の女性で、胸ポケットには名札のプレートがあり、

『副主任

牧野 燐』

と書かれていた。その人物を見たのび太はその人物に問い掛ける。

「・・・あなたは?」

のび太がそう訊くと、その人物は応える。

「あたしの名は『牧野燐』。この服を見て解る通り、此処の研究員の副主任にして、『ナムオアダフモ機関』の社員よ。」

「え!!」

のび太達は勿論驚いた。しかし、のび太は落ち着きのある口調で燐

に喋った。

「取り敢えず詳しい話は落ち着いてから訊くとして、まずはここから脱出しましょう。僕の名は『野比のび太』といます。そしてこちらの女の子は『緑川聖奈』という名でこっちの小さい子は『山田太郎』という名前です。」

のび太は一通り自分達の名前を言うと燐が喋る。

「ふーん。中々臨機応変能力に長けた子供達じゃないか。解った。お前達に着いて行く事にするよ。」

と、燐が言くと、のび太と聖奈と太郎と燐はすぐ傍の自動扉を通って行った。のび太は通路を直進し、聖奈と太郎は小実験室へ向かう為、左へ曲がった。のび太が別ルートを進む事に疑問を感じた燐はのび太に問い掛けた。

「おい、のび太。何でお前だけ別ルートを進むんだ？」

燐のその言葉を聴いたのび太は、燐の怖い感じの口調に少々ビビりながらも応える。

「それはですね、反対側のエレベーターを降った先に友達が監禁されているからです。」

と、のび太が言くと、燐は呟く。

「・・・この先のエレベーターを降った先？・・・それってもしかして監禁室の事か？」

燐から思いがけない言葉を聴いたのび太は燐に訊く。

「知っているんですか！？」

すると燐が喋る。

「まあな、あたしも此処の研究員だから知っているわ。それに監禁室にはパズル式の電子ロックが掛かっている。私が居ればすぐに解除出来るわ。」

燐のその言葉を聴いたのび太は嬉しそうな表情をして言う。

「そうなんですか！宜しくお願いします！」

その言葉を聴いた燐は喋る。

「ああ勿論よ。」

燐がそう言つと、のび太と燐は監禁室へ向かった。

AREA 5 『真相』（後書き）

やあ『あとがきルーム』の時間だ。今回のゲストは聖奈と太郎です。

「こんにちは。」

「僕はこのコーナーに出るのは初めてだね。」

うむそうだな。

「太郎君も遂にこのコーナーに出るようになったのね。」

「でも緊張するなあ。」

「大丈夫よ。あまり難しい事はしないから。」

「そうだな。する事といえば雑談だけだな。・・・それはそうと、太郎はどういう経緯いきさつでのび太達と合流したんだ？」

「えっと、まず武兄ちゃんが扉に押し込められて、その直後に殴られたんだ。そして、何分か経って目を覚ました後、エレベーターを通って、のび兄ちゃん達と合流したんだ。」

「・・・苦労したんですね・・・。」

「ただど何とか合流出来て良かったな。」

「そうですね。」

太郎の話を聞いた所で今回の『あとがきルーム』は終了だ。

「それではさようなら。」

AREA 6 『脱出』

エレベーターへの道は一本道ですぐに辿り着いた。のび太と燐はエレベーターを呼び出して、B3Fへ向かった。

やがてエレベーターはB3Fに到着し、扉が開いた。エレベーターを出ると、一本の廊下が延びており、真っ直ぐ行った所に扉があり、真上のプレートには『監禁室』と書いてあった。そして、左側の真ん中には自動扉があつて、真上のプレートに『武器庫』とあった。更に右側の真ん中には、厳かな観音開きの扉があり、真上のプレートには『培養実験室』と書かれてあった。

「監禁室は真っ直ぐ行った扉の中だ。右の扉は培養実験室、左の扉は武器庫だ。後で寄ろう。まあまずは仲間の救出が先だけどね。」と、燐が言うと2人は奥の扉に向かった。そして、扉を開け、中に入った。扉の中は並んだ3つの鋼鉄の扉が在る他は、何も無かった。のび太は手前の扉から順番に扉の中を調べた。手前の2つは何も無かったが、一番奥の扉を調べた時にジャイアンを見つけた。

「ジャイアン!!」

のび太がそう叫ぶと、ジャイアンは扉の外なのび太の存在に気付いた。

「の、のび太じゃねえか!」

ジャイアンはのび太が居た事に喜んだ。そしてジャイアンは続ける。「……………のび太、悪い捕まっちゃった。」

ジャイアンはすぐにのび太に謝った。それにのび太は応える。

「大丈夫だよ、ジャイアン。助け合つのが仲間だ。それより早くこの電子ロックを解除しないとね。」

と、のび太が言うと、ジャイアンは言う。

「助かるぜのび太。……………だけど後ろの檻にいる怪物共が今にも出て来そうだ。出来るだけ早くしてくれ!」

と、ジャイアンが言うと、のび太の後ろに居た燐が、

「あたしの出番ね。」

と、言いながら扉の横にあるパズル式の電子ロックを操作した。解除するまでには、約5秒程しか掛からなかった。

やがて電子ロックが外れる電子音がした。するとのび太が扉を開けた。

「ジャイアン早く！」

と言うとジャイアンは素早く扉の外に出た。

「心の友よ~~~~~!!!」

と、ジャイアンは叫びながらのび太に抱き着いた。やがてジャイアンは離れてのび太に言う。

「ありがとなのび太。この恩は忘れないぜ。」

と、ジャイアンが言うと、ジャイアンはのび太の傍にいる燐に気が付いた。

「・・・ん？そこにいる白衣の人は誰だ？」

と、ジャイアンがのび太に訊くと、のび太は応える。

「ああ、この人は『牧野燐』という人で、ここの研究員で、ナムオアダフモ機関の社員だよ。」

と、のび太が言うと、ジャイアンは呟く。

「・・・ナムオアダフモ機関？何だそれは？」

ジャイアンがのび太にそう問い掛けた。するとのび太は応える。

「まあ詳しくは落ちて着いてから話すよ。まずはここから脱出しよう。」

と、のび太が言うと、のび太とジャイアンと燐の3人は監禁室から出た。すると、燐が2人に喋る。

「のび太、ジャイアン。右の部屋を覗いてみる。」

するとのび太とジャイアンは言われるままに『武器庫』と書かれた右側の扉を開けた。

中は、あらゆる種類の銃火器と弾薬で溢れていた。

「こ、ここは？」

と、のび太が呟くと、燐が喋る。

「ここは、この研究所にある銃火器を保管しておく場所だ。この先、何があるか判らないから、武器を調達しておけよ。」

と、燐が喋ると、3人は各々のバッグにあらゆる種類の銃火器と弾薬を入れた。『武器庫』の中の物を全部入れると、3人は『武器庫』から出て、『小実験室』へ向かった。

その頃、小実験室では・・・
ガコン！

音を立てて、観音開きの扉が開いた。その音に気付いたスネ夫が振り向いて喋る。

「あつ、聖奈さん。のび太は見つかった？」

スネ夫がそう言ったが、聖奈はスネ夫の言葉を無視し、すぐさま喋る。

「それより、脱出用の車輛の起動コードは用意できましたか？」

と、聖奈が喋ると、スネ夫は応える。

「・・・まだ少し掛かりそうだ。だけど多分間に合うよ。・・・
それで、のび太は見つかったの？」

スネ夫が聖奈にそう訊くと、聖奈は応える。

「ええ、のび太さんは諸事情で、別の所へ行っています。」

と、聖奈が言った。

それから、少しして、『小実験室』の扉が勢いよく開いた。扉を開けて中に入ってきたのは、のび太とジャイアンと燐だった。

「のび太！それにジャイアンも無事だったのか！良かった〜！」

と、スネ夫が喋る。そして、後ろにいる燐にも気が付いた。

「あれ？後ろにいる人は誰だい？」

と、スネ夫が言くと、のび太は応える。

「こちらは、牧野燐さんだ。詳しい事は、落ち着いてから話すとして、まずはここから脱出しよう。スネ夫、『起動コード』の転送は

？」

そののび太の言葉にスネ夫は応える。

「……気になる資料の解読や、資料の印刷をやっていたから、まだCD-Rに『起動コード』を焼いている最中だ。」

「……そうか。でも全員がここにいる必要は無いな。皆、荷物を整理したら、1階のエレベーターから、脱出用の車輦に移動しよう。」

「

と、のび太が言うと、のび太、スネ夫、ジャイアン、燐の4人以外、即ち、聖奈、真理奈、太郎、の3人は先に地下5階の列車の方に向かった。

暫くすると、CD-Rへの書き込みが終わった。

「よし、書き込みが終ったよ。」

と、スネ夫が言うと、ジャイアンが喋る。

「よっしゃ！それじゃあこんな所は、さっさとおさらばしようぜ！」
と言うと、4人は荷物を全て持ち、1階へ向かった。

1階へ向かう途中、1階と地下1階を結ぶ梯子に差し掛かった時、何かの声が聞こえた。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

「ウワアアアアアアアア。」

「ウウウウウウウウウウウウウウウウウ。」

「ウアアアウウ。」

「アアアアアアアア。」

「ウオオオオオオオウウ。」

「ウアアアアアウウウウウ。」

その瞬間、梯子の反対側にある扉から一斉にゾンビがなだれ込んできた。

「わあ！こんな所までゾンビが！！」

と、スネ夫が叫ぶ。すると、燐が話し掛ける。

「おい、ガキ共。アンタ等は先に行け！あたしがこのゾンビ共を一掃する！！」

と、燐が言っていると、燐は懷から破片散弾榴弾（ボール爆弾）を取り出すと、扉に固まっているゾンビ目掛けて投げた。すると、破片散弾榴弾から、小型の爆弾が大量に拡散し、それらが一斉に爆発した。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

「ウワアアアアアアアア。」

「ウウウウウウウウウウウウウウウウウ。」

「ウアアアウウ。」

「アアアアアアアア。」

「ウオオオオオオオオオオウウ。」

「ウアアアアアアウウウウウウ。」

唸り声を挙げて、ゾンビ共は倒れた。燐は、ゾンビが動かなくなっただことを確認すると、梯子を昇ろうとして、振り向いた。そこにはスネ夫とジャイアンは既に昇っていたが、のび太がまだ昇っていなかった。

「何だ、のび太まだ昇っていなかったのか。早く昇りなよ。」

と、燐が言っていると、のび太が喋る。

「燐さん。さっきの爆弾は破片散弾榴弾ですよね。さっき助けてくれた時も、ロケットランチャーを持っていましたが、何でこんな武器を持っているんですか？」

と、のび太が喋ると、燐が応える。

「まあ追い追い話すけれど、ナムオアダフモ機関がそんな兵器を普通に所持している組織って事さ。」

と、燐が言った。そしてのび太と燐は梯子を昇り、『緊急用脱出用車輛直通エレベーター』を使い、地下5階まで降りた。

やがて、地下5階に到着すると、エレベーターの扉が開いた。のび太達は、エレベーターを降りると、廊下を道なりに進んだ。

100m程進むと、大きな観音開きの扉があり、のび太はその扉を開いた。その扉の先はプラットフォームのようであり、奥には列車があった。そして、列車の入口にはスネ夫が居た。

「のび太、燐さん、もう『起動コード』は転送した！早く乗り込んでくれ！」

と、スネ夫が言うと、のび太達は列車に乗り込もうとする。しかし、いきなりアナウンスが鳴った。

「爆破5分前です。各員は速やかに退避して下さい。」

と、アナウンスが言うと、のび太が呟く。

「後、5分で爆発か。早く脱出しないと。」

と、のび太が呟くと、燐とのび太は列車に乗り込む。しかしその時轟音が鳴り響いた。

ドギヤギヤギヤギヤギヤギヤギヤギヤギヤギヤギヤ！！

轟音と共に瓦礫が降ってきた。その中に、あの『タイラント』もいた。

「あいつ！！まだ生きていたのか！！！」

と、のび太が驚いていると、タイラントは真っ直ぐのび太に向かってきた。そのスピードはさっきとは比べ物にならない速さだった。

「わっ！！！」

のび太は何とか避けたが、列車から離れてしまった。

「ちい！野郎！！！」

と、燐が叫ぶと、燐はロケットランチャーをタイラントに向けて引き金を引こうとした、しかし、

「GOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO！！！」

タイラントが唸り声を挙げて、燐に攻撃した。燐はすかさず列車の車内に逃げて回避した。タイラントは自分の攻撃が届かない事を理解すると、再びのび太を攻撃しに行った。すると、燐がのび太に喋る。

「のび太！あたしは列車の上に登ってこのデカブツにロケット弾をぶち込む！それまで何とか凌いでくれよ！！」
と言うと隣は、車輛の間から列車の上に登る為に車輛の連結部に向かった。

A R E A 6 『脱出』（後書き）

今はかなりシリアスなんで、ゲストが取れない。そういう訳で今回の『あとがきルーム』は休ませて戴きます。

AREA 7 『決着』

「GOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO!!」

タイラントは唸り声を挙げてのび太に向かってきた。のび太はそれを横に避ける。そして、タイラントに『コルトパイソン』を構える。そして、のび太は引き金を引いた。

カチッ

『コルトパイソン』からは空撃ちの音がした。

「しまった！弾切れか！」

すると、のび太は急いで弾薬をリロードする。

『タイラント』は、その隙を逃さず、のび太に走って接近し、爪を振り下ろした。

のび太は何とか避けた。

「タイラントの攻撃は集中していれば避けられるけれど、リロードしていたら間違いなく攻撃を喰らう。リロード無しで凌ぐしかない！」

と言うとのび太はタイラントの攻撃を避けながら、銃に装填されている弾薬の数を数えた。

『ベレッタM92』は6発、

『レミントンM870』は3発、

『コルトM79』は0発、

『コルトM4カービン』は30発、

『ベレッタM12』は18発、

『コルトパイソン』は0発、

『スタームルガーレッドホーク』は4発弾倉に残っていた。

のび太は『スタームルガーレッドホーク』を構えると、『タイラント』に向けて撃った。

4発全てタイラントに命中したが、タイラントの勢いが止まる事は

[illegible]

弾倉の中に入っている6発の弾薬を全て撃ち込んだが、タイラントは怯まずに向かって来る。

[Gooooooooooooo
Oooooooooooooo]

のび太はそれをぎりぎりで避け、『レミントンM870[□]』でタイラントを撃った。流石のタイラントでも12ゲージショットシエルの散弾を全て受けた為、少し怯んだ。その隙をのび太は見逃さなかった。

「そこだ!!!」

『コルトM4カービン』と『ベレッタM12』から幾つもの5.56mm×45弾と9mmパラベラム弾が連射され、タイラントを後退させた。しかし、5.56mm×45弾と9mmパラベラム弾を全部合わせても、48発しかないので、すぐに弾切れを起こした。のび太はすかさず右に抜けてそのまま走った。勿論タイラントも追ってくる。ふとのび太は車輛の上を見た。すると、車輛の上に4連装ロケットランチャー（M202A1）を構えた燐が立っていた。のび太はそのまま走っていた。やがて壁が近づいてくると、のび太は瞬時に左に曲がった。タイラントは反応が遅れて、のび太との距

と、ジャイアンが言う。

「いきなり発進したときは吃驚したよ。」

と、スネ夫が言う。

「でも、こうして脱出出来てよかったです。」

と、聖奈が言う。

「もうあんな所はこりこりだよ。」

と太郎が言った。やがてのび太が言う。

「・・・じゃあ燐さん。この事件等について詳しい話を話してくださいませんか？」

と、のび太が言うと、燐は言う。

「ああ、解っている。・・・まずはあたし達が入社した時の事から話すよ。」

と言うと燐は全員に喋り始めた。

A R E A 7 『決着』（後書き）

今回は『あとがきルーム』は無しって方向で。

AREA 8 『実態』 (前書き)

今回で『のび太のBIO HAZARD』THE NIGHTMARE
RE『の本編は終了です。

AREA 8 『実態』

燐は徐に入社した当時の事を喋り始めた。

「入社した時は、確か1、2年前だったな。知り合いの晃と一緒に入社して行ったんだ。表向きは只のビジネスビルさ。だが今思うと秘密裏に新型兵器を開発する研究員を集めていたんだろう。・・・あたしはその事に気が付いたのは入社して三ヶ月程経った時だった。あたしはとある所で上層部の会話を聞いたんだ。そいつらは、スネ吉と出木杉だった。スネ吉と出木杉はこう言っていた。

「スネ吉総長。例の『ススキケ原T・ウィルス散布及びB・C・W（ビークウ）戦闘データ算出実験』についてですが、事は順調に進んでいるようです。参謀指揮官『ドラえもん』が研究対象に対し、一時避難を施行したようです。僕もおいおいあちらへ向かいます。」と、出木杉が言った後、スネ吉はこう言った。

「報告ご苦労様。君も大変だねえ。僅か10歳でススキケ原研究所の最高責任者である監督官になるなんて。」

「いえ、好きでやっていることですから。」

「そう？まあ、いいや。その内、特殊工作部隊総司令官の『アフイマーサー』を派遣させておくよ。」

それを聞いたあたしはすぐにその企業についてを調べた。すると、その企業の実態が解ったの。でもあたしはすぐにススキケ原研究所への配属が決まった。だからその企業の内部にある銃火器を持てるだけ持ってススキケ原研究所に行った。案の定すぐに例のバイオテロが発生した。他の研究員は突然の事だったから対処しきれなかった。晃もT・ウィルスに感染していた為、自ら死んだ。生き残ったのはあたしだけだった・・・。」

と、燐は言った。すると、のび太が言う。

「でも、生き残っただけ良いじゃないですか。これからナムオアダフモ機関を潰しましょうよ。」

と、のび太が言うと、スネ夫が喋る。

「そうだよ。こっちには、ナムオアダフモ機関が生物兵器の研究をしている証拠が揃っているんだから。」

と、スネ夫が言うと、燐は、反論した。

「いや、それは無理だろう。」

その燐の言葉を聞くと、ジャイアンは、燐に訊いた。

「そりやどういう事だよ？証拠があれば何とかなるんじゃないか？」
ジャイアンがそう言うと、燐が説明する。

「・・・参謀司令官のドラえもんは、政府に話をつけて、中性子爆弾の爆発を原子力発電所の事故に見せかける工作をしたんだ。考えてもみる、政府と話をつけられる様な奴が多少の証拠を提示したぐらいで潰れるとは思えない。」

と燐が言うと、のび太が呟く。

「じゃあどうすれば・・・。」

そののび太が呟くと燐が言う。

「奴らの本社、・・・ナムオアダフモ機関へ赴き、奴らの実態を暴露するのさ。奴らの本社にはもっと多くの新型兵器の資料や実験資料がある筈だからな。」

と燐が言った。

「よっしゃー！さっさと奴等の本社に殴り込みに行って借りを返してやるぜ。」

と、ジャイアンが言うと、スネ夫は情けない声で言う。

「えーと、じゃあ僕は、ちよつと遠慮して・・・。」

と、スネ夫が言いかけると、ジャイアンがすかさず言う。

「何だ？スネ夫、お前、俺様と一緒に来れねえって事か？」
それを聞いたスネ夫は慌てて喋る。

「い、いや、そういうわけじゃないけど・・・。」

と言うと、ジャイアンはすかさず言う。

「じゃあスネ夫は行くなって事だな。」

と、半ば強制的にスネ夫は連れられることになった。続いて聖奈が

喋る。

「では、私達も向かいましょう。私達の町をこんなにしたのは許せません！」

続いて真理奈も喋る。

「そうよ。このまま引き下がれないわ。」

そう言うのと、のび太が喋る。

「でも太郎君は安全な場所に避難していたほうがいい。」

すると、太郎が返す。

「え、でも……。」

太郎がそう言うのと、のび太が太郎に言う。

「大丈夫だよ。太郎の分まで借りを返してくるから。」

そののび太の言葉を聞いた太郎は

「うん、解った。」

と言った。そしてジャイアンが全員に言う。

「よし、それじゃあ脱出したら、太郎を除く全員で、ナムオアダフモ機関に潜入だ!!」

全員ジャイアンの言葉に異論は無いようだった。しかしのび太はある事を考えていた。

(……ドラえもん。彼は何故こんな事を……。それに出木杉君やスネ夫さんも……。彼に事の真実を問いただす為にもナムオアダフモ機関に行かなければ!!)

のび太の胸の中には既に信念が宿っていた。

「あつ、そうだ！皆に見せておきたい資料があったんだ！」
いきなりスネ夫がそう言った。

「なんだよスネ夫、見せたい物つて。」

と、ジャイアンが言う。スネ夫はバッグから何枚かの資料を取り出した。

「これだよこれ！まあ見てみてよ！」

と、スネ夫が言っと、全員はスネ夫の差し出した資料を見た。それにはこう書いてあった。

『《各種生物兵器の特徴及び白兵戦におけるの対処方法》』

1．ケルベロス

『T-ウィルス』により凶暴化した犬。体の大きさは変わっていないが凶暴性は遥かに増している。敏捷性がかなり高く、逃げてもすぐに距離を詰められる。集団で行動する事もあるので注意。対処方法としては、ハンドガンで充分である。自信の無い者もサブマシンガン等のフルオートマチックの銃を使えば無力化出来る筈である。

2．クロウ

『T-ウィルス』により凶暴化した鳥。体の大きさは変わっていないが、凶暴性が増して、集団で人間を襲う。窓ガラスを突き破る事もあるので注意する事。対処方法としては、安全策でいけば遠くからショットガン及び手榴弾。腕に自信があればナイフでもいいかもしれない。

3．ブレインデモス

蠅と人間の遺伝子を掛け合わせた生物兵器。素早く、断続的な動きをする。ただし、羽が著しく退化し、高等な飛翔能力は失われている。主な攻撃方法としては、中距離からの吐酸攻撃、掴み掛かっているの噛み付き& amp;吐酸攻撃がある。対処方法としては、掴み掛かっている瞬間にショットガンやグレネードランチャーによる迎撃が有効。また、熱に弱いので、焼夷手榴弾やグレネードランチャーに装填する焼夷弾が有効。

4．バイオゲラス

『T-ウィルス』によつて、突然変異したカメレオン。とてつもなく巨大であり、3mはある。先端が鋭利な舌と強力な毒牙をもっており、戦闘能力はかなり高い。さらに堅固な表皮に覆われており、防御能力のみで観れば、リミッターの外れた『タイラント』をも上回る。

5・フローズヴィニルト

ゴリラと人間の遺伝子を掛け合わせた生物兵器。知能がそれなりに高く、ハンターをも上回っている。時と場合に応じて、行動を変える事も出来る為、生物兵器として成功作である。筋力が非常に高く、人間の体を引きちぎる事も可能。更に、瞬間的に機動性能を極限まで上げる事も可能。極めつけは、強力な新陳代謝機能で、あらゆる致命傷を回復するというもの。しかしこの生物兵器にも弱点はある。まず、脳を破壊すれば強力な新陳代謝機能は失われ、損傷部位の再生は出来なくなる。更に、体力、防御能力が低く、グレネードランチャー並の破壊力を持つ火器を使えば簡単に始末できる。対処方法としては、グレネードランチャー及び、マグナム、近距離でのショットガンを頭に撃ち込むことである。

6・ハンター

爬虫類と人間の遺伝子を掛け合わせた生物兵器。多少の知能があり、自身の領域テリトリーを生成し、その領域に侵入する人間を殺害するという命令を実行する事が出来る。全身緑色であり、両手には鋭い爪がある。標的を見つけると瞬時に接近し、爪で切り裂く。更に、対象が弱っている時には、首を狩るという恐ろしい力を持っている。対処方法としては、グレネードランチャーに装填する硫酸弾をうまく当てるしかない。更に言えば、先手必勝を心掛けている事。この生物兵器に対しては受け身になってはいけない。

7・ブラックタイガー

毒蜘蛛が『T-ウィルス』によって突然変異し、巨大化した生物兵器。瞬発的な移動性能が高く、銃弾を避けられるのが特徴。更に、口腔から強酸を吐き出す事が出来る。そして尻から糸を吐き出す事も出来る。この糸は体内の粘液から作られるので、粘着力が高く、塩基性である。なので前述した強酸に対しては中和されるので、この糸は溶けない。更に蜘蛛の糸は強度が鋼鉄の5倍、伸縮度がナイロンの2倍があり、ブラックタイガーの糸は直径約5〜6cmなので、墜落したジャンボジェット機も楽に受け止める事が出来る。閉

塞空間での戦闘の場合、強酸よりこの糸に気をつけるべきだろう。然しながら、粘液は熱に弱いので、口の中に焼夷手榴弾を投げ込むか、グレネードランチャーに装填する焼夷弾を撃てば無力化出来るだろう。

8・キメラ

蚤と人間の遺伝子を掛け合わせた生物兵器。普段は天井に張り付いており、空気や地面の振動で目標の大体の位置を補足し、臭いや体温で目標の正確な位置を割り出す。攻撃の際は、相手の死角から飛び掛かり、攻撃する。鋭利な爪があり、高いジャンプからの飛び掛かり攻撃の時に致命傷を喰らう場合があるので要注意である。対処方法としては、熱が弱点なので、焼夷手榴弾やグレネードランチャーに装填する焼夷弾が有効である。

9・タイラント

『アンブレラ社』が開発した、人型の生物兵器。『アンブレラ社』曰く、T・ウィルスでの最高傑作とあるが、我々『ナムオアダフモ機関』が製作したオリジナルのB・C・Wと比較すると、劣った生物兵器である。しかし戦力はそれなりに上なので、注意する事。この生物兵器の特徴は、全体的に皮膚は灰色っぽく、いたる所に血管が露出していて、右胸部には心臓が露出しており、右腕は通常の間と大差ないものの、左腕には異常に発達した鋭い爪がある事である。しかし、敏捷性能は高くなく、討伐は比較的簡単である。しかし、ある程度肉体が損傷すると、体内にある『プログラム・T』が発動し、すべての身体能力が向上、再生能力も最終段階に入り、傷を受けたら、一瞬で再生してしまう為、一撃で止めを刺す必要がある。『アンブレラ』では、この段階に入ることとを『スーパード』と呼んでいる。幸い、爆発物には弱いので、66mm程のロケット弾クラスの破壊力を持つ火器を当てれば、無力化できる。』

「どうやらこれは、生物兵器の弱点等を記したものらしいね。」
と、スネ夫が言うと聖奈が喋る。

「でもこれがどうかしたんですか？」

と、聖奈が喋るとスネ夫が言う。

「いや、一応目を通したほうがいいでしょ。」

と、スネ夫が喋ると、のび太が喋る。

「……でも、こんながあるって事は、ドラえもん達が仕掛けた計画を知っている者がこれを作ったって事でしょ。恐らくだけどドラえもんは大量のB・C・Wをこのススキ原に投入した筈だ。ここの地下研究所で保管していたB・C・Wだけがススキ原に居たとは考えにくい。けどそうになると、この資料を作る理由が解らない。ドラえもんの計画を知っている者はこの研究に直接参加していないわけだし、わざわざ作る必要は無い筈だ。」

と、のび太が言うと、ジャイアンが言う。

「まあ、細かいことはいいさ。それよりスネ夫、資料はこれだけか？」

と、ジャイアンが言うと、スネ夫は応えた。

「ん、まだひとつあるよ。こっちは訳が解らないけどね。」

と、言いながらスネ夫は一つの資料を見せた。それにはこう書いてあった。

『『『 - A・C・A・M』について』

『アンブレラ』で開発された、『タイラント』が、全ての身体能力が向上、再生能力においても、傷を受けたら、一瞬で再生してしまうこの現象は、『タイラント』の体内に存在する、活性細胞『プログラム-T』の影響である事が判明した。『プログラム-T』は、通常は発動しないが、素体のバイタル値（生命反応値）が危機的状況に陥ると、『プログラム-T』が発動し、筋肉組織及び神経細胞の膨張、そして損傷部位の修復を行う。この効果に着目し、人体に投与可能な薬品にしたのが、『（オメガ）- A・C・A・M・（アクラム）』である。しかしこれには欠点があり、上記の『プログラム-T』と全く同じ効果を持っているが、薬効があまりにも強すぎるために、それに適応出来ずに数分で死に至る。それを回避するには、死に至るまでの間に、休息をしなければならぬ。然しながら

ら、全く汎用性が無い訳ではなく、『（オメガ） - A・C・A・M・（アクアム）』は上記の薬効の他にも使い道があり、それは、あらゆる毒物や薬物に完全に適応するという事であり、これにより、人体に対して拒絶反応を起こしていた薬物の汎用化が出来る。然し、これにも問題点があり、『（オメガ） - A・C・A・M・（アクアム）』にはブラックボックスがあまりにも多く、現在では、完全な解析がほぼ不可能となっており、研究は進んではいるものの、実用化には今だ至っていない。』

「確かにこりゃ訳わかんねえな。」

と、ジャイアンは言った。

「資料はこれだけだよ。」

と、スネ夫が言っていると、燐が言う。

「じゃ、全員気を引き締めるよ。行くのは相手の本拠地だ。今までに無い、激しい戦いが待っているはずだ。」

と、燐が言った。全員は決意のこもった目をしていた。

その頃、地上の学校の校庭では、一機のヘリコプターが着陸していた。そしてそのヘリコプターの傍には1人の人物が居た。その人物がヘリコプターに乗り込むと、ヘリコプターは上空に飛び立った。ヘリコプターの中には二人の人物が居た。

「すみません、少々遅れました。ドラえもん様。」

そう言ったのは出木杉だった。ヘリコプターを操縦しているドラえもんは出木杉に話し掛けた。

「大丈夫だよ。こちらもいろいろとあってヘリコプターの起動が少し遅れたからね。」

と、ドラえもんが言っていると、出木杉が言う。

「と、言うと？」

その出木杉の言葉にドラえもんは返す。

「いやあちよつと、社員の・・・燐、といったかな？そいつにちよつと仕掛けを施されてねえ。」

ドラえもんがそう言うと、出木杉が喋る。

「燐・・・。確か研究員の中で唯一の生存者ですか。」

出木杉のその言葉を聴くと、ドラえもんは応える。

「うん、そうだよ。彼女には驚かされる事ばかりだよ。入社して僅か3ヶ月でナムオアダフモ機関の実態に気づき、そして、それを踏まえた上での確な行動をする。これ以上動かれるとまずいから、スキケ原研究所に異動させたんだけど、見事に生き残ったようだね。ナムオアダフモ機関の実態に気づいた奴は他にも何人が居たけど、燐以外の全員はその現実を受け入れなかったから簡単に始末出来たけどね。」

それを聴いた出木杉はドラえもんに訊いた。

「・・・・・・。生き残った者達は、我々のナムオアダフモ機関の本社へ来るでしょうか？」

その出木杉の言葉にドラえもんは応える。

「まあ、ほぼ100%来るだろうね。燐が居るから、すぐにでも来るだろう。本社へ戻ったらすぐに本社に保存してあるパーフェクションB・C・Wの『デストロイヤー』、『ヴァイオレントプラント』、『シエルブルー』を起動するぞ。あとは『ステインガージーン』を使う。」

ドラえもんのその言葉を聴くと出木杉は驚いた。

「！・・・あの細胞をもつ使うのですか？」

出木杉がそう言うと、ドラえもんは冷静な口調で言った。

「うむ。動作に関しては何の問題も無い。・・・・・・。そういえば出木杉君。スネ吉には逢ったかい？」

ドラえもんからその言葉を聴くと、出木杉は応える。

「スネ吉さん？逢ってませんけど、・・・・・・。確かスネ吉さんはこの計画に参加してないはずじゃあ？」

出木杉がそう言うと、ドラえもんが応える。

「その筈だが、どうやらスネ吉が此処に来ていたようですね。まあ見ていないならいいや。」

ドラえもんはそう言った。すると、出木杉は考え出した。

（スネ吉さんか……。彼は紛れも無く天才だ。超高性能のアンドロイド、『ファイマースー』を開発したのは彼だし、ドラえもんをこの計画に賛同させる為に電子頭脳を改造したのも彼だ。僕も一度ドラえもんの電子頭脳の中を見たけれど、どう改造されているか解らなかった。あの人を止めるのは彼等、……。び太君達だと僕は思っている。スネ吉さん、貴方が何を思い、この計画を行っているのかは解らない。だけど、彼等がきつと暴いてくれる筈。僕はそれを信じているよのび太君。）

やがてヘリコプターはナムオアダフモ機関へと着陸した。

AREA 8『実態』（後書き）

こんにちは、この小説では最後の『あとがきルーム』の時間です。今回のゲストはのび太です。

「やあ、こんにちは。やっと一段落ついたって感じたね。」

ああ、そうだな。思い返してみれば執筆してから約1年が経ったんだなあ。

「あ、もうそんなに経ったんだ。」

まあでもまだまだ続編が続くけどね。

「続編ってどのくらいあるの？」

今それを言ったらネタばれになるだろうが。ネタばれは極力避けたい。

「それ言ってもあんまりネタばれになんないと思うけど。」

って言うか、全然ネタばれになんない。でも一応隠しておいたほうがサプライズのものになるから。

「ふ〜ん。一応考えているという訳か。」

まあそんな所だ。

「ま、次回も僕は頑張る事になるんだろうね。」

ああまあな。今回の比じゃないと思うぞ。

「ええ〜。あんまり疲れるのは好きじゃないんだけどなあ〜。」

仕方ない事だ。頑張れ。

「あつ、それはそうと。前にオリジナル小説を執筆するとか言っていなかったっけ？」

その件はだな、取り敢えずは延期だ。この『ドラえもん』の二次創作小説が書き終わったら執筆しようと思う。

「そうか。まあ頑張つてよ。」

勿論だ。それと、そろそろ『あとがきルーム』の終了の時間だぞ。

「そう？じゃ、続編の予告でもして終わろうよ。」

そうだな。じゃ、続編についてだけど、続編は出来るだけ早く投稿

したいと思います。基本的にストーリーはオリジナルです。そして
肝心のタイトルですが、『のび太のBIO HAZARD』『END
LESS FEAR』というタイトルで公開します。今後とも宜
しく願います。それでは、次回までさようなら。

用語事典（前書き）

『のび太のBIO HAZARD THE NIGHTMARE』
に出てきた単語の解説をします。これに載っていない単語があれば、
一言お願いします。

用語事典

・自動拳銃
ハンドガン

箱型弾倉の銃。全ての銃火器の中で最も汎用性に優れており、大抵誰でも扱える。また、装弾数が多いのも特徴であり、大体のハンドガンでは10発以上は装填できる。

・散弾銃
ショットガン

広範囲に弾丸を発射するので、広域制圧用の兵器として使われる。弾薬を一発一発装填する物と、箱型弾倉の物がある。

・短機関銃
サブマシンガン

フルオートの銃。コンパクトで、片手でも扱える。大抵は箱型弾倉で、装弾数は30発程である。

・擲弾発射器
グレネードランチャー

手榴弾を発射する兵器として開発された。銃口から直接装填する物やシリンドーの物などがある。また、アサルトライフルなどの銃身の下に装着できるタイプもある。

・突撃銃
アサルトライフル

フルオート、セミオートを切り換えられ、反動が小さいので、汎用性に優れている。しかし、フルオートにすると、有効射程距離が短くなるという欠点がある。

・大口径自動拳銃
マグナムハンドガン

大口径の弾薬を発射する箱型弾倉の銃。威力が高いが反動もでかい。

・大口径回転式拳銃
マグナムリボルバー

大口径の弾薬を発射するリボルバー。大体は6発装填である。威力が高いが反動もでかい。

・狙撃銃
スナイパーライフル

遠距離への狙撃を目的としたライフル。スコープが付いており、相当距離が離れていても狙撃できる。

・重機関銃
ヘビーマシンガン

高威力の弾薬をフルオートで発射する。ただし、大抵は反動が凄いのので設置型である。

- ・炸裂手榴弾

ピンを抜くと、破片を撒き散らし、爆発する爆弾。閉塞空間では、己にも破片が飛ぶ可能性があるなので、使う場所を選ぶ必要がある。

- ・焼夷手榴弾

ピンを抜くと、炎上する手榴弾。閉塞空間では、火炎が己に降り懸かる恐れがあるので、使う場所を選ぶ必要がある。

- ・閃光手榴弾

ピンを抜くと、強力な光を発して、相手の目を一時的に機能させなくする手榴弾。破壊作用は一切無いので、どんな所でも使える手榴弾。

- ・音響手榴弾
スタングレネード

ピンを抜くと、強力な音と光で相手を傷付けずに無力化する手榴弾。破壊作用は一切無いので、どんな所でも使える手榴弾。

- ・破片散弾榴弾（ボール爆弾）

ピンを抜くと、小型爆弾を周囲に撒き散らし、それぞれの爆弾が一齐に爆発する爆弾。広範囲を制圧するのに使う。

- ・単列式弾倉
シングルコラム

弾薬を1列に並べて収める収納方式で、装弾数は少なくなるものの、弾倉を細く出来るので、銃をコンパクトにする事が出来る。

- ・複列式弾倉
ダブルコラム

弾薬を2列以上に並べて収め、弾倉の全長を抑えつつ装弾数を増す収納方式。装弾数が多くなるのが利点だが、弾倉が太くなるのが難点である。

- ・生物災害

別名『バイオハザード』。遺伝子操作等による新種の生物による災害。今回の場合『T・ウィルス』のせいで生物災害が引き起こされた。

- ・生物兵器

戦闘用アンドロイドや銃火器等を機械兵器というのに対し、生物の遺伝子や体質等を利用して生み出された兵器を生物兵器という。今回の場合、『T・ウィルス』によって遺伝子改変をされた生物が生物兵器である。

・ナムオアダフモ機関

軍事目的による新型兵器開発機関『New Make Of Arms Development For Military Object Organization』の頭文字(N・M・O・A・D・F・M・O)を取り、とある人物によって、ナムオアダフモ機関と名付けられた。ススケ原に『T・ウィルス』の散布実験を行った。

・B・C・W・

化学生物兵器の事であり、Bio Chemical Weaponの略である。読み方はB・C・W・で『ビークウ』と読む。基本的に『T・ウィルス』を基にして造っているが、稀に違うものを基にして造る事もある。

・モデュレイテッドB・C・W・

調整された量産型の化学生物兵器という意味で、低コストで大量生産可能なB・C・W・を指す。例として、『ケルベロス』や『ハンター』等が挙げられる。

パーフェクションB・C・W・

完成型の単独実戦型化学生物兵器という意味で、コストは掛かるが、1体だけでも十分な戦闘能力を誇るB・C・W・を指す。例として、『バイオガラス』や『ブラックタイガー』等が挙げられる。

・A・C・A・M・

暴走時の『タイラント』の体内に存在する、活性細胞『プログラム-T』を抽出し、人体に投与可能な薬品に加工した化学薬品。『プログラム-T』と、ほぼ同じ効果の他、あらゆるウィルスや病原菌、毒物などの内部の器官に影響を及ぼす物質に完全に適合させるという薬効がある。

因みに、『^{オメガ} - A・C・A・M・』という名前は、最終段階という
意味の『^{オメガ}』と、『All Chemical Accommod
ate Medicine』（あらゆる化学薬品に適合させる薬品）
『の頭文字を取って、A・C・A・M・（アクアム）とした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8893h/>

のび太のBIO HAZARD 『THE NIGHTMARE』

2011年8月19日19時55分発行